

デジモンアドベン チャー～Future～

優雅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アーマゲモンを倒してから4年。かつての選ばれし子供たちは平和な日常を暮らしていた。

だが、二人のリーダーの中の一人、本宮大輔はひよんな事から女性にしか動かせないパスワードスーツ。インフィニット・ストラトスを動かしてしまう。

そのせいで、IS学園に入学してしまう大輔とある理由でIS学園に入ってしまったもう一人のリーダー八神太一。

IS学園で新たな冒険が始まる！

目次

オリジナル I S 紹介	1	第 7 話	入学！ I S 学園	59		
プロローグ	5	第 8 話	I S 学園初日！新たな交流	68		
第 1 話	始まりはいつも突然に	78	第 9 話	それぞれの思い	87	
9		第 1 0 話	大輔の夢とイギリスの代表			
第 2 話	I S の秘密	16	候補生登場	95		
第 3 話	登場！二人の専用機	25	第 1 1 話	クラス代表選の始まり		
第 4 話	模擬戦開始！太一 V S 楯無	34	110	第 1 2 話	クラス代表戦開始！大輔 V	
第 5 話	思い出させ大輔！闇にとらわれ		S 太一	118		
ていた少女	48	第 1 3 話	セシリアとの戦い！グレイ			
第 6 話	入学前夜！それぞれの思い		ソウル、本領発揮！	134		

第14話 闇の蠢き | 146

第15話 新たな光 | 159

第16話 青き幻竜！ブイドラモン | 175

第17話 燃えよ！ファイラモン | 190

番外編 更識刀奈ちゃんの冒険

プロローグ | 209

刀奈とゴードルのお兄さんとお餅さん

? | 215

オリジナルIS紹介

グレイソウル

太一の専用機。待機状態は星型のネックレス。

ゲンナイさんによって作られたISの一つ。分類上では、第3世代型ISだが、実はISの世代には入ることができない程のブラックボックスの塊。ISとデジモンの同一性、融合をコンセプトに作られている。

一時移行前は、薄いピンク色をしたIS。コロモンをモチーフにされていたが、一時移行後はアグモンをモチーフとしたISとなった。いる。

ゴグル型のハイパーセンサーに、右腕は展開式のカギ爪。左腕にはアグモンの頭部を元にした特殊兵装「デジローダー」が特徴的。デジローダーは、それぞれのデジモンカードをデジローダーのアグモンの口に入れる事で効果を発揮する。

また、二次移行が^{セカンドソフト}できないが形態を自由に移行できる^{エヴォリユーション・ソフト}進化移行というシステムを持つ。これにより、アグモンをモチーフとした装甲をグレイモンをモチーフとした装甲に進化する。進化する^{セカンドソフト}ことで、そのスペックは大幅に強化される。

デジローダーの効果一覧。

・アグモン（赤縁）↓スピットファイア：小さな炎を連射する

・アグモン（金縁）↓ベビーフレイルム：バレーボールくらいの火炎弾を放つ。

・ガルルモン↓ガルルフアング：両腕を青と白の毛皮で包まれる。その先端には、鋭い爪がある。右手を上、左手を下にすることで爪があわさり口に見えるためフアングと名付けられている。両腕に青い炎を灯して放つフォックスファイアーが使える。

・バードラモン↓バードラモンをモチーフにした弓バードアローが現れる。矢はバードアローに生成能力が存在し、無数に作り出せる。風の力を持ち、空気抵抗を無視することができる。矢に炎が灯り、リムからも無数の炎を放つメテオウイングが使える。

・カプテリモン↓カプテリモンを模したライフル、カプトブラスタターが現れる。威力を抑えた連射型、高火力だが単発型の二種類を使い分けられることができ、現れる兜ではセンサーと聴力の強化ができる。タメの時間は長い、圧倒的な火力を誇るメガブラスタターを放つことができる。

・イツカクモン↓???

・トゲモン↓トゲモンのグローブを柄としたサボテン状のハンマーが現れる。見た目通り軽い、見た目以上に頑丈である。また振り回せば回すだけ、空気中の水分を吸い重量を増し、破壊力が上がっていく仕組みになっている。また、チクチクボンボンのキーワードで針を硬質化させ、たたくと同時に針を刺したり飛ばしたりできる。

・エンジエモン↓???

・テイルモン↓テイルモンの顔をモチーフにしたテイルシールドが現れる。この楯は擬似クロンデジゾイドできており、本物には劣るが大抵の兵器を無傷で耐える鉄壁を誇る。普段は閉じている目を開かせ、放たれた光で相手に偽りの自分を直接投射させるキヤッツアイでトリツキーな戦い方ができる。

ブイフォース

大輔の専用機。待機状態は炎型のネックレス。

ゲンナイさんによって作られたISの一つ。分類上では、第3世代型ISだが、その実はISの世代には入ることができない程のブラックボックスの塊。ISとデジモンの同一性、融合をコンセプトに作られている。

一時移行前は小さな青い装甲でチビモンがモチーフとなっている。一時移行後では、装甲が大きくなりブイモンがモチーフとなっている。特徴的な武装はないが、四肢を大きく使うインファイター型のIS。頭突きも結構武器になる。特殊換装型装甲デジメンタルをデジメンタルアップの宣言で、様々な装甲を変えられる。その際に、現れる2、

3 m程のデジメンタルは楯にも武器にもなれる。またこのISには、まだ解放されていない力が秘めている。

・ 勇気…フレイドラモンをモチーフとした装甲になれる。炎を操り、多彩な肉弾戦や遠距離戦が可能なオールラウンダータイプ。

・ 友情…ライドラモンをモチーフとした装甲になれる。雷を操り、常時イグニッションブーストとも言える速さで動くことが可能。ライドラモンのブレードをモチーフとしたサンダーブレードでの高速戦闘型。

・ 愛情…???

・ 知識…ハニービーモンをモチーフとした装甲になれる。その速さは、ハイパーセンサーも捉えることができないほどの速さを見せるが使いこなすことに難しい上、燃費も悪い。だが、使いこなせばあらゆるISを完封できる性能を持つ。

・ 誠実…デプスモンをモチーフとした水中戦特化のフォーム。地上戦ではもつとも低速となるが、深海の水圧にも耐える装甲は霊距離でレールガンを受けても傷一つない程。

・ 純真…???

・ 希望…???

・ 光…???

プロローグ

そこには一体の異形が存在していた。

「許さない

私は許さないぞ」

その言葉だけが、何度も何度も呟かれる。

異形からはその呟き以外にも、炎が出され、大地を。海を。生命を燃やしていく。

既にこの空間、いやこの世界にはこの異形しか生命は存在しなかった。

存在していた生命は全て、この異形により焼き付かされていたのだった。

「必ず後悔させてやるぞ……選ばれし子供たち!!!」

異形から放たれた怒りや憎しみの感情は漆黒のオーラとなり、どこかへと飛んでしまった。

* * * * *

pipipipipipipipipipi!!!

「んあ……もう朝かあ……？」

めざまし時計の音が鳴り響き、一人の少年が目を覚ます。

少年の名前は本宮大輔^{もとみやだいすけ}。前に、デジタルワールドと呼ばれる電脳世界とリアルワールド

を救ったという経歴以外は普通の少年だ。

「ん……もう五分……」

めざましは鳴り続かなかでも、大輔は再び自身に襲いかかる睡魔に身を任せ、眠りに

つこうとするのだった。けれど、そんな大輔を起こそうとする存在がひとつ。

「だいすけ……。あさだぞぞ」

顔からお腹までが白く、それ以外の部分が青く二本の触覚の様な角に尻尾を生やしたこの世のどの動物にも分類されない存在。デジタルモンスターのチビモンだ。

「ほら、だいすけ。おきろろー！」

小さな両手を使い揺るも、起きようとしないうち大輔に痺れを切らせたのか、チビモンは大輔の上へ乗り飛び跳ねるのだった。

「いて……いて……いら、チビモン！俺の上で飛び跳ねるな」

「むく、こうでもしないとだいですけがおきないのがわるいんだろ！」

「なんだと！」

さすがに寝ている最中に、飛び跳ねられて起こされれば機嫌は悪くなるだろう。

起こしてくれたのにも関わらず、怒る大輔に対してチビモンも怒りを見せるのだった。

今にも暴れだしそうな二人。だが、二人の喧嘩はすぐにも終わることになる。

「うるさい！大輔！あんた、朝っぱらから何騒いでるのよ!!」

「げえ、姉ちゃん！」

「あつ、じゅん。おはよー」

扉が壊れてしまいそうなほどに強く開け放たれ、大輔の姉もとみや本宮ジュンが現れる。その後ろには、彼女のパートナーデジモンであるドルモンが顔を出していた。

「まったく…あんたってば、何も成長してないわね」

「んなことねえよ！俺だって、ちゃんと成長してる！」

「はいはい。そんなことはいいけど、時間。大丈夫なの？今日は受験の日でしょ？」

ジュンの言葉にくっついてかかっていた大輔だが、ジュンのその一言で固まってしまふ。

ギギギギ、と錆びた機械のように顔を時計の方向に向けると既に結構な時間が経ってしまった。

「う、うわー！遅刻だあ！」

「ちよ、あんた！レデイがいる前で、服脱がないの！」

「ジユン。そんなこと言ってる前に、部屋から出ましょ？」

慌てて着替えをはじめの大輔。直ぐさま、お台場中学の制服に着替え、カバンを持つと部屋から出ていってしまう。

「だいすけ、がんばれ〜」

部屋に取り残され、脱ぎ捨てられた寝巻きに埋もれていたチビモンは小さく手を振る。

何気ない日常。

だが、この日から彼らの新たな冒険が始まろうとしているのだった。

第1話 始まりはいつも突然に

時は2月。受験シーズン真っ只中、ある会場には多くの受験生が集まっていた。

これは、近年。カンニングの増加を対策するために、受験生を集め、様々な学校の教師たちで監視するという人海戦術を用いた対策方法だ。最低でも、人部屋には二人。多い所では四人の教師に監視されながらも、筆記試験を受けなくてはいけないのだ。

だが、その結果会場にはかなりの広さを持つ必要があった。その為、何が起きるのかというところ……

「やべえ……迷った……どこだよ、藍越学園の試験会場……」

ここにいる一人の受験生、本宮大輔のように試験教室にたどりつけない受験生もいるのだった。

「くそっ……どこだよ……」

自分がどこに行きたいのか、むしろ自分が今何処にいるのかすら分からない大輔は途

方にくれていた。

運が悪いことに、さつきから誰とも合うことができず道を聞くことができないでいた。

「あつーな、なあ、少しいいか!？」

「ん?」

そんな大輔に声をかける人物がいた。

見たところ大輔と同年代の男。学生服を着ているところから、同じ受験生だとわかる。

「藍越学園の試験会場ってどこなんだ!？」

「……………そりゃ、俺が聞きたいぜ」

そして、同じ迷子だった。

* * * * *

「はあ…今、どこにいんだよ…」

未だに藍越学園の受験会場を探し、迷子になっている大輔と今さつき出会ったもうひ

とりの迷子、おりむらいちか織斑一夏。

試験会場どころか、現在自分たちがどこにいるのかすら分からずに落ち込んでいた。

そんな中、一夏はいきなり大声をあげる。

「あ~~~~もう!~~~~こうなったら、目の前にあるこの部屋に入る!~~~~だいたいそれが正解なんだ!」

「あつ、おい待てよ!」

ついに痺れを切らし、どこの部屋かすら分からない扉を開き入っていく一夏。そんな一夏を追いかけて、大輔も同じ部屋へと入っていった。

「あく、君たち受験生?なら、さっさと着替えて頂戴。まったく:~時間もないのに、なんで受験会場がここしかないんだか:~」

中に入ると、何やら試験管と思わしき女性が書類を片付けながら答えていた。

何故筆記試験で受験を?とお互いに疑問に思ったのか、顔を見合わせるがカンニング対策だろうと納得し、部屋の奥へと歩いて行った。

すると、奥の方にひときわ目立つ物だ置いてあった。

「な、なあ:~織斑:~あれって」

「あ、ああ。あれって:~インフィニット・ストラトス、だよな?」

そこに置いてあったのはインフィニット・ストラトス、通称ISと呼ばれるワード

スーツだ。

現在では、ISに勝てる兵器は存在しないが、兵器運用を禁じ、スポーツとして扱われている物だ。

だが、このインフィニット・ストラトスには、最大の欠点があった。それは、インフィニット・ストラトスは女性にしか扱えないのだ。その性で、世界最強とも言えるスペックを扱える女性の地位は上がり、男性の地位が下がってしまった、女尊男非という風習が広まってしまったのだ。

「すっげ…ISなんて初めて見た」

「おい、勝手に触るなって！」

「別に大丈夫だろ。ISは女性にしか使えないじゃないか。それに、生のISに障れる機会なんて俺たちにはもう二度とないだろ」

「そう言われりやそうだな…んじや、俺も」

もう二度と生で見れないなら、なんて考えで置いてあったISに触れる大輔と一夏。

だが、そんな気楽な考えがダメだったのか。二人がISに触れた瞬間、ISが起動したのだ。

「お、織斑!!お前、何でISを動かしてんだよ!」

「本宮!!お前だつて…」

「はあ!? まじかよ!?」

「ちよつと、うるさいわよ!」

男なのに I S を動かしてしまった性で、困惑する大輔と一夏。

突然のことで、騒いでしまったのがいけなかったのだろう。その声を聞きつけて、試験管の女性が来てしまったのだ。

「うそ…なんで男が I S を…!?!」

「そんな…ありえないわ!?!」

驚愕な表情で呟く試験管たち。

大輔と一夏の二人が、I S を動かしてしまったことは瞬く間に広がってしまったのだった。

* * * * *

「その男子! 今すぐにとまりなさい!」

「だあーっ、くっそ! なんでこうなんだよおー!」

ISを動かせることが発覚してしまった大輔は、現在試験会場を逃げ回っていた。

二人がISを動かせたことは既に、様々な所に広まってしまった。たった1時間しか経っていないのだが、この会場で行われていた試験は全て中止になり、IS関連の科学者や放送局の人々で溢れかえっていた。

その中には、大輔の事をモルモットの様に見ている科学者もいた。

大輔はそんな科学者たちから逃げているのだった。

「大輔くん！こっちだ！早く!!」

「！タケルとヤマトさんの父ちゃん!」

逃げ回る大輔を庇う人物がいた。その人物は大輔の仲間である高石たかいしタケルと石田いしだヤマトの父親だった。彼はフジテレビで働いているため、報道のためにここに来ているのだ。

タケルたちの父親に言われるがまま、彼が開けていた部屋の中に入る。

そこには、ただ机とパソコンが置いてあるだけの簡素な部屋だった。

「げえ!!これでどうやって逃げろってんだよ!!」

そう、その部屋には窓すらなく、この施設から逃げることでどこか部屋から出ることはできないのだった。けれど、どこからともなく声が響き渡る。

『大輔！いるか!?!』

「この声…太一さん!? そうか! パソコンか!」

『早くこつちにこい! 大輔!!』

パソコンの電源が急に入ると、そこには一人の青年の姿が映っていた。その青年の名前は八神太一。

大輔よりも早くデジタルワールドを冒険し救った選ばれし子供たちのリーダー的な人物であり、大輔の尊敬する人物でもある。

大輔はポケットから自身のデジヴァイス、D-3を取り出しパソコンに向ける。

「デジタルゲート…オープン!」

その声と同時に、パソコンから光が漏れ出す。

大輔はその光に吸い込まれるように、パソコンの中へと消えていったのだった。

それから少しして、大輔を探していた研究員がこの部屋の中に入ってくるのだった。

第2話 ISの秘密

デジタルワールドのとある場所にある和風な屋敷、そこにはかつてデジタルワールドを救った選ばれし子供たちが集まっていた。

「大輔、あんたなにやってんのよ?」

「う、うるせえ!男がISを動かせるなんて思わないだろ」

「ですが、それでも勝手に触れるのはどうかと思いますよ」

「うぐつ…」

「まあまあ。京さんに伊織くん」

「誰だつて動かせるつて思わないから仕方ないわ」

太一に連れられ、ここにやってきた大輔を囲んだのは、共にデジタルワールドを冒険した仲間たちだった。ひとつ上でおつちよこちよいの井ノ上京^{いのうえみやこ}。ひとつ下だがしつかり者の火田伊織^{ひたいいおり}。同級生で選ばれし子供たちの最初期メンバーの高石タケル^{たかいし}に八神ヒカリだ。

このメンバー以外にも、デジタルワールドを救った選ばれし子供たちが全員集合していた。

年が経つにつれ、メンバーがなかなか集まることができず、前に全員集合できたのも1年以上前だった。

「やあ、来てくれたようだね」

『ゲンナイさん!』

選ばれし子供たちの前に現れた青年、ゲンナイはデジタルワールドの安定を望む者に使える自立エージェント。選ばれし子供たちの冒険のサポーターであり、デジモンが現実世界で暴れたときの情報改善などを行っている人物だ。

「今回君たちに集まってもらったのは他でもない。大輔くんの事とインフィニット・ストラストスについてだ」

「なあ、ゲンナイさん!どうして俺がISに乗れたんだ!？」

「そうだね…そのことを言うなら、まずはISについて話さなければいけない」

「ISについてですか?」

ゲンナイの言葉に真っ先に食いついたのは、メンバーの中で一番の頭脳派ともいえる青年泉光子郎だ。

「ああ。まずはこれを見てくれ」

そう言つて、ゲンナイが両手のひらを見せるとその上にそれぞれ小さな球体のホログラムが浮かび上がった。

そのホログラムは急に中身が見えるようになる、二つが重なるように合わさった。

「これは……この二つのプログラムが似ている……いや、瓜二つなのか？」

「そうだ。片方はI Sのコア。そして、もう片方はデジモンたちのコアだ」

『なっ!?!』

ゲンナイが言った事实に、メンバーは驚愕の表情を示した。

いくら頭が良いとは言えない大輔とはいえ、世界の一般常識になりつつあるI Sについては多少は知っている。そして、その中でもコアがブラックボックスの塊で、製作者にしか作れないこともだ。

だが、ブラックボックスの塊なもの、デジモンのコアでできているとなると納得もできらるだろう。元々、デジタルワールドもデジモンも、人の思いとデジタルなデータが合わさって出来ている。現在の科学力で解析できるものではないのだから。

「そ、それじゃあI Sはデジモンに近いって言うことなの!?!」

「楯無くんの言う通りだ。現に、I Sにはコア事に人格が宿っている。さらには、ファースト・シフト セカンド・シフト 一次移行や二次移行はこちらで言う進化と同じなのだ」

メンバーの中で、一番の驚きを見せた更識楯無さとしきたるなはさらなる事実言葉に言葉を失った。楯無はメンバーの中で、最もI Sと関わっている。というか、I Sを学ぶI S学園に通っているからこそ、この真実に驚きを隠せないのだ。

更識楯無：本来ならば、存在しなかった選ばれし子供だ。彼女は太一たちがデジタルワールドに始めていったデジタルゲートに巻き込まれてしまったイレギュラーな存在だった。デジモンと分かり合っていた彼女はゲンナイが急遽作ったデジヴァイスと楯無自身が見つけたパートナーになつてくれるデジモンとの出会いにより生まれた1999年の9人目の選ばれし子供だ。

「で、でも、なんでゲンナイさんはISについてそんなに詳しいんだい？」

「実はね。ISが出来て以来、私は直ぐさまISがこちらに近いものだと勘づいたんだ。もしISがデジモンに近い物ならば、できるだけ事実を隠さねばならない。その為に、ISについて調べるために私の仲間たちが現実世界でISを研究するために工場を作り研究しているんだ」

「そんな事までしていたんですか!？」

驚きのあまり、呆然としていの中で真つ先に我に返ったのは最年長の城戸丈^{キトシヨウ}だった。

次に我に返った一乗寺賢^{いちしょうけん}もゲンナイたちエージェントの行動力に再び驚きを見せていた。

「で、でも、それじゃあ何で大輔くんはISに乗れたの？」

「…ええ。今までの話を聞く限り、大輔くんや女性が乗れる要素は無いわよ」

けれど、話を聞く限り疑問に思うところがあった。

I S コアはデジモンのコアと一緒に。ならば、何故大輔や女性が乗れるのか？その疑問に気がついたのは太刀川^{たちかわ}ミミと武之内^{たけのうち}空だ。

「そうだね。デジモンのコアについては、君たち全員に存在しているよ」

『はあ!』

本日何度目か分からない驚愕の真実を何気なく言われた。

「君たちは、デジタルワールドで冒険をしているうちに、自身のデータ…ここでは、魂と言おうか。魂がデジタルワールドに適應するために知らず知らずのうちにデジモンのコアを作り出したんだ。もしそのコアがなければ、君たちはデジタルワールドでは体を保てずにデータに分解されているところだね」

「…平気で怖いこと言わないでくれ」

もし自身にデジモンのコアと同じものがなければ今頃、0と1のデータに分解されると知って以前同じ経験をしたことのある石田ヤマトの顔は青ざめていた。

ヤマトだけではない。自分たちを0と1のデータに分解したアポカリモンと戦ったことのあるメンバー全員、顔が真っ青になっていたのだ。

「まあ、元々こちらに来ればデジモンのコアが出来るとはわかりきっていたことだがね。はっはっは」

『先に言え!!』

「それと、女性が乗れる理由は使われているＩＳコアには女性型デジモンのコアが使われていることまで判明している。その中で、女性型というデータがＩＳに女性が乗れる理由だと推測しているんだ。けれど、もう一人。織斑一夏くんについてはわからない。さて、それは置いといて。大輔くん」

「あつと、はい！」

今まで和やかだったのにも関わらず、急に真剣な顔をするゲンナイに声をかけられついで大輔は緊張した表情を表す。

ほかのメンバーも同じく、真剣な表情をしている。

「私たちの工場で君の専用機を作らせてもらいたい」

「はい！……つて、専用機？何の？」

「ふふん、大輔くん。専用機って言うのは、言葉の通り。君専用のＩＳの事よ。専用機を持てるのは、企業のテストパイロットや国家代表、及び候補生しか持てないの。結構責任重大なのよ？企業や国の看板を背負わなくちゃいけないんだから。でも、そうね。ゲンナイさんたちなら信用できるしいいと思うわよ。どつかの企業とかで引つ張りだここにされるよりずっと安全だわ」

「さすがに、ロシアの国家代表の楯無くん。この危険性をよくわかっている。できれば、専用機に乗ってＩＳとデジモンの関連性について調べる手伝いをしてもらいたい

んだ」

「ま、マジですかあ……」

ことの重大さがどんどん増して行き、肩をすくめる大輔だった。

そんな大輔を太一が励ましていた。

「まあまあ、どんまいだな。大輔」

「ううっ、太一さく……」

「俺たちじゃどうしようもできないし、できることならするから泣くなよ」

「おや、なら太一くんにも頼もうかな」

「へ？」

「実は、私たちの工場にあるI Sコアは二つあってね。もう一人、このコアで専用機をもつて欲しかったんだ」

「あつ、それはいいわね！」

口は災いの元。まさしく、その通りだった。

つい何でもすると言ってしまった、さらにはこちらに助けを求めている後輩を見捨てられずに断るに断れなくなってしまった太一だった。

そして、太一の専用機持ちにいち早く賛成したのは楯無だった。

「太一さんが専用機を持つなら、I S学園に入学になるし……そうすれば一緒に……うん、

そうしましょ！太一さん！」

「ちよ、なんでそうなるんだよ！だいたい、俺はもう高校卒業したのにIS学園に入学できるわけないだろ！」

「だいじょうぶ！ISが動かされるなら特例で入学できるわ！むしろ、してみせる!!」

「楯無がどう頑張ったって、無理だろ！さすがに！」

「平気よ！だって私、IS学園の生徒会長だもの!!」

「平気じゃねーって！」

「…やっぱり、太一お兄ちゃんは私と一緒に通うの…：嫌…：？」

「うっ…」

急に始まった太一と楯無の口論に、誰も口を出せなかつた。いや、出さなかつた。ただ向けるのは、微笑ましい光景を見守る暖かい目だった。

口論の中、急にしよぼくれる楯無。彼女が初めてデジタルワールドを冒険したとき、妹のヒカりに近い年だったためについヒカリ同様過保護…と言えそうなレベルで面倒を見てくれた太一の事を幼い頃はお兄ちゃんと呼んでいた。そして、今でもしよぼくれたり悲しいことがあったときは太一のことをお兄ちゃんと呼ぶのであった。

涙目の上目遣いでこちらを見る楯無に、つい保護欲を駆り立てられた上で、周りからの冷たい視線にいたたまれない気持ちになる太一はついに折れるのだった。

「はあ…わかった。わかったよ！俺もIS学園に入学するよ」

「っ！ありがとう！太一お兄ちゃん!!」

「だあーっ、抱きつくくな！」

喜びのあまりに太一に抱きつく楯無。

彼女のふくよかな部分が触れてしまい、顔を真っ赤にしながら太一は楯無を引き剥がすのだった。

この日、世界に3人の男性IS操縦者が現れることになるのだった。

第3話 登場！二人の専用機

大輔たちがI Sを操縦できるとわかってから、既に一ヶ月が経った。

あれからは、様々な科学者や報道者が彼らの家に押しかけていたり、外に出れば周りから注目を受け、科学者と報道者に見つかり追いかけられてしまったりと、散々な日々を過ごす中、大輔と太一はゲンナイたちが作った会社『ホメオスタシス』に来ていた。

「やあ、待っていたよ。二人とも」

「ちわつす、ゲンナイさん」

「んで、俺たちを呼んだ理由ってのは何なんだ？」

「実はね。君たちの専用機が完成したんだ」

「まじつすか!？」

「…早すぎだろ」

ゲンナイが二人の専用機を作ると言ってから一ヶ月。このたった一ヶ月の間で、専用機を二つも作れたことに太一と大輔は驚きを隠せなかった。

「私たちは元々、デジタルワールドの安定を望む者仕えていたからね。あの程度のプロ

「グラミングなら簡単さ」

「はあ……もうおどろかぬぞ」

「つと……そんなに簡単なんすかね?」

ISのプログラミングをあの程度と言ってしまうゲンナイに、驚きを越して呆れを感じてしまっている太一とあまり分かっていないような大輔。二人のISに関する知識は、この時点で差ができていくのがわかる。

「まあ、前置きはこのくらいにして。さあ!これが君たちの専用機さ!」

一歩横にずれたゲンナイは、今まで自分の後ろだった方に手を向ける。

大輔と太一は、つられてその手の方向を向くと、締めきっていたシャツターが開き、二つのISが姿を現した。

一方は、薄いピンク色の装甲が目立つIS。もう一方は、深い青色の装甲が目立つISだ。

「これが……俺たちのIS!?!」

「なんつーか……あんまりパツとしないなあ」

この二機のISは見た感じ、装甲の薄さが目立っていた。

機械的な角ばったフォルムではなく、どことなく義手や義足を思わせるような丸くシンプルなフォルムだ。

「ははっ、パツとしないのはこの二機がまだ一次移行前だからね。デジモンファースト・シフトというなら、まだ幼年期なんだ」

ゲンナイの説明を受けて、二人は思わず「なるほど」と納得した。

デジモンには世帯が存在し、幼年期Ⅰ、幼年期Ⅱ、成長期、成熟期、完全体、究極体の順に強くなっていく。その中でも、幼年期と括りつけられている世帯では、大抵まるいまんじゅうを思わせる姿のデジモンが多いのだ。

「さて、この薄いピンク色のⅠＳが『グレイソウル』。太一くんの専用機だ。そして、こっちの青色のⅠＳが大輔くんのⅠＳ。『ブイフォース』だよ」

「グレイソウル…か」

「ブイフォース…俺のⅠＳ…」

ゲンナイの紹介で、自分の専用機がわかった二人はそれぞれの相棒となるⅠＳに触れた。

その装甲からは、冷たいはずなのだがどこもなく暖かさを感じていた。そう、この二つのⅠＳが生きているかのように。

『太一』

『大輔！ やっほー！』

「どわ~~~~~!!?」

自分たちのISに触れていると、急にISから聞き覚えのある声が聞こえた。

太一は大声をあげ後ずさるが、大輔はいきなりの事で尻餅をついてしまう。そして、震える指先でISを指差した。

「げげげ、ゲンナイさん!?! ISが喋ったんすけど!?!」

「ど、どういふことだよジジイ!!」

「はっはっは、期待通りのリアクションをありがとう。それと太一くん、私はもうジジイではないよ」

いきなりの事で、太一はつい昔呼んでいた呼称でゲンナイのことを呼んでいた。ゲンナイは前、ダークマスターズと呼ばれた暗黒デジモンのピエモンによりウイルスと思われる黒い物体を植えつけられてしまった。その影響をのがれるために、老化していたことがあったのだ。

ゲンナイは、イタズラが成功した子供の様な表情で説明を始める。

「ISはデジコアに近い物が使われていることは話しただろう。ならば、そのコアを元にIS内に管制人格ともいえる意識が生まれると考えているんだよ。そして、このISにはそれぞれ管制人格に彼らになってくれているんだ」

「か、彼ら…」

「君たちのパートナーデジモンだよ」

ゲンナイのその言葉に、ISを凝視する二人。

すると、ISが光を放つとそれぞれ二人のパートナーであるアグモンとブイモンが姿を現した。

「太一く、そんなに驚くことはないよ〜」

「あつははは！大輔のあの驚き顔！サイコーだぜ」

「なっ！なんだと〜、ブイモン！」

「アグモン！どこもおかしいところはないのか!?!」

「うん、大丈夫だよ。むしろ、ひだまりの中みたいであつたかいよ」

現れたデジモンたちは太一と大輔の元へと歩いてくる。

アグモンはマイペースに話しかけられるが、ISの中にいたという事実からどこかおかしな所がないか太一は心配し、さっきの驚いた顔がおかしかったのか爆笑しているブイモンを大輔が捕まえようとし、追いかけてこが始まっていた。

そして、しばらくして二人と二匹も落ち着くのだった。

「にしても、まさかISの中にデジモンが入れるとは思わなかったな」

「別に驚くことではないさ。君たちがデジタルワールドに行くように、アグモンたちもISのコアに入っただけだからね」

「まあ、ネットの中にも入れますしありえないことじゃないっすね」

「でも、これで太一とずっと一緒にいれるよ」

「今まで俺たちって、外歩くこともできなかったからなく。前は、幼年期の姿でバックに詰められたっけ」

ブイモンたちはデジモンが外を歩けばパニックになるからこそ、中々外に出られなかった事があつた覚えがあつた。もちろん、中には例外として現実世界でデジモンが暴れる時には出てたこともあつたが基本的にはデジタルワールドかデジモンを知っている家の中だけだつた。けれど、これでISの中に入れば太一や大輔たちといられることに喜びを感じているのだつた。

「さてと、それじゃあそろそろファイティングと一次移行ファースト・シフトを行おうか」

「んじゃあ、どうすりゃいいんですか?」

「まずは…アグモンとブイモンは、コアに戻ってくれ。そしたら、ISに背を預けるように乗るんだ」

「おっけ」

「了解!」

「わかった」

アグモンとブイモンは、またさっきのように光に包まれるとISの中に入っていた。

それを確認した二人は、ゲンナイが行っていた通りにそれぞれの専用機に乗り込んだ。

すると、どこからともなくゲンナイと同じ姿をした二人がそれぞれのISのフィツティングを行い始めた。

『太一く、調子はどう?』

「ああ、まったく問題ないぜ。アグモン」

『大輔は大丈夫だよな』

「もちろん、平気だ」

「これが終わったら、二人には模擬戦をしてもらおうよ。それで、ISになれながらファースト・シフト
一次移行を行って欲しい」

「模擬戦つすか? 太一さんとやればいいんですか?」

「いいや違うよ。君たちの相手は彼女らだ」

ゲンナイがそう言い切ると、空中ディスプレイが二人の前に現れた。
そこには、太一たちと同じ選ばれし子供の更識楯無がいたのであった。

『やつほー、太一さん。大輔くん』

「楯無!?! お前が相手なのか?」

『うん、そうだよ太一さん』

「でも、いくら初心者の俺たちとはいえ楯無さん一人で二人相手はキツいんじゃない?」

『だいたいぶ、だいたいぶ。私の相手は太一さんだけで、大輔くんの相手は他にいるわ』

「え、それって誰ですか?」

『ほーら、かんちゃん!隠れてないで出てくるの!』

『きや……お、お姉ちゃん……まって……』

楯無に引つ張られてモニターに映った少女は、楯無と同じ青い髪に赤い目の少女だった。

その少女を見て、大輔はどこか会った事がある覚えがあつた。

『この子は私の妹の簪ちゃんよ。かんざしそういえば、しっかりと紹介するのは初めてだったわね』

『更識簪……です。……その、よろしくお願いします……八神さん、本宮さん』

「おう。俺は八神太一。太一でいいぜ。ほら、大輔も。なに考え込んでんだよ」

「あつ、すみません太一さん。俺は本宮大輔。俺も大輔でいいぞ」

『それじゃ……私も、簪で……太一さん、大輔さん』

「自己紹介も終わったようだね。二人のフィッティングも終わったし、模擬戦に移るとするよ」

ついに、太一と大輔の初めてのIS戦が始まるのだった。

第4話 模擬戦開始!太一VS楯無

ISに慣れるために、模擬戦をすることになった太一と大輔。

その二人の相手は、選ばれし子供の一人である楯無とその妹の簪が務めることになったのだった。

そして、今まさに模擬戦が始まろうとしているのだった。

* * * * *

「それじゃあ、まずは太一さんと楯無くんの模擬戦から始めるよ」

「なあ…ゲンナイさん」

「どうしたんだい、太一くん」

模擬戦を開始しようにも、選手である太一が何故かうつつむいていた。

ゲンナイは何故そのようになっていのか分かっていなかった。

「どう考えても勝てるわけないだろジジイ！相手はあのロシア国家代表の楯無だぞ！初心者が相手するにはハード過ぎるだろ!!」

「はっはっは、問題ないさ。君たちなら。それにね、別に勝って言うてるわけじゃないのさ」

「問題ないって…どういう意味だよ？」

「ISの操縦はイメージが必要だからね。君たちには、人型が飛んで戦うイメージが十分できてるだろう？」

そう言われると、何故か動かすのに大丈夫な気がしてきた二人だった。

太一の中には、自身のパートナーのアグモンの最終進化系であるウォーグレイモンが。大輔の中には、自身のパートナーが一度だけ進化したデジモン、マグナモンの姿が浮かんだ。

それぞれ、人型であり、まもっている鎧や翼のような盾を持つが羽を使わずに飛行する姿がどことなくISを用いて飛んでいるように思えば、自身がISを使って飛んでいるイメージにじっくりきていた。

それだけでなく、エンジエモン、ガルダモン、リリモン、エンジエウーモン、エクスブイモン、ステイングモンなど翼を持つものの人型で空を飛ぶデジモンを多く知っている

る分、飛行のイメージが大分もてている二人でもあった。

「それじゃあ、待たせるのも悪いし、太一くん。行つてきなさい」

「頑張つてください!太一さん!」

「大輔…ああ!行つてくる!」

カタパルトに乗り、飛び出されると同時に脚部にあるスラクターを吹かし、太一はアリーナに飛び立つのだった。

アリーナに飛び立った太一を出迎えたのは、自身の専用機霧纏ミステリアス・レイディの淑女を纏った楯無だった。

「ふふつ、待つてたわ、太一さん。まさか、太一さんとISで戦うことになるなんて思つてもみなかったわ」

「全くだぜ…何でこうなつちまつたんだか…」

『聞いてた話だと、太一の自業自得だと思ふよ』

「うっせ…アグモン」

「にしてもいいわね。ISの中にパートナーがいるのつて。今度、私もゲンナイさんに頼んでみようかしら」

太一と楯無は、お互いにアリーナの指定位置で軽口を叩いていた。

何気に、太一は既に空中浮遊と移動を難なくこなしている。本来なら、初めてISを

動かせば歩くことですら困難な筈なのに、驚異の学習能力だ。これも、しっかりとイメージを固めているからである。

そんな中、二人の目の前に3つのランプが浮かび上がる。

「どうやら、軽口をたたけるのはここまでだよだな」

「ええ。言つとくけど、手加減はしないからね、太一さん」

「当たり前だろ。やるからには真剣勝負だ」

『僕もしつかりサポートするよ』

話してるうちに、ランプが一つ、二つと点灯していく。

そして、最後のランプが点灯すると同時に開幕を告げるブザーが鳴り響く！

「はあああああつ！」

「危ねえ!？」

ブザーがなると同時に、動き出したのは楯無だった。蛇腹剣「ラストイー・ネイル」を構え、太一へと突っ込んでくる。

それを予測していたのか、太一は楯無と比べて遅いものの上に逃げるように躲いだった。

「いきなりやってくれるな…楯無」

「けど、太一さんはわかってた癖に。それと、今は二人つきりだから、私の本当の名前で

呼んで」

「わかったよ…刀奈^{かたな}」

刀奈。それは、楯無の本来の名前だ。

更識家は、かなり特殊な家庭である。今は、その内容を詳しく話さないが、更識の当主となるということは自身の名を捨て、襲名である楯無を名乗ることになるのだ。

楯無がデジタルワールドを冒険した頃は、まだ小学三年生の頃だった。だから、選ばれし子供たちは全員、楯無の本名を知っているが楯無の名前の意味も知っているからこそ、刀奈ではなく楯無と読んでいるのだ。だが、中でも太一だけは二人っきりの時には刀奈で呼んで欲しいと頼まれているのだ。

「それじゃ、どんどんいくわよー」

再び楯無は、ラストイー・ネイルを構え、太一に斬りかかる。

太一は時には躲し、時には装甲で受けていき、ISのシールドエネルギーをできるだけ守っている。だが、何度も同じことが繰り返されているが、徐々に楯無の攻撃を無駄な動きなく躲す事が多くなっていった。

(さすが太一さん…思ってたよりも、ISに慣れる速度が速い!)

(くそっ…今のままじゃ、なんにも武器がないから避けることしかできない!アグモン、まだか?)

「このままだとシールドエネルギーを削り切るよりも、太一さんがISに慣れる方が速い……だったら、別の攻撃方法で意表をつく！」これで！」

「なあ!!？」

先ほどとは違い、5 m程離れた位置で楯無がラスティイー・ネイルを振るうとラスティイー・ネイルから水流が太一目掛けて流れ出てきた。

剣から水流が出るという、現実離れた光景に太一は意表を突かれ、一瞬反応が遅れてしまった。なので、躲しきれないと判断した太一は両腕をクロスさせ水流を耐えるところにするのだった。

だが、ラスティイー・ネイルから流れる水流は圧縮された高圧の水流。水流をうけた太一の腕の走行は砕け、太一自身5 mも吹き飛ばされてしまった。

「ぐっ……装甲がやられたのかよ……」

「もらったわ！」

「……………そこだ！」

吹き飛ばされた太一は、急ブレーキをかけるように空中で止まった。それと同時に、現在の装甲の様子、グレイソウルのシールドエネルギーの残量をすぐさま確認するのだった。

その際に楯無はラスティイー・ネイルを構え斬りかかってくるのだった。

太一は楯無を一度見ると、目を閉じ、開くと同時に斬りかかってくる楯無を無視して後ろに回し蹴りを放った。すると、ラストイー・ネイルとは違いランスである【蒼流旋^{そうりゅうせん}】を手にした楯無の脇腹に当たるのだった。

後ろにいた楯無に回し蹴りが当たると、ラストイー・ネイルを構えた楯無は水となり崩れ、持っていたラストイー・ネイルはそのまま落ちていった。

「つつー……よくわかったわね、太一さん」

「当たり前だろ。目の前の刀奈からは存在感がしなかった。はつきり言っちゃえば、幻のような感覚だったからな。しかも、後ろから刀奈の気配がするし。直ぐに、わかった」

「…そんな非科学的な事で水分身が敗れるのは太一さんくらいよ」

「そうか？ 刀奈や大輔とかできそうだけだな。それに、俺が刀奈を間違えうわけ無いだろ？」

「はうっ?!?!」

太一はデジタルワールドの冒険で、幼いながらも未知の世界でのサバイバルを経験していた。何度もデジモンに襲われ、道中でも襲われないか警戒していたからこそ、これほどの技量を得ることができたのだ。だが、今まで争いがなく平和ボケしていたからその技量が眠ってしまったが、自身よりも格段に上位に位置する楯無との戦いで、眠っていた技量が蘇ったのだ。

あまりにも非科学的な行為で、自身の水分身を見破られ落ち込んでいた楯無だったが、太一の一言で顔から蒸気が出るくらい赤く染まっていた。

「そそそ、そりえはどーゆうこにゃの、太一ひゃん!!」

「どうしてそんなに嘔んでんだよ。当たり前だろ？俺が仲間のこと、間違えるわけないだろ」

「あ……そういうことね……」

言葉を何度も嘔んでしまう程、取り乱していた楯無だったが、再び太一の一言で落ち着きを取り戻した。さっきの言葉で、まだ顔は赤くなっているものの目に見えて落ち込んでいる。

それを見た太一は、何故楯無がこうまで取り乱しているのか分からずじまいだった。

「どうしたんだよ、刀奈。もしかして体調でも悪かったのか？」

「う……もうっ！太一お兄ちゃんの馬鹿あ……っ！！」

「へっ……っ」

乙女の純情を（無意とはいえ）弄ばれてしまった楯無は、ついには若干幼児退行しながら上目遣いで睨みつけ、太一を罵倒すると同時に指を鳴らした。

すると、太一の周囲に霧が集まると、爆発を起こすのだった。

クリア・バツシヨン
清き熱情。これが楯無が使った爆発だ。

楯無のミステリアス・レイディはアクア・クリスタルと言うナノマシンで作られた水のヴェールから水を発生・操ることができるとしている。その水を霧状にし散布し、ナノマシンを発熱させると霧は一瞬で気化し水蒸気爆発を起こせるのだ。

「あつ…まず…太一さん、大丈夫!？」

一時の感情の暴走で、過剰なまでの爆発を起こしてしまい顔を青ざめながら楯無は太一の安否を確かめた。

爆発により起きた煙のせいで、ISのハイパーセンサーにはまだ引つかかっている。けれど、ラストイー・ネイルの水流で装甲が壊れたのだ。この爆発では、まず無事ではないと考えてしまう。

そんな中、楯無に向かって一発の火球が放たれた。

すぐさまアクア・クリスタルから水の楯を使い火球を消すが、同時にこの火球を発生させた人物が太一だと分かり、無事がわかっただけで安堵するのだった。

煙が晴れると、先程までの薄いピンク色の機体を身に纏った太一はそこにはいなかった。新たに、山吹色の装甲を身に纏い、右腕には爪を模した鉤爪が畳まれている。両足には鋭い爪のような装甲を持ち、左腕にはアグモンの頭部を模した籠手「デジローダー」をしていた。

これが、太一の専用機グレイソウルが一次移行した姿だ。

「危なかった…今のはまじで、危なかった！」

「ごめんなさい！太一さん、大丈夫だった!？」

『だいじょーぶだよ。ギリギリで一次移行できたから、その影響でなんともなしだよ』
「ホントギリギリだったけどな…そんじゃ、第2Rといくか！」

一次移行したことで、武器が使えるようになった太一は、ついに自分から仕掛けていった。

さらに、先ほどまでは一次移行するためのプログラム処理を補助していたアグモンが作業を終えたことで、太一のサポートに入ることができるようになった。

畳まれていた鉤爪が180度回転して展開し、楯無に切りつけに行く。

「おらあー！」

「えいつー！」

鉤爪は右腕のみなため、必然的に右手だけを振るうことのできた攻撃できない太一に対し、楯無は蒼流旋で迎撃する。片手のみの攻撃を、楯無はいなすと同時に突きを放つが、その突き左手の籠手で防がれる。

何度かぶつかり合うと、二人ははじかれるように離れた。

そして、太一は左手の籠手を。楯無は蒼流旋を相手に向けた。

『太一！さつきみたいに僕のカード使って！』

「わかった!行け!」
「スピットファイア!!」

「これでどう!」

太一はグレイソウルの拡張領域パススロットに入っていたアグモンの絵が描かれたカードをデジローダーのアグモンの後頭部にあるスロットへ入れた。すると、アグモンの口が開き、そこから無数の小さな炎が発射される。それに対し、楯無は蒼流旋にある四門の発射口からガトリングを放ち、迎撃するのだった。

「太一さんのIS…そんな事までできるのね!」

『へへくん、まだまだいけるよ!太一、さっき教えたことわかってる?』

「もちろんだ、アグモン!一気にケリをつけるぜ!」

『いづくぞ〜!「ガルルフアング」!!』

今度は、デジローダーにガルルモンのカードを入れるのだった。

すると、デジローダーは光を放ち分離する。すると、デジローダーは形を変え、両腕の装甲を青と白の毛皮で覆い先端に鋭い爪を持つ武装「ガルルフアング」へと変化した。

グレイソウルの主要武器、デジローダーは拡張領域にあるカードを入れることで力を発揮できる武装だ。アグモンのカードを入れればアグモンの技が使え、ガルルモン、バードラモン、カプテリモン、トゲモン、イツカクモン、エンジエモン、テイルモンのカードを入れれば姿を変えることができる変幻自在の武装なのだ。ただし、これにはデ

メリットも存在する。それぞれ、変わる武器が異なるため、扱いきれいかは本人次第なのと、一度使ったカードはアグモン以外はしばらくの間、使えないのだ。

「ちよ、なにそれ!?!」

「でやああああ!!」

「ぐっ…質問は無視なの!?!」

「自分に不利になることはいわないだろ!?!」

「それもそうね!!」

ガルルフアングの特徴は、両腕の爪を用いたインファイトだ。

リーチは短いものの、相手につき絶える事のない連撃を繰り広げる。逆に、楯無が使っているのは槍。槍の特徴はリーチの長さだ。長いゆえに接戦になると、振りづらく遅くなる。よって、今回のようなインファイトでは確実に不利になってしまっている。

ラストイー・ネイルがあれば、結果は違ったものの先ほど意表を付くために、水分身に持たせたつきり地面に落ちてしまっている。

「くっ…結構不利ね…でも、私は負けないわ!」

「だけど、さつきも言ったがこれでケリをつけるさ!アグモン!」

『まっかせて。【フォックスファイアー】!』

「ぎやああああああ!!」

止めと言わんばかりに、太一とアグモンがガルフアングの力を發揮した。右腕の毛皮から青い炎が灯り、左手で蒼流旋を抑えられ、無防備となった楯無に右腕を振るうとフォックスファイアーが火炎放射の様に放たれる。

既にシールドエネルギーが尽きかけている中、フォックスファイアーの勢いで吹き飛ばされ意識が薄れていく楯無だが、意地で意識をつないでいた。

楯無には負けれない理由があった。それは、妹が見ているからでも、IS学園最強である生徒会長としてのプライドからでもない。そこにあつたのは、ただの意地だった。

デジタルワールドでの冒険で、幼かった楯無…いや、刀奈は太一に何度も助けられた。太一からしたら、妹のヒカリのひとつ上である刀奈からヒカリのことを思い出した故の過保護だが、刀奈からすれば太一の過保護はかつてないほどの嬉しさを覚えたのだ。更識の家に生まれたが故に、次期楯無になるための厳しい特訓、行儀や作法、学業の勉強、そして簪に見せていた完璧な姉の姿。それらの要因がたたって、甘えることができなかつた刀奈にとって、太一は兄の様に甘えられる存在だった。初めは親愛、けれど今ではその思いが恋愛にまで昇華している。ただ楯無は初恋の相手である太一に情けない姿を見せたくない。その理由と意地で、負けないように意識をつないでいた。

太一はまだ気づいていない。自身の背後には、霧が散布されていることを。

後はただ発火するだけ。

楯無は指でピストルのような形を作り、太一に向ける。そして、一言呟いた。

「ばん」

『太一、危ない！』

「なっ！」

太一の後ろで爆発が起き、巻き込まれる。

一次移行で装甲は修復したものの、シールドエネルギーまでは回復していない。

楯無の最後の爆発で、太一のグレイソウルのシールドエネルギーは零になった。

だが、それと同時に楯無のミステリアス・レイディのシールドエネルギーも零になり、

ブザーがなった。

『太一くん対楯無くんの模擬戦、引き分けだね』

この二人の対決は引き分けで終わるのだった。

第5話 思い出せ大輔!闇にとらわれていた少女

ついに始まった模擬戦。

最初の試合は、太一対楯無だ。

楯無の猛攻に、自身の経験を生かし一次移行まで時間をかせぎ追い詰めることまでできた太一だが、最後の楯無の反撃に対応できず、お互いにシールドエネルギーが無くなり引き分けに終わるのだった。

* * * * *

「はあく……やっと、終わった」

「お疲れ様です、太一さん」

楯無との模擬戦が終わり、ISを待機状態の腕時計にし椅子に座っている太一。その姿は、どこか真っ白になっているように見える。

大輔はねぎらいの言葉を言うのだが、ゲンナイは既に待機状態の腕時計を太一から借り、別の部屋に行ってしまった。

「さすがに、いきなし楯無相手はないだろ…本当によ。………んで、それが大輔のＩＳの一次移行した姿か？」

「そうっす。さつきまでと違って、見た目が殆どブイモンなんですけどね」

「そう言ったら、こっちはアグモンの頭が腕についてんだぜ」

『なんだよ、大輔。別にいいじゃん。お揃いなんだしさ』

「まあ、悪くはねーけどさ。いつも見てるブイモンと今の俺が瓜二つに見えて変な感じがすんだよ」

今太一の目の前に立っている大輔が装着しているＩＳ、ブイフォースは先程のような薄い装甲がなくなっていた。より大きく、力強さが増した装甲にブイモンの頭部を模した顔の半分を覆うバイザー。胴体と口元の部分がないだけで、それ以外が殆どブイモンと同じだった。機械的に見えるが、傍目から見えて一種の着ぐるみにも見える。

太一のグレイフォースは、右腕がアグモンの頭部になっているが、それ以外は装甲にゴーグル型のハイパーセンサーと一般的なＩＳに近い見た目だ。

「やあ、大輔くんまたせたね。太一くん、言い忘れたけどさつきはお疲れ様」

「ゲンナイさんか。それで、グレイソウルはどうだ？」

「問題ないよ。アグモンも含めてね」

『太一、さつきはごめん。最後の爆発に気づけなかった…』

「それは俺も同じだ。気にすんなって」

ゲンナイがグレイソウルの調整を終え、ピットまでやってくるのだった。

ゲンナイからグレイソウルを受け取ると、グレイソウル内にいるアグモンから謝罪の言葉を受ける太一だったが、自身も気づかなかつたためアグモンを責めるようなことを太一はしないのだった。

そして、ついに大輔の番となったのだ。

太一の時と同じように、大輔はカタパルトに乗るのだった。

「頑張れよ大輔!」

「簪くんは日本の代表候補生でもある。油断したら、すぐにやられてしまうから気をつけてね」

「はい!行ってきます!」

『ブイモンも気をつけてね』

『もちろんだ!』

大輔は挨拶を交わし、カタパルトから射出されアリーナに飛び上がる。

同時に、反対側のピットからも同じように簪がアリーナに射出されてきた。

お互いに定位置まで上昇する。ハイパーセンサーが簪のISをしつかりと捉えたのか、そこからはISの情報が流れてくる。薄い青色の装甲、どことなく日本の作ったI

S打鉄に似たIS打鉄式式である。

「そいつが、簪のISか」

「うん……お姉ちゃんに色々……教わって作ったISなの……」

「作ったって……自分でか!？」

『すつげえなあ!』

「うん……」

簪との何気ない会話をする中、大輔はまじまじと……とは言わないが、簪を見る。恥ずかしそうに顔を赤らめ、俯き気味に話す簪。見ていて、やはりどこかであった覚えが大輔の中にあった。

大輔は迷ったり悩んだりすると、結構な確率で予想外な行動をとることがある。サツカーでも、デジタルワールドの冒険でも、その判断が良い結果を残していたこともある。だが、その判断が時として、いい方に向くわけでもない。

「なあ……俺たちちつてき。どこかであったことあるか？」

「えっ……」

どこかであったことあるか？その言葉聞いた瞬間、簪の表情はさつきまでの恥ずかしそうな表情とうって変わって、悲しそうな表情に変わってしまった。

その表情を見て、大輔は内心「しまった……」と後悔するのだった。

「あつたこと……ある……」

搾り出すように、簪が口を開く。

それと同時にランプが点灯し始めた。

「でも……覚えてない、なら………たいした事じゃ……ないと思う……」

言い切ると同時に、開始のブザーが鳴り響く。

開始と同時に、簪は薙刀「夢現」を展開し大輔に斬りかかってきた。その姿は、どこか繊細で直ぐにでも壊れてしまいそうに思うほど弱々しかった。

* * * * *

「大輔の奴……やつちまったな……」

モニター越しでさっきの会話を聞いていた太一は思わずそう呟いた。

夢現で斬りかかってくる簪を、無駄な機動が多いが躲している大輔。その様子を見てみると、明らかに大輔はこの模擬戦に集中できていなかった。

「………まあ、こうやってぶつかり合うのも悪くないかもな」

ぶつかり合うことで強くなる絆。それを太一は知っているからこそそのセリフだ。

事実、太一は親友であるヤマトと何度もぶつかり合った事があった。意見の食い違い

で起きる口喧嘩から、デジモンたちと共に戦ったこともある。ぶつかり合ったからこそ、今の関係があるため、きつと今回もうまくいくだろうと、心の中で納得していた。だが……

『大輔くん……かんちゃんにあんな悲しそうな顔させるなんて……お仕置きが必要みたいね………っ！』

モニター越しに怒りをあらわにする楯無を見て、太一はこの後の大輔の無事を祈ることしかできなかったのだった。

* * * * *

「はあああああ!!!」

「ぐっ……」

斬りかかってくる簪を避けているが、大輔はさつきから集中できずにいた。

原因はわかりきっている。さつきの自分の失言のせいだ。ただ謝ることなら誰にだってできる。だけど、謝るだけでは泣きそうな簪を笑顔にできない。だからこそ、普段使わない頭を最大限に働かせて思い出す。この少女とであったときのことを。

だが、IS初心者である大輔が代表候補生の簪相手に集中できずに躲せる訳がない。

時間が経つにつれ、かすりかけていた簪の夢現が大輔に当たり始めていた。

『だあああああもう!大輔!しっかりしろって!!』

「けどよ、ブイモン!」

「そこ…っ!」

「んげっ!?!ぐあっ!!」

ブイモンが大輔を叱咤するが、それがきつかけで一時的に動きを止めてしまった。

好機と思つた簪は、背中の二門の荷電粒子砲「春雷」を放つ。

動きを止め、ブイモンに反論していた大輔は躲す事ができず、放たれた春雷に直撃してしまう。直撃した際の衝撃で、ブイモンが気絶したからか急にさっきまでのようにブイモンのサポートが消えてしまい飛ぶことがうまくできずに墜落してしまった。

シールドエネルギーの大半を奪われ、相棒であるブイモンが気絶した中、痛みを無視して大輔は立ち上がる。デジタルワールドの冒険で、今以上の最悪な状況は何度も味わってきた。どんな絶望的な状況でも諦めないこと、それが大輔の強さでもある。

平和になってこういった状況にあまり陥ってなかったためか、ついその時の状況を色々と思ひ出していた。

メタルグレイモン、キメラモン、ブラックウォーグレイモン、デーモン、ベリアルヴァンデモン、アーマゲモン。

どのデジモンたちとの戦いも、絶望的な状況に陥ったが大輔たちは乗り越えてこれた。

そんな中、ふと大輔は思い出した。

そう、ベリアルヴァンデモンに暗黒の種を植えつけられた子供の中に青い髪に赤い瞳の少女。更識簪がいたことを。

常に楯無と比べられ続け、心の中に闇を抱えてしまっていた少女のこと。その闇に漬け込まれ、暗黒の種を植えつけられていたこと。そして、楯無が選ばれし子供と知った時絶望しかけていたこと。

全部、大輔は思い出した。

「やっと…思い出した」

「えっ……」

「もう、楯無さんの妹になりたくなかった…なんて、思ってたねえよな？」

「あ………うんっ！」

大輔に思い出してもらえた事が嬉しくて、簪は涙を流す。その顔には、先程までの悲しさはなくあるのは満面の笑顔だけだった。

『やっぱり…姉さんは特別なんだ…』

『何でも出来て…パートナーデジモンがいて…選ばれし子供で…』

『私には……なにもない』

『私は……姉さんの出来損ない……』

『こんな思いするならば……姉さんの妹になりたくなくなかった!!』

簪の笑顔を見て、大輔はその時の簪の言葉が頭の中で聞こえた気がした。

けど、もう大丈夫だ。今の簪は、今が幸せなんだとよくわかった。

簪も大輔に思い出してもらえて、あの時自分に勇気をくれた言葉を思い出す。

『俺もお前と同じこと思った』

『いつつも姉ちゃんと喧嘩してばっかで、姉ちゃんなんていらねえって思ってた』

『けど違うんだよ』

『姉ちゃんと喧嘩する日々が……俺にとって、幸せなんだってわかったんだ』

『お前は……刀奈さんと一緒にいられて幸せじゃなえのかよ!!』

『周りのことなんて気にすんな!』

『ただ……お前が刀奈さんの事が好きかどうか聞いてるんだ!』

この言葉があつたから、自分は周りにどうこう言われても気にせずに姉と……更識楯無ともっと親しくなれた。

周りの評価ばかり気にしていた自分を、壊すことができた。この言葉だけで、救われてきたんだ。

今の簪を作り上げたのは他の誰でもない。目の前にいる少年、本宮大輔のおかげだったのだ。

『いってて…あーもう、気絶しちまったぜ…』

「ブイモン、目が覚めたんだな！」

『おう！つて…なんだ、この状況？』

「気にすんなって。それじゃ、行くぜ！簪！」

「うんっ…！」

ブイモンが目を覚ましたことで、お互いに出会いを思い出すのをやめ、模擬戦を再開するのだった。

シールドエネルギーがほぼ満タンの簪とかなり減らされた大輔。経験の差もあり、大輔に勝目は薄い。それでも、関係ないと言わんばかりに大輔は簪に挑む。

大輔は目の前にいる少女と見てくれている先輩たちに情けない姿を見せないように。

簪は目の前にいる少年からもらった勇氣のおかげで強くなれた自分をこの少年に見てもらうために。

そして、お互いがもつと分かり合うために。

二人は戦うのだった。

そして…

『大輔くん対簪くん、模擬戦は簪くんの勝ちだね』
勝敗は、簪が勝つのだった。

第6話 入学前夜！それぞれの思い

「はあ…明日からI S学園に入学かあ…」

ベットに転がりながら、大輔はそう呟いていた。

あの模擬戦から二週間が経ち、時は既に4月。明日になれば大輔たちはI S学園に入学することになるのだ。

大輔がため息をついてる理由は、I Sについて学ぶ学園だからや元々志望していた学園じゃないことだからではない。I Sは女性にしか動かせれない。つまりは、I S学園の生徒や教師はみんな女性なのだ。例外として、大輔や太一、そしてあの時一緒にI Sを動かしてしまった織斑一夏だけである。

最も、それは世間一般が知っているだけであって、実際にはもつといるだろう。

ゲンナイの考え通り、I Sはデジコアを持つていけば男性でも動かせれる。だが、この三人しか知られてないのはデジタルワールド^{ホメオス}の安定を望む^{ダシ}者に使える自立エージェントたちにより隠されているからだ。男性でI Sが動かせることがバレれば、その男性の人生は決まってしまうようなものだし、なによりデジモンとの関係性がバレてしま

う可能性が高くなるのだ。

そのため、各国の選ばれし子供たちはエージェントたちに協力し、隠しているのである。

寝転がっている大輔は、着信音がする携帯が目が入った。

最初はまた、各国の科学者や重役が勝手に人の携帯の番号を調べ上げ電話をかけてきたのかと、嫌々手に取るが携帯の画面には、模擬戦の時に知り合った少女、更識簪の名前が描かれていた。

「大輔だけど、どうかしたか?」

『あつ……ごめんね。こんな夜分遅くに……』

「あ、ああ……大丈夫だ」

この前知り合った少女だとわかった大輔は、体を起こし電話に出るのだった。

携帯越しに聞こえる簪の声を聞くと、耳元で囁かれてるようで大輔は緊張していた。

実は大輔は男友達が多いが、そんなに女友達がないのだ。完全にいないという訳ではないが、アドレスを交換するほど仲は良くないし、仲間との間では今でもデータミナルのメールでの会話が多いため電話をする機会がないのだ。

『そのね……お姉ちゃんが言ってたんだけど……もしかしたら、初日からIS学園の寮暮らしになるかもって……だから、支度しておいたほうがいいって言ったの』

「そ、そうなのか？わりい、助かった。あんがとな」

『い、いいよ！お礼を言われるほどじゃないの……でも、少しは大輔さんの役に立てたなら……嬉しいなあ』

おそらく無意識のうちに言葉にしたであろうセリフに、大輔は顔が真っ赤になるくらい赤面してしまった。大輔の頭の中には、顔を少し赤らめ微笑んでいる簪の顔が浮かんでしまうのだった。

そんな中、大輔はというと

（おおおおおおお、落ち着け俺！俺はヒカリちゃん一筋なんだ！だから、落ち着け!!!
……そういえば、ヒカリちゃんつてもう付き合ってるんだつたよな……くうく、まさか俺でもタケルでもない男と付き合うとはあ！もう諦めるべきなのかなあ）

自身が恋心抱いていた太一の妹、八神ヒカリについて考えていた。

ヒカリは何度もアピールする大輔や結構いい感じだったタケルと付き合うことはなく、デジタルワールドで知り合った男と付き合っているのである。ちなみに、大輔のアピールはアピールとは気づいておらず、むしろ大輔の好意にすら気づいていないなかった。タケルに関しては、お互い幼い頃の冒険から仲間意識が強く、男女としての好意がなく、あるのは親愛だけだったのだ。

『……………大輔さん？どうかした？』

「いい、いやなんでもない!なんでもないぞ!」

『?…ならいいんだけど』

ヒカリのことを諦めようかと考えているうちに、返事がない事を不審に思った簪の声で我に返るのだった。

「けど、ホントあんがとな。しばらくはホテル暮らしになるって聞いてたけど…おかげで、荷物の準備とかが必要なのがわかった」

『ほ…本当にお礼を言われるほどじゃないよ……むしろ、教えてくれたお姉ちゃんに言うべきだと思うの…』

「それでもだ。簪ちゃんが教えてくれなかったら、俺が困っちゃってたしよ」

『う…うん……それでね…その、ね』

「どうかしたのか?」

『一緒のクラスになれるといいね…!!な、なんでもないの!おやすみなさい!』

その言葉を最後に、電話は切れてしまった。

大輔はしばらくの間、携帯を片手に人形のように固まってしまっていたのであった。

ちなみに、これは余談だが、更識家のある一室では頭から湯気が出そうなほど顔を

真つ赤にした少女が悶えている姿が幼馴染に発見されたとか。

* * * * *

「そつか。ありがとな、楯無」

『いいのいいの。それじゃあ、ヒカリちゃんにもよろしくね』

「ああ」

簪が大輔に電話している頃、楯無も太一に同じことを電話していたのであった。

楯無との電話を切ると、太一は直ぐに荷造りを始めるのだった。

机の上に置いてあるIS学園から来た通知を見ると今にもため息をつきたくなるのだった。

「はあく……まさか、また高校生活をやり直す羽目になるとはなあ……」

そこに書かれたのは、強制的にIS学園に入学するようにとの通知だった。

既に高校を卒業し、大学生にもなる簪の太一からすれば、もう一度同じ勉強をし直さなければいけないことはうんざりな行為だった。

少し気落ちしたが、荷造りを再開しようとする時扉がノックされ、開かれるのだった。

開かれた扉からは、可愛らしいパジャマを来た妹のヒカリがいるのだった。

「お兄ちゃん、まだ起きてるの?」

「ああ。明日から寮生活になるからな。しっかり荷造りしないとな」

「そうなんだ」

「そういえば、楯無がお前によくって言ってたぞ」

「楯無さんが?そっか」

何気ない兄と妹の会話なのだが、お互いの言葉には寂しさが混じっていた。

本来なら、太一がISを動かせれると公表された時点で重要人物保護プログラムで太一の家族と大輔の家族は散り散りになってしまふのだったが、それよりも早くゲンナイたちが保護するのだった。

もちろん、保護することで世界各国から避難を受けたが、既に全員が保護を受けることを同意していたため、無効も手が出せず、結果としてゲンナイたちの研究所は誰のものでもない無国籍の研究所となり、定期的に情報の提示を世界各国にするという形で収まったのだった。

兄妹の中で、しばらく無言が続く。だが、その沈黙を先に破ったのはヒカリだった。

「お兄ちゃん。IS学園でも元気でね」

「当たり前だろ」

「でも、お兄ちゃんって結構無茶するし。それで、楯無さんを泣かせちゃうし」

「うっ……それは昔の話だろ！」

初めてデジタルワールドを冒険した頃のことと責められ、つい顔を真っ赤にして太一は怒鳴ってしまう。

そんな様子を見て、ヒカリはくすくすと笑っていた。

「私ね。ＩＳ学園に行っちゃうお兄ちゃんに、何かできないか考えてたんだ」

「ど、どうしたんだよ。いきなり」

「空さんたちとも話し合ってたね。お兄ちゃんにこれを渡すのがいいと思ったの」

「これって」

そう言って、ヒカリが渡してきたものを太一は見る。

袋に入っていたそれを受け取り、中を開くとそこには赤いヘアバンドと太一が愛用していたゴーグルが入っていた。

太一はそのヘアバンドとゴーグルを付けるのだった。

「やっぱり、お兄ちゃんにはゴーグルだよね」

「そ、そうか？」

「そうだよ。それじゃあ、お兄ちゃん。おやすみなさい」

別れを告げて、さっさと行く妹に太一は無言で頭を下げるのだった。

これからの事を考えるあまり、元気がなかったせいで気を使わせてしまった。それ

も、仲間たちからも。そう考えると、ヒカリの思いやりに頭を下げずにいられなかったのだった。

「よっしゃ!それじゃあ、とつとと準備して寝ちまうか!」

* * * * *

「はあ~~~~~」

深い溜息をつき、織斑一夏は部屋の整理をしていた。

ISを動かしてしまったせいで、ニュースには出るわ、研究員が押しかけてくるはで散々だったのだ。

一夏は、これからしばらくは帰れない部屋の整理をしているのだった。

「ん?これって…」

開いていた押入れから、あるものが落ちてきたのだ。

白いフレームに銀色の淵。中心のモニターは電池が切れたかのように黒く塗りつぶされたポケベルのような物。これを知る人はこう言うだろう。デジヴァイスと。

「こんなもってたっけ?」

初めて見たかのようにまじまじと見るが、電池切れのようで、しかも電池を替えるところがない事からゴミだと思いゴミ袋に捨てようとする。

だが、入れようとする瞬間、頭痛がしたのか頭を抑える。

「つつ……なんでだ？何故か、これは捨てちゃいけない気がする……もつと、大切な気が……」

知らない物の筈なのに、何故か持つてなければいけないという感情がして、混乱してしまう。

そして、一夏は自身の感情に従いデジヴァイスを明日持つていくカバンの中に入れるのだった。

* * * * *

そして、時は進む。

三人にとって、I S 学園での始まりの朝が訪れるのだった。

第7話 入学! I S学園

「全員そろってますね〜? それでは、ホームルームを始めますよ〜!」

黒板の前で、この1年1組の担任の教師山田真耶やまだまやが号令をかける。

だが、クラスにいる生徒の殆どが無視しているので、既に涙目になってしまっていた。本来なら注意するべき問題なのだが、今回ばかりは仕方ないとしか言い様がない。なぜならば、本来なら女子校のI S学園に三人の男がいるのだから。

その三人の中の二人、本宮大輔と八神太一は名前順の席のため大輔、太一の順番で並んで座っている。けれど、最後の一人、織斑一夏は大輔たちとは真逆の位置で一人目立っていた。

想像以上の女性徒からの視線に、緊張し過ぎている一夏とその視線を後ろの席のためあまり受けてない大輔と太一はホッとしながら、一夏に同情の視線を送っているのだっ

た。

そんな中、自己紹介が行われていく。

そして、一夏の番になったのだが、一夏は気づいていなかった、

「織斑くん？お〜り〜む〜ら〜く〜ん〜？」

「えっ…は、はい！」

「ごめんね？自己紹介、【お】で織斑くんの番なの」

「わ、わかりました！」

立ち上がった一夏は、緊張のせいか油の切れた人形のようにカクカクとした動きで壇上上がり生徒たちの方を向いてくる。

うつむいていた顔を上げた一夏は、こつちを凝視してくる女性徒たちに引き気味に一歩後ずさったが直ぐに立ち直る。

「えっ…俺は、織斑一夏です！」

そこで、言葉がなくなってしまった。

一夏はこれで済ませようと考えていたのだが、ほかのクラスメイトたちがもつとないのか？という視線を送ってくる。

先程の言葉以外考えてなかった一夏は、困り果ててしまう。それに見かねた太一は、自身のノートに興味・特技・一言と書き一夏に見せるのだった。

それを見た一夏は、太一に感謝の視線を送るのだった。

「趣味と特技は料理です。これから一年、よろしくお願いします!」

『よろしくお願いします!』

そう言つて、教卓から離れようとする、一夏の前に誰か立っていたのだ。

下を見るように歩き始めていた一夏は、顔を上げると目の前に黒い何かが迫ってくるのがわかつた。

バシンツツ!という音をたてるそれ。

痛みあまりに悶える一夏だったが、聞き覚えのある声を聞くのだった。

「貴様は、誰かの手助けがないと満足に自己紹介もできないのか?」

「……………千冬姉?」

「織斑先生だ。終わったのならとつと席に付け」

「はい……」

どうやら一夏の頭を叩いたのは、出席簿だったようだ。

一夏にとって、今まだ職業不明な姉がこんなところで教師をやっているのに驚きだったが、ある意味納得もいつていた。

それは、I S について知識があまりない大輔や太一でも納得行くものだった。

おりむらちふゆ織斑千冬。モンド・グロツソという各国の代表者によるトーナメントで世界一位の操縦

者を決める大会において初代優勝者。最優秀の戦女神ブリュンヒルデの称号を持っていくくらいだ。前回の第2回モンド・グロツソでは決勝戦で棄権したが、決勝に出れば優勝は確実だったのでは？と言われるほどの腕前だ。

「さて、諸君。私は担任の織斑千冬だ。まだひよつこである諸君らを一人前に育てるのが私の仕事だ。これから、半年でI Sの知識を。もう半年で実技を学んでもらう。無論、その期間内に覚えるように努力することを忘れるな。そして、私への返事はYesかはいの二択のみだ。いいな」

(（それはどこの軍隊なんだ？))

担任の自己紹介、つい男子たちの思考が一つになった。

こうまで一方的に話して、反論の一言でも出ないのか不思議に思うのだった。

だが、現実が違うのだった。

「きやくやく、千冬様よやくやく〜！」

「I S学園に入れてよかった〜〜〜！」

「千冬様に逢う為にI S学園にきました！北九州から！」

等等、文句どころか絶賛する生徒ばかりだった。

「はあ…何故、毎年貴様らのような馬鹿どもが私の担当になるのだ…」

問題児ばかりで千冬は入学初日なのに、既に頭を抱え込んでしまっていた。

そんな様子に、どうにか静かにしようと真耶は声をかけるのだが案の定聞いてくれなかった。

それを見かねた太一は人知れず溜息を吐き、何度か手を叩きこちらに注意を惹きつけるのだった。

「はいはい、静かにな。いきなり男に仕切られるのはいい気分じゃないだろうけど、先生方が困ってるから少しの間だけ我慢してくれ」

『はいー』

いきなり仕切り始めた太一に驚く千冬だったが、それに従う女性徒たちにも驚きを覚えた。I S が広まることで出来てしまった女尊男非の風習。I S 学園はそんな風習のせいで、そういった思考の生徒や教師も少なくない。けれど、太一はいとも簡単に女性徒たちを静かにさせたのに千冬は驚きとともに太一のリーダーシップに目を見張るものがあると理解した。

ちなみに、真耶は自分の言うことは聞いてくれないの太一の言うことは順応に聞いてくれたことに落ち込むのだった。

「フツ…：そういうえば、そろそろホームルームが終わる時間だな。最後に、本宮。八神。お前らが、自己紹介をしろ」

いきなりの名指しで、驚く大輔とやっぱりか…：と思う太一。

ある程度予測していた太一はともかく、このまま流せると思っていた大輔は若干落ち込むのだった。

だが、そんな大輔に太一は耳打ちする。

「なあ、大輔。後でクラスメイトたちに囲まれるのと、今自己紹介してそれを防ぐのどっちがいいんだ？」

「も、もちろん！防ぐ方っす！」

「だったら、後で何か聞かれないようにしっかき自己紹介しないとだぞ」

「は、はい」

落ち込んでいた大輔だったが、太一の言葉を聞いて背筋をピンと伸ばした。

既にもう、動物園にやってきた珍しい動物のように見られているが、それに加え質問攻めになつては身が持たない。やる気を出すのも当然だろう。

まだぎこちない動きで大輔は、落ち着いたように太一が教壇に立つ。

「お、俺は本宮大輔。お台場中出身。趣味は料理で特技はサッカー。こ、これからよろしく」

「俺は八神太一。一応高校は卒業してるがISを動かした事でIS学園に入学することになった。みんなと違って、年は上だけど気にせず話しかけてくれ。趣味は特にないが、特技はサッカーだ。大輔とは元いた中学とは先輩後輩関係だ。こっちもこれからよ

ろしく」

『こちらこそ、よろしくお願いします!!』

大輔と太一の自己紹介が終わると、一夏の時のように周りのクラスメイトからの返答があった。

その息の合いぶりに、若干押され気味になりつつも二人は席に戻るのだった。

それと同時に、授業の終わりのチャイムが鳴り響く。

「これにて、ホームルームは終了だ。各自、休み時間のうちに次の授業の準備及び予習は済ませておけ。解散!」

千冬の号令とともに、ホームルームは終了するのだった。

* * * * *

休み時間に入り、一夏は一人の女性徒と共に屋上に来ていた。

「久しぶりだな、箒」

「ああ。久しぶりだな、一夏」

その女性の名前は篠ノ之箒しののほづき。幼い頃、転校してしまった一夏の幼なじみだ。

「にしても、直ぐにわかった。あれから何年も経ってるのに何でだろうな」

「さ、さあな。そんなもの私を知るか」

笑顔で問いかける一夏だったが、箒は目を背けながらぶつきらぼうに答えていた。

一夏からしたら、この箒の態度も懐かしいと思っている。

元々箒は、人付き合いの良い性格ではないがそれが知り合いでもそうか？と聞かれると違うと答えられる。なのに、久しぶりに再会した一夏に対してのこの態度だが、単に箒は照れているのだった。幼い頃、恋心を抱いた一夏が変わらない笑顔で。それも、何年も逢っていない自分に直ぐに気付いてくれた事に。

「そーいや、剣道の全国大会で優勝したんだってな。おめでどう」

「な、なぜ知っている!？」

「いやだって、普通に新聞で書いてあったぞ?」

「なぜ新聞を見ている!？」

「いや、見てるもんは仕方ないだろ」

実際、初めて聞く人にとっては理不尽な言い方だが、幼い頃と変わらないので一夏にとっては慣れっこである。

箒も内心では嬉しいのだ。ただ、素直に言葉が言えないのだった。

「さて、教室に戻るか。席に着いてないと千冬姉に折檻を食らっちゃう」

「……………なあ、一夏」

担任である姉からのお仕置きを逃れるために、教室に戻ろうとする一夏だったが、箒は呼び止めるのだった。その表情は、さつきまでの照れていた表情とは違う。真剣な表

情をしていた。

「タツノオトシゴを、どう思う?」

「た、タツノオトシゴ? さあ? 水族館とかには行かぬーし…そもそも、水族館にいるのか?」

「いや……どうも思わんのならいいんだ」

「そうか? それじゃ、早く行こうぜ」

「……………ああ。直ぐに行く。先に行つててくれ」

箒の真剣な表情に、今自分は立ち寄つてはいけない事を感じ取つた一夏は「わかつた」と一言告、屋上を後をするのだった。

残された箒は、落下防止の手すりに手を置き、空を睨みつける。

「一夏は……まだ、アイツの記憶が戻ってないのだな。……………なぜ、一夏の記憶を消したのだ、姉さん」

その言葉に、返答はなかった。

そう口にした箒は、屋上を後にするのだった。こちらを見ていた監視機器に気付かずに。

* * * * *

とある研究所のようなところ。

そのモニターには、先ほどの監視機器から送られてきた映像と音声が流れていた。それを見ている一人の女性がいた。

その女性は、ただ独り言のように呟く。

「もうすぐだよ……もうすぐ、あの子はいつくんの元に戻ってくる。その時が、いつくんの記憶が戻るとき。……………だから、まだ今は待つてて箒ちゃん」

返答のなかった箒の言葉は、別の地で。本人には聞こえていないが、返答はあったのだった。

第8話 I S 学園初日!新たな交流

一夏が箒と屋上で話している間、教室に残っている大輔と太一はぐったりしていた。

それもそうだろう。授業中だけでも、クラスメイトたちから視線が辛かったのだけれど、休み時間になればほかのクラス、学年の生徒たちが前例の無い男性操縦者を見に来ているのだ。その辛さは、授業中の何倍にもなっているのだ。しかも、向こうからは声をかけず、ヒソヒソとこちらについて話してる分、さらに辛く感じていた。

そんな中、一人の女性徒が二人の前やってきた。

「やあやあやく、だいじょくぶく? だいちゃん、たつくん」

「だ、だいちゃん!」

「たつくん!」

いきなり二人の事を自分で決めたあだ名で呼ぶ女性徒。

間延びした言葉遣いに手まで隠れている袖、そして雰囲気からおっとりしていると分かる少女だった。

「え…えつと、君は?」

「私は布のほとけほんね本音ほんねついていいいます。楯無お嬢様とかんちゃんから話は聞いてるのだ。お

嬢様とかんちゃんと一緒に、私もよろしくね〜」

「ああ。楯無と簪の知り合いなのか。こっちこそよろしく」

「おう。俺の方もよろしくな」

「あいさ〜！」

本音ののほんとした雰囲気と話している内に、先程までの心労はなくなっていた。

それから、少しの世間話をしているとチャイムが鳴ってしまい、まだ話していたかった本音は渋々といった雰囲気に着席するのだった。

* * * * *

授業終了のチャイムが鳴り、放課後を告げる。

最も、放課後になったからといって男性操縦者を見に来る生徒たちは後が絶たない。

そんな中、大輔と一夏は机に突っ伏していた。

「おい、大丈夫かよ……大輔……一夏……」

男性操縦者の内、唯一平気でいる太一は二人の安否を確認するが特に反応がなかった。

太一は溜息を吐きつつ、これまでに起こった事を思い出していた。

「みなさ〜くん、ここままで分からない所はありますか?」

授業中、この時間帯は真耶がI Sの座学の講師を務めていた。

内容は確かに難しい側面を持つが、I Sにとって基礎知識だ。I Sの国家代表である楯無や手を借りたとは言え自身でI Sを作り上げた簪の二人と講習を受けた太一にとっては簡単なものでもあった。

「織斑くんも本宮くんも八神くんも。分からないことがあったら、なんでも言ってくださいね!なんてつたつて、私は先生なんですから!」

自身満々に胸を反らしながら語る真耶。

その際に強調される女性らしい部分を見てしまい、太一は思わず顔を背けるのだつた。

そんな中、大輔と一夏が同時に挙手をする。

「先生!!」

「はい!織斑くんと本宮くん♪」

「全然全くわかりません!」

「……………えつとお…」

真耶もさすがに全てが分からないのは予想外だった。

一夏はどうか知らないモノの、同じ講習を受け参考書も持っているのにまったく分

かっついていない大輔に太一は呆れていた。

「…お前ら、参考書は読んだのか？」

「呼んだんすけど、さっぱりで…あだつ！」

後ろで見ていた千冬の問いかけに素直に白状する大輔。軽く溜息を吐いた千冬は、持っていた出席簿で大輔の頭を叩くのがあった。

けれど、叩かれた時の音は前の時間に一夏が叩かれた音よりも優しく感じれた。

それに対し一夏は、軽く首をかしげていた後に言う。

「電話帳と間違えてちり紙交換に出しました」

「必読と書いてあっただろう馬鹿者が!!」

一夏の馬鹿げてた行為に、千冬は額に青筋とたて裾から白のチョークを取り出し一夏に向かって投げる。

投げられたチョークは、一直線にそれもジャイロ回転しながら一夏の額に命中しはじけた。

その一撃で、一夏は悲鳴を上げる間もなく気絶するが、千冬の気つけで強制的に起こされるのだった。

「参考書は再発行しておく。本宮同様、一週間で覚えろ」

「そ、そんなあ………」

「まさかとは思うが、八神もわからないなどと阿呆な事は言わないだろうな」

「あ〜、大丈夫です。一学期までの範囲なら問題ないって、たてな……更識生徒会長からの太鼓判つきですんで」

「なるほど、あいつの太鼓判つきか。ならば、この阿呆共の面倒は八神が見ろ」

「……………了解です」

なんて事があつたのだ。

それ以来、大輔と一夏は休み時間のたびに、集まってお互いに一つの参考書を覗む様に読んでいたのだった。けれど、その光景を見て周りの女性徒が黄色い歓声を上げていたが気づかない二人の事を気遣って、太一が自身の参考書を一夏に貸すのだった。

その性で、今の二人は知恵熱で倒れているのだった。

「織斑くん。本宮くん。八神くん。いますか〜?」

残っていた三人を訪ね、真耶が教室に入ってくるのだった。

何事かと思った三人だったが、真耶がそれぞれの前に鍵を置くことで、大輔と太一は理解するのだった。

「三人には、今日から寮暮らししてもらいますね」

「あれ?俺は、寮の調整が済むまで近くのホテルに泊まるように言われてますけど…」

「それじゃあ、危ないだろ。俺たちは今じゃ世界中の科学者が喉から手が出る程の存在

になつてゐるんだ。中には、非人道的な行為を取ろうとする連中だつてゐる可能性があるから、こういうた措置をとつたんじゃないのか」

「あつ……そうですね、太一さん」

「あはは……八神くんは結構過激な事を想定してゐるんですね……まあ、この措置も八神くんが言つた事を恐れてとつたので間違ひではないんですけどね」

「それで、誰がどの部屋なんですか？」

大輔の疑問に、説明しますね！と張り切る真耶。

大輔に渡されたのは1002の鍵。太一の渡されたのは1003の鍵。一夏に渡されたのは1025室の鍵だった。

渡された鍵を能天気にも眺めてゐる大輔と一夏だが、太一は嫌な汗をかいてゐた。

「あの……山田先生」

「?なんですか、八神くん」

「一人部屋……ですよね？」

太一の疑問に笑顔で固まる真耶。

だが、その顔には汗が流れていて、相部屋だと言う事を物語つてゐた。

「安心しろ。相部屋だが、出来る限りの処置はとつてある。それに、一ヶ月もすれば個室はできる。それまで我慢しろ」

「千冬姉!」

「織斑先生だ!それと、織斑。本宮。八神。貴様らの荷物は寮長室に置いてある。後で取りに来い」

「つゝつゝつゝ……あ、あれ。ち……織斑先生、俺荷物の用意なんて」

「私がしておいた。着替えと携帯の充電器で十分だろう」

「デスヨネー、と既に諦め切った一夏に大輔と太一は合唱していた。

さすがに、生活必需品だけでは色々物足りないだろう。

「そ、それじゃあ、寮の説明しますね。まず平日は朝食、夕食は食堂でとってくださいね。朝食は朝の6時から8時まで。夕食は18時から19時まで開いています。大浴場は今の所使用できないので、各部屋にあるシャワーですましてくださいね」

「ええっ!風呂に入れないんですか!?!」

「はあ……貴様は馬鹿か?女子と一緒に入りたいのか?」

「あ……」

少し沈んでしまった空気を変えようと、真耶が寮の説明をするが、浴場を使えないことに一夏が反応するのだった。

けれど、千冬の反論を聞き、ここが自分と大輔、太一以外男がないことをようやく思い出すのだった。

「ええっ!? 織斑くんは、女の子と一緒に風呂に入りたいんですか!」

「ち、違いますよ!」

「そ、それじゃあ、織斑くんは女の子に興味がな…もがもが」

「はい、山田先生落ち着いてくださいね〜!」

勘違いからヒートアップしていく真耶を太一が口を塞ぐ事で収まるのだった。

だが、太一はここでミスをしてしまった。真耶は、女子校出身なため、殆ど男子と接する機会がなかった。それで、太一という年がそれほど離れてない男に口を塞がれ、ここまで接近されたらどうなるのか。

「あ、ふえ……きゅ〜きゅ〜……」

「ああ! 山田先生!」

「八神…山田先生を止めたのはありがたいが、もう少しやりようがあったらどう…」

「すみません…」

結果は、処理落ちして気絶してしまうのだった。

千冬は太一を説教はするものの、このままでは明らかにめんどくさくなる山田先生を止めてくれたので、それほどきつくは言わなかった。

なお、大輔と太一はこれが年上のテクニク（主に、担任にそれほどキツく叱られない意味で）なのかと一緒に見ているのだった。

ちなみに、この騒動で、何故か一夏は女性に興味がなく大輔に気があるのではないのか?と言う噂と太一は年上、というか山田先生に気があるのではないか?なんて噂が流れていた。

それを聞いた青い髪の姉妹は、姉はある教師に嫉妬し妹は織斑一夏を警戒し始めたとかしないとか。

第9話 それぞれの思い

あれから、気絶した真耶を太一がおぶって保健室に連れて行き寝かせてから、三人で荷物を取りに行ったのだった。

「はあく……女子と相部屋か……」

「そう落ち込むなって、一夏。きつと、織斑先生があまり問題にならないようにしてくれてるって」

「例えば、どんなのがあると思いますか、太一さん？」

「ん……やっぱ、知り合いと同室とかだな」

さすがは、太一というべきか。一夏と大輔の言葉に、次々と的確に答えていく。

太一の言う知り合い、という言葉に一夏は筈を。大輔は簪か本音を思い出し出していたが、太一はというと。

（楯無のことだ。IS学園生徒会長の権限を使って、色々としてかしてるだろうなあ……）と、既に諦めの表情を浮かべていた。

そんな話をしているうちに、太一の1002室、その隣の1003室につくのだった。

「そんじゃあ、一夏。また明日な」

「予習復習忘れんなよ」

「ああ！それじゃあな！大輔！太一！」

一夏と分かれた二人は、自身の寮室に入っていくのだった。

* * * * *

寮室に入った太一の最初の感想としては、拍子抜けだった。

あのイタズラ好きな楯無の事だ。入った拍子に何かしら、仕掛けてあるのだろうかと考
えていたが、何もなかったのだ。それどころか、部屋の電気も消してある。もしかして、
まだ来ていないのか？と考えた太一は、照明のスイッチを入れるのだった。

「うお!? どうしたんだよ、楯無!?」

「……………死んでる」

明かりが付いた部屋の中で、太一の目に真っ先に入ってきたのは白い着物に身を包ん
だ楯無だった。

明らかに雰囲気が悪く、ベッドの上で正座している楯無。外にはねている髪の毛は、
気のせいかしなだれているように見えた。

いつもと違う雰囲気に、驚きながらも荷物をおくのだった。

「ねえ、太一さん。年上好きって本当？」

不意につぶやいた楯無の言葉。

いきなり、自分の性癖について聞かれた太一はバランスを崩しずっこけるのだった。

「どこから聞いてきたんだ、そんな身も蓋もない噂！」

「本当のこと言つて太一お兄ちゃん！」

真つ先に疑われた。

「だつて、噂じゃ太一お兄ちゃんが年上好き！それも、山田先生みたいな口リ巨乳好き

だつて流れてるんだもん！」

「誰だ?!そんな噂を流したのは?!」

「新聞部よ！」

「ちよつと新聞部に乗りに込んでくる！」

「それに、太一お兄ちゃんが山田先生をおんぶしてるの見たもん！」

「あれは、山田先生が気絶したから保健室に連れてつただけだつて！」

「それにそれに！山田先生に迫つてたんだもん！」

「一体、何時から見てたんだ!?!」

傍から見ると、浮気した彼氏を問い詰める彼女という雰囲気を作り上げた二人。

そんな中、楯無の目から涙がこぼれてきた。

「太一おにいちゃんが…太一さんが山田先生にとられちゃいそうでごわくて…太一さんをみがつてにどくせんしたがつてるじぶんがいやになって…もうなにがなんだかわからなくて…」

独白する様に語る楯無。

太一は楯無が自分のことを自惚れかもしれないが好きじゃないのかと思っていたけれど、それは依存でしかないと思っていた。

楯無が…刀奈が一番最初に出会ったのが太一で、ヒカリに向けていた過保護を刀奈に向けていたから刀奈が自分に依存していた。それは恋愛ではなく、親愛ではないのか？
そして、その気持ちのまま楯無の気持ちを受け入れていいのか？

そう考えているせいで、長い間太一は前に進めずにいたのだ。

だからこそ、太一は決心する。立ち止まっていたせいで、今楯無が…刀奈が泣いているから。

太一は泣き崩れている刀奈を優しく抱きしめる。

「刀奈…ごめん。俺、勇気なかった。勇気の紋章を持つたのに、笑っちゃうけどさ。お前の気持ちを勝手に兄に対する愛情だつて決めるけて、前に進めなかった。まだ答えは出せないけどさ。俺は今、ここにいるから。誰にも取られずに、ここにいるから」

「うん。……ありがとう、太一さん」

それから数十分の間、楯無が落ち着くまで太一は抱きしめているのだった。

* * * * *

一方その頃、大輔は大輔で困った状況に陥っていた。

なぜなら、部屋に入り真つ先目に目に入ったのはバナタオル一枚の簪だったからだ。

「~~~~~」 (声にならない声)

「わ、わりい!!!」

!!!!!!

耳まで真つ赤にした簪は大急ぎでシャワー室に戻り、大輔は全速力で後ろを向くのがあった。

それからしばらくして、ピンク色の可愛らしいパジャマに身を包んだ簪と、それに対し土下座している大輔の図が出来上がっていた。

全力で謝り倒していた大輔を許した簪。今、お互いに顔を真つ赤にしながらそれぞれのベツトに腰掛けていたのだった。

さすがに、視線を合わせれない二人。もちろん、それぞれ思う事があった。

(なんつーか、簪ちゃんの肌真つ白でキレイだったな。それに胸も意外と……って、何思春期のエロガキみたいなこと考えてんだ俺は!?)

（う、うううう……どうして大輔さんがここに!?! 私は本音が同室だつて聞いてたのに……そういうえば、さつき本音が来たとき荷物持つてなかつたし、先にシャワー浴びるようにいったのも本音だし、もしかして本音わざとやったの!?!）

頭を抱えて悶える大輔に対し、簪は頭の中で「やったねかんちゃん! これで一歩リードだよ」と笑いながら言っている幼なじみが頭に浮かんでいるのだった。

「な、なあ!」「あ、あの!」

「あつ、か、簪ちゃんからどうぞ!」

「う、ううん! 私は後でいいから大輔さんからどうぞ!」

気まずい雰囲気から抜けるために、何か話そうとするがお互いに声が重なってしまった。

そしたら、今度はお互いに譲り合う形になってしまった。偶然とは言え、こんなマンガやテレビの中で起こりそうなできごとが起きて、お互いに笑い合うのだった。

「わりい、そんじや俺からな。残念だったな、同じクラスになれなくて」

「うん……でも、これは学園側が決めることだから仕方ないよ」

「そだよな。まあ、別なクラスなだけだし。なんなら、毎日一緒に飯食うか?」

「よ、喜んで!」

さつきまでの気まずい雰囲気はどこえやら、今では楽しげに話しているのだった。

結構甘い雰囲気を出す二人だが、お互いちゃんと知り合ってから、そんなに経っていない。

そのためか、お互いを知るための世間話が多かった。

「へえ、簪ちゃんと楯無さんは本音ちゃん以外にも、3年生に幼なじみがいるんだ」

「うん。本音のお姉ちゃんなの。そういう大輔さんこそ、お姉ちゃんと同じ選ばれし子供たちの中で何人かは同じサッカークラブで知り合いだったんだね」

「ああ。あんときや、俺もびつくりしたんだよね。そういうえば、なんで俺をさん付けなんだ？太一さんならわかるけど、同い年だろ？」

会ってからずつと疑問に思っていた、さん付けについて簪に聞くのだった。

すると、簪はもじもじと恥ずかしさを表すように答える。

「その…大輔、さんは私にとってヒーローで…憧れで…だからついさん付けしちゃうの」

「ヒーローって…俺はそんな特別なやつじゃないぜ？むしろ、賢の方が何でもできるし。ヒーローっぽいだろ」

「そうじゃなくて…大輔さんは、今まで他人の評価しか見てなかった私を変えてくれたから。ほかの誰でもない、大輔さんだから私はヒーローだって思ってるの」

「お、おう」

顔を真っ赤にしながらも、いい笑顔で語る簪に大輔も顔を真っ赤にしてしまう。

「だから、私は大輔さんのことをこう呼んでるの」

そう言い終えた簪は、恥ずかしい事を言ったのに気づき、また赤面してしまった。

大輔は突然立ち上がり、簪の前に立つと簪の両手を握った。

「だ、大輔さん!？」

「それじゃあ、俺も。簪のヒーローでいられるように頑張らないとな!」

無邪気な笑顔で大輔は告げるのだった。

その言葉と笑顔に、簪はフリーズしてしまう。

そんな簪に気づかず、大輔は「よっしゃ、やるぞー!」と腕を回しながらいい、勉強机に座り参考書を開くのだった。

ここで、二人の考えはすれ違っていたことを知らない。

大輔のあの言葉は、自身が今まで太一に憧れ、ヒーローのように思っていたのが、今度はその思いを受ける立場になったから出た言葉であったのだった。

鈍感な大輔は、先程の言葉が告白紛いなことに気づいていないのだった。

まさに、鈍感とは罪なのであった。

第10話 大輔の夢とイギリスの代表候補生登場

鳥の鳴き声が何処からか響く中、簪は目を覚ました。

「ん……ん、ど……？」

何度か目をこすり、眠気を払おうとする簪。

目に入った見慣れない部屋に疑問を持つのがだったが、ここがIS学園の寮の部屋だとわかるのに、少しかかる時間がかかるのだった。

しばらくして、完全に目を覚ました簪は隣のベットに目を向ける。

そこには、ルームメイトであり、好意を抱いている相手、本宮大輔がいます。思っていたが、ベットの中は無人だった。シーツに触れるが、冷たく大輔が起きてからそれなりに時間が経っている事が分かる。

一緒に朝を迎えられると期待していた簪は、少し気落ちしつつもシャワーを浴び、髪を整えるのだった。

「かんちゃ〜ん！朝よ〜！」

「あ……おはよう、お姉ちゃん」

「おはよう！ほくら、太一さんも！」

「お、おう。おはよう、簪」

「おはようございます、太一さん」

制服に着替え、食堂に行こうと思った簪だったが、扉を開ける前に姉の楯無と簪にとつて先輩である太一がやってきたのだった。

扉を開け、ハイテンションな楯無に対し、太一は大輔もいるとは言え女の子がいる部屋に入るのに躊躇いがあったが、楯無に無理やり入らされるのだった。

「あれ、大輔の奴は？」

「起きたらいませんでした…」

「む、大輔くん。かんちゃんを起こしてあげればいいのに」

「どうやら太一たちも大輔の居場所を知らなかったようだ。」

まあ、大輔も子供ではないのだしほつといても学校に間に合うだろうと考え、3人で食堂に向かうのだった。

「あ~~~~！かんちゃんだ~~~~！お嬢様とたつくんもいる~~~~！」

食堂に向かう最中、三人の後ろから間延びした声が聞こえた。

振り返ると、こちらに向かつて手を振っている布仏本音の姿が見えた。

手を振りながら走つてこつちに向かつている姿は、どこか小動物チックで子供のようにも見え微笑ましさがあった。だが、ただ一人。簪は少し睨むように本音を見つめてい

た。

「おはよう本音……昨日のはわざとだよね？」

「ん？？なんのことかな？」

「あら？かんちゃん、昨日何かあったの？」

「な、なんでもない！」

「本当に？」

「こら、楯無。簪が嫌がってるだろ？」

昨日、寮に入ってきた大輔にバスタオル一枚の姿を見られたのが本音の仕業だとわかっていた簪は、問いつめるものの本音はのらりくらりと躲すのだった。それどころか、楯無に興味を持たれてしまった。やはり、他の人にあの事を言うのは恥ずかしいから、なんでもないとごまかすのだった。

こちらの態度で、興味が増したのかしつこく質問する楯無を太一が鎮めている。

そんなやり取りをしながら、食堂に入った一同。

だが、入って直ぐに固まってしまったのだった。

一同の視線の先には、人だかりができています。だが、見ているのはその先。そこには

……

「ラーメンセットと和食定食できたっす！」

「あいよ！焼き魚定食、お願いね！」

「はいっすー！」

厨房で食堂の職員の方と一緒に料理をしている大輔の姿があったのだった。

なお、この人だけは料理中の大輔を見ていたのだ。見ていた女性徒の反応はというと…

「う、嘘…すごい手際いい！」

「それだけじゃない、すごいおいしいよ！」

「うう…女として負けちゃいけない勝負に負けた気がする…」

と、驚きと好評の声が上がっていたのだった。

だが、ここまで人ばかりが出来ていたら料理の受け取りもできない。そんな彼女らを叱るものはいるのであった。

「貴様ら…そんな所において、料理の受け取りができません！用がないものは去れ！」
「すみません、離れてくれないと受け取りが…」

大輔と太一、本音のクラスの担任である千冬と副担任の真耶がやってきては注意を促していたのだった。

二人のおかげで、先ほどまでできていた人ばかりはみるみる少なくなっていくのだった。

というか、何気に大輔が作った料理をこの二人は受け取っているのだった。

さすがにこのままでは邪魔になると思った簪たちは、食券を買い、料理（大輔作）を受け取るのだった。それと同時に、自身の朝食を持って大輔も厨房から出てくるのだった。

「あ、おはようございます！太一さん！楯無さん！簪ちゃん！本音ちゃん！」

「おう、おはよう大輔。つーか、お前は朝っぱらから何やってんだ！」

「い、痛い！痛いっすよ、太一さくん！」

先ほどの驚きの腹いせか、やってきた大輔にヘッドロックをかける太一だった。

「何って……ちよつと料理してただけっすよ〜」

「もう、驚いたんだからね。でも、一体何時から料理してたの？」

「ん〜、5時30くらいからっすね」

「……そんなに早くから料理してたんだ」

「でも〜、なんでだいちちゃんが料理してたの〜？」

本音の疑問ももつともである。学園に入学した次の日には、厨房で職員と一緒に料理をしているなど、世界中で何人いるだろうか。

その本音の疑問に、大輔はあつけからんと答える。

「あ〜。ほら、俺って料理が趣味だからさ。朝食も自分で作りたかったんだよ。そんで、

おぼちゃんたちに材料を使わせて欲しいって言ったら、手伝えばくれるってさ。料理好きだし、嫌じゃなかったから」

「まあ、大輔の料理はヤマト以上に美味いからな」

「うん。料理に関しては、私も大輔くんには及ばないな」

「そ、そんなに凄いんだ…」

年上二人組の好評に簪は純粋に驚いていた。

太一の評価では、ヤマトという人物がどれほどの腕前なのか知らないためわからなかったが、何でも万能にこなせる楯無が勝てないという事にかなり驚く簪と本音だった。

どれほどの腕前か気になった二人。簪は塩ラーメンを。本音はチョコパフェを口にするのだった。

「ツ!!すごい美味しい!!」

「ほんとだ〜!こんなに美味しいの初めてだよ!!」

どこかの美食家のような、オーバリーアクションは取らないものの、二人の評価に大輔は満足気味だった。

「あつたりまえよ!料理に関しては、一切の妥協もしないからな!」

「ホントに凄い…:大輔さんは、ずっと夢に向かって努力してたんだね」

「ふえくく、だいちゃんの夢って料理人なんだ」

「あはは、料理人っか：ラーメン屋な。ってか、簪ちゃん。俺の夢覚えててくれてたんだな。あれから結構経つのに」

「もちろん覚えてる。あの日の出来事……私の大切な思い出だから」

そう微笑んで言う簪に、大輔は顔を赤くするのだった。

だが、ここは食堂である。つまりは、他の目があるのだ。

その光景を、多くの生徒が好奇心に負け見つめているのだった。

その事に気づいた簪は、恥ずかしさのあまり耳まで顔を真っ赤にして俯いてしまいうのだった。

「うくん、なんか私たちって今空気ね」

「仕方ないよお嬢様。あそこまでのいい雰囲気の二人を邪魔したくないです」

「っか、早く食わないと遅刻するぞ」

二人の雰囲気ので、空気になっていた三人がいるのだった。

* * * * *

朝の騒動からしばらくして、既に2時間目の休み時間になっていた。

さすがに、昨日散々女性徒たちから観察されていたからか、幾分か慣れた大輔と太一と一夏。三人は集まって、次の授業の予習をしていた。

今までの予習のおかげで、だいたいは把握できている太一。夜に勉強したおかげで、なんとか理解できてきているがまだ余裕の無い大輔。一切予習ができなかったためか、理解できずに頭から煙を出している一夏。

三人の表情を見れば、平気かどうかはよくわかった。

そんな中、三人に声をかける女性徒がいた。

「ちよつとよろしいかしら？」

「ん？ああ、どうかしたか」

女性徒が話しかけてくるのを、余裕のある太一が反応していた。

大輔と一夏はというと、余裕の無さから勉強に集中し過ぎて気づいていなかった。

「まあ！私が声をかけた事ですら光栄ですのに、それ相應の態度があるのではないでしようか」

明らかに上から目線の態度に、太一だけでなく大輔と一夏も動きを止めてしまった。

この女生徒は、まさしく今時の女性、女尊男非の思想に染まっているのだとわかりきっていた。太一や大輔の周囲には、その様な思想に染まった女性はおらず、苦手としているのだ。

「俺、お前のこと知らないぞ」

「知らない!?!私を!?!このセシリア・オルコットを!?!」

自分の事を知らないと言いつつ一夏に、演技の様な表情ではなく心の底から驚いているといった驚き様を見せるセシリア。

その名前にピンとこなかったのは大輔も同じだったが、太一は違った。

太一は自身がIS学園に入学すると決まっていたから、仲間である泉光子郎にISについて調べてもらっていたのだ。何故、自分で調べないかというと、太一は機械が大の苦手だった。今では克服できたが小学生の頃は、壊れた機械は叩けば直ると考えていたし、大事な場面でパソコンをフリーズさせてしまうという苦い経験があるせいで、機械類、特にパソコンを使うときは誰かが近くにいないと使っていないからだ。理由の一つに、光子郎にみっちり勉強させられた事が若干、ドラウマになったのもある。他にも、世界各国にチャット仲間のいる光子郎なら多くの情報が手に入るというのも大きい。

その光子郎が調べてくれた情報の中で、イギリスの代表候補生にセシリア・オルコットという女性。それも、今年IS学園に入ると聞いていたので、知っていることができた。

「わるいな。名前は知ってたが、顔までは知らなかった。イギリスの代表候補生なんだろう?」

「あら？そちらの方は、まだマシみたいですね。ええ、そうですね。私はイギリスの代表候補生、つまりはエリートなのですわ。本来なら貴女方と会うことすらできないのですから、もつと光栄に思ったらどうです？」

そのセシリアの言葉に、大輔と太一は苦笑していた。

確かに代表候補生になれるのは、IS操縦者の中でもエリートだけだ。そこを考えれば、確かに光栄だと思える。けれど、彼らの知り合いには若干15歳にして、大国ロシアの代表というエリート中のエリートである更識楯無がいるので、そこまで光栄には思えていなかった。さらに言うなら、そんなISでトップクラスの実力を持つのに鼻にかけない楯無を知っているから、セシリアにはあまりいい感情を持っていなかった。だが、今は持ててないだけで、いずれはいい感情を持てるのではないかと期待していた。

「なあ、太一さん」

そんな中、一夏が太一に声をかけるのだった。

「どうかしたか、一夏？」

「だいひょうこうほせいって、何？」

「だああああああ!!!?」

一夏の疑問に、驚き太一と大輔はつい叫んでしまった。

よく見れば、周囲の女性徒たちも驚きのあまり転んでしまってる人もいた。それを聞

いていたセシリアは目を点にしてしまつて固まつてしまつていた。が、すぐに再起動する。

「だ、代表候補生を知らないなんて：日本はそこまで後進的な国ですか？」

「いや、単純に一夏が知らないだけだ。てゆうか、一夏！代表候補生なんて、名前でわかるだろ!」

「あ、そつか。I Sの国家代表の候補生か。そりや、ラッキーだな〜」

太一に言われて、言葉を思い出してみてもやつと納得した一夏。

だが、その言い方は明らかに馬鹿にしているように聞こえた。そんな一夏に、思わず太一は溜息がもれた。

「ふ、ふん！まあいいですわ！それよりも、貴方たちが泣いて頼むなら、私が色々教えてくださいあげましょうか？なんせ、私は入試で教官を倒せた二人中の片割れ！エリートですの!!」

一夏の馬鹿にしたような言い方に、顔を真っ赤にするもなんとか耐えながらそう述べた。体が小刻みに震えていることから、結構耐えているのだと分かる。

ちなみに、教官を倒したもう一人は簪である。

そんな中、下手なことを言わない方がいいと思つた太一は口を閉じるが、気づかない者たちがいた。

「へえ、入試でそんな事してたんだ。俺と太一さんはやってないな。一夏はやったのかよ?」

「ん? あく……やったつちややったな。一応、勝てたし」

大輔と一夏である。

しかも、一夏は思いつきり火に油を注ぐことを言ってしまった。

「あ、貴方も教官を倒したですって!!?」

「あ……いや、倒したというか、自滅したというか」

言つてから、やってしまったとやつと気づいた一夏だった。

何故一夏がこんな曖昧な言い方を言うかというと、一夏の相手は真耶だったのだ。真耶は男性に慣れてないため、一夏の相手をするときひどく緊張していた。その性で、開始と同時に突撃するもよけられ壁に激突して気絶してしまったのだ。一応勝ったことにはなっているものの、何もしてない一夏はそんな気はなかった。

どんどんとヒートアップしていくセシリア。そんな中、また一人の女性徒が近づいてきた。

「あく、そういえばね。だいちゃん。たつくん」

「本音ちゃん? どうしたんだよ?」

近づいてきたのは本音であった。

目の前の初心者だと思っていた、それも見下していた男が自分よりも強いかもしれない。その事実にはプライドを傷付けられたセシリアは捨て台詞を吐いて席に戻ってしまった。

今だ騒がしい周囲に、大輔と一夏は動揺し、太一は溜息を吐いた。

そんな中、この騒ぎを起こした本音はというと。

「につししく。だいちゃんも、たつくんに追いつけるように頑張らないとね」

「お、おう。そりゃ、太一さんは俺の目標だから頑張るさ」

「それでさ。かんちゃんに手伝ってもらえば？ 私よくかんちゃんに勉強を教わってるんだけど、かんちゃんって教えるのがとつてもうまいんだよ！」

「そうなのか？ けど昨日、簪ちゃんのヒーローでいられるように頑張るって言ったのに、頼るのはちよつとな……」

「大丈夫だよ。かんちゃん。そういうことは気にしないよ。むしろ、頼ってくれることに喜ぶと思うの」

大輔に簪のアピールをしているのだった。

この騒ぎは、チャイムが鳴つても続いていた。

そして、この騒ぎをおさめるために、千冬による連続出席簿アタックが発動するのだった。

ちなみに、主犯と思われた太一、大輔、一夏にはスクリューチヨーク投げが発動するのだった。

第11話 クラス代表選の始まり

休み時間にセシリアが来てから次の授業中、HRでの出来事だった。

「今から、このクラスの代表を決める。代表は、代表選の出席及びにクラス会議への出席……まあ、クラス委員の様なものだ。誰かなる奴はいないか。自薦、他薦は問わんぞ」

HRの担当である千冬がそう言った。

いきなりクラス代表に立候補するか、誰かを立候補しろと言われたのだ。クラスの生徒たちは少しの戸惑いを見せた。

けれど、戸惑いも直ぐに止んだのだった。

「はい！織斑くんを推薦します！」

その生徒を皮切りに、クラスメイトたちがどんどんと推薦していく。

「それじゃあ、私は本宮くんを！」

「いいえ、ここは三人の中でも大人な八神さんでしょ！」

「わたしは、だいちちゃんとたつくんの二人を推薦するよ」

「ああん、誰にすればいいかわからないよー！」

結局の所、男三人衆が推薦されてしまったのだ。その男たちはというと。

一夏は「へえ、他にも織斑って居たんだな」なんて自分は関係ないと言わんばかりに座っており、大輔はいきなりの事に戸惑い、太一は「やつぱりか」と溜息を吐いているのだった。

「ふむ、織斑に本宮、八神だな。他にはいないのか？別に自薦でも構わんぞ」

「先生！俺はクラス代表なんてやりません！」

やっと自分のことだと気づいた一夏は、大輔と共にクラス代表をやらないと意思表示する。太一は今までの千冬の行動から、他薦を断ることはできないと判断し、動かなかった。

立ち上がり、そう言い切った二人だったが、千冬が投げた出席簿が回転しながら一夏の頭に命中。命中した出席簿はブーメランの様に手元に戻り、再び投擲される。戻ってきた出席簿をもう一度投げると、大輔の頭に命中しました千冬の手元に戻っていった。

あまりの神業に拍手が漏れる中、いきなりの痛みに二人は頭を抑え着席してしまった。それを見ていた太一は、もし判断を間違えたらこうなっていたのかと冷や汗をかいていた。

「推薦されたからには、その期待に答えろ」

「いい、イエッサー……」

もう断ることをできないと悟った二人は、痛みに耐えながら声を絞り出した。

すると、急に机を叩く音が聞こえる。

「納得がいきませんわ！何故このセシリア・オルコットが、このような男たちが代表のクラスにならないければいけませんの！」

反論を上げたのはセシリアだった。

「だいたい！こんな男が代表なんて恥さらしもいいところですわ！これほどの屈辱を1年間も続けろといっていますの！」

あまりの女尊男卑な言い方に、大輔たちはゲンナリとしていた。

セシリアの言い方には、日本という国を見下した言い方だったが、特に気にする生徒たちはいなかった。もつとも、教師の千冬は若干青筋とたて、真耶はクラスに馴染めないんじゃないかと慌てているのだった。

「実力からしても、私の方がふさわしいですわ！それを、ただ物珍しさで決めてしまうのなど愚の骨頂！私はこの国にISの技術と技量を学ぶために来たわけであって、サーカスに来たわけじゃありませんわ！ただでさえ、こんな文化としても後進的な国に暮らすのですら耐え難い苦痛ですのに、それ以上の」

「イギリスだって対したお国自慢じゃないだろ」

「全くだ。菓子とかはうまいけど、イギリス料理はまづいもんばつかじゃねーか」

セシリアの暴言にカチンときた一夏と大輔そう言い返すのだった。

もつとも、大輔は自分の意思でいったものの、一夏はつい口からこぼれてしまったのであった。

太一はというと、あまり後先考えてない後輩二人に頭を抱えるのだった。

「あ、あなたたち！私の祖国を馬鹿にしますの！」

「先に馬鹿にしてきたのはそっちじゃねーか！」

既にヒートアップしてしまつた大輔は止まらなかつた。一夏もすでに、どうにでもなれといった様子だ。

正論を突かれたセシリアだったが、祖国を馬鹿にされた事の怒りで止まることはなかつた。

「決闘ですわ！」

「ああ！望むところだね！」

「四の五の言うよりわかりやすいな！」

「少しは落ち着け！」

ヒートアップした結果、ついには決闘にまで進展してしまつた。

まだ暴走しつづけてる大輔と一夏を、太一が止めるのだった。

「ちよ！なんで止めるんすか太一さん！」

「そうだよ！こんな言われて腹立たないのかよ！」

「確かに腹立つけど、少しは冷静になれって！」

「あら？他の二人は無謀ながらこの私に挑むのに、貴方は尻込みですか？これでは、国家代表に勝ったというのもデマ、もしくはその代表があまりにも弱かったのかしらね？」

挑発的に言うセシリア。

だが、その時、大輔は顔を真っ青にしていた。一夏は何故、大輔が顔を真っ青にしていたか不明だったが、ある方向を見て同じく顔を真っ青にしていた。

「その程度の実力で国家代表になれるのでしたら、私ももうすぐ国家代表に」

「オルコット……少し黙っとけ」

「ひっ!？」

途轍もなく良い笑顔で言う太一。

だが、その太一の背後には骨で出来た竜がこちらを睨みつけているのを幻視してしまいう程のプレッシャーを放っていた。

そのプレッシャーに気づいたのはセシリア、大輔、一夏、箒、そして千冬と真耶だ。千冬ですら冷や汗を格プレッシャーに、他の5人は震えていた。気づかない生徒たちは、ただ首をかしげるだけだった。

「ま、まずい……太一さんがキレた……」

「な、なあ、大輔……太一さんがキレるといつもああなのか？」

「いや…普段は太一さんはあまりキレないし、そんなでもないけどよ…あの人が関わると、太一さんがスゲエキレるんだよ…」

「そ、そうなんですか…?」

あまりの恐怖に、大輔と一夏、真耶は教室の隅に避難していた。

セシリアは、太一のプレッシャーを浴びながらも、言葉を紡ぐ。

「いいいですわ! 決闘で、私がエリート中のエリートだと証明して」

「だからよ。少し黙っとけ、な?」

「は、はいいい!!」

震えながらも、自身のプライドを保とうとする。

だが、太一から発せられるプレッシャーが今度は黒い竜人が鉤爪を突きつけてくるものに変わった。

その瞬間、セシリアがプライドなど捨て、太一の言うことに従うのだった。

「織斑先生。そういう訳なんで、クラス代表は俺と大輔、一夏、オルコットの4人がISで勝負して決めることになりました」

「うむ。了解した。勝負は一週間後、第三アリーナで行う。構わないな」

太一が仕切る中、千冬は太一から感じるプレッシャーに気持ちが高ぶっていた。

現役を引退してから、久しく感じる圧倒的な威圧感に心地いいほどの汗をかいている

からだ。

そして、太一は再びセシリアの方を向く。

「はい。オルコット」

「は、はい！なんでしよう！」

「言っておくが、お前の実力は知らない。けど、お前とアイツが戦うなら、アイツが絶対に勝つ。アイツはそれほどの実力があるんだ。まあ、俺が言っても信用できないだろうから」

そこで、太一は言葉を区切り言い放った。

「だから、俺が証明してやる。ロシアの代表は、どれだけ強いかをな」

余談だが、この言葉をとあるのほほんとした少女が録音し、某学園最強の生徒会長に聞かせたとか。

そのせい、2年のある生徒が頭から湯気を出しながら倒れて、保健室に運ばれたと

第12話 クラス代表戦開始!大輔vs太一

セシリアの挑発のせいで、太一が今までのストレスとかを爆発させて一週間が経った。

この一週間、太一は楯無と、大輔は簪と、一夏は箒とマンツーマンで指導を受けていた。もつとも、太一と大輔たちはお互いのパートナーも専用機を持っていて、実践的な訓練を行っていたが、専用機が試合当日にもらえる一夏は箒と共にISを使わない剣道での特訓で一夏の勘を取り戻していた。

最初はISを使わない特訓に文句を言っていた一夏だったが、太一からISは手足の延長線に近いから生身の動きはISの動きの練習になるし、大切なイメージの特訓にもなると聞き、やる気を倍増しているのだった。

最初は太一を頼ろうとした一夏と頼られていた太一に不機嫌さをあらわにした筈だったが、太一の勧めで一夏の講師役になり、一夏と一緒に過ごせる時間を作ってくれた太一とは名前呼び合うくらい仲になっているのだった。

そして今、太一と大輔、一夏の三人と付き添いの箒は第3アリーナのピットに向かっていた。

「つーかさ、何で今から試合する俺と太一さんが同じピットに向かうんっすかね？」

「さあな。俺も知らないさ。まあ、何か考えでもあんだろ」

「てか、何で俺もなんだ？」

「太一さんは別としてお前ら、落ち着くことができんのか？」

それぞれの考えを口にしながらいきなりピットに入っていく四人。

入ってすぐに目に入ったのは、白いISだった。

「む、来たか。織斑、八神、本宮」

「やあ、久しぶりと初めましての言葉を贈ろうか」

いきなり目の前に入ったISに固まった一同だったが、中にいた千冬と一人の男に声をかけられてようやく起動した。

「ち、千冬姉!?!このISは? ってか、この男の人誰!?!」

「ゲンナイさん!?!あんた、何でここにいんだよ?」

「そうっすよ!?!不法侵入でもしたんすか!?!」

「はは、落ち着きたまえ。まずは、織斑くん。初めまして。私はゲンナイ。無国籍IS研究企業、ホメオスタシスの社長をやっている者だ」

ゲンナイの登場に驚きを隠せない三人だったが、太一と大輔はゲンナイがISの研究

をやっていたことから、このISもゲンナイが持ってきたものだろうとあたりをつけ
た。

「今日は君の専用機を持ってきたんだ。この白いISがそうだよ」

「これが…俺のIS」

「そう。名前は白式びやくしきさ。すぐにフィッティングとファーストシフトといきたいが、ま
ずは私の助手を紹介しよう!」

「えっ、ゲンナイさんの助手つすか?!」

「ゲンナイさんの助手といえは…」

自身の相棒になるIS、白式に触れる一夏。

そんな中、ゲンナイが両手を広げまるでどこかの悪の科学者のポーズをとりながら、
助手を紹介すると言った。

大輔と太一の頭に浮かんだのは、以前会う機会があったゲンナイとまったく同じ姿の
仲間たちだった。あれは、いくらなんでも混乱するのでは?と疑問に思っていた。そん
な中、大輔たちが入った扉の反対側が開いた。

「君が織斑くんですね。初めまして。僕は、ゲンナイさんの助手を勤める」

「光子郎!」「光子郎さん!」

「泉光子郎です。………太一さん、大輔くん。勝手に自己紹介に割り込むのはどうかと

思いますよ」

扉から現れたのは、太一と大輔が（特に太一は）よく知る人物。太一と共にデジタルワールドを救い、何度も大輔たちのサポートしてくれた泉光子郎だった。

「光子郎くんは、本来なら高校三年生だが、彼の能力をかった私たちがスカウトして、ホメオスタシスの一員に加わってくれているんだ」

「僕自身、ISに興味がありましたから、スカウトを受けましたんです。知識に関しては、ホメオスタシスで学んだのと、僕のチャット仲間にいる『一人アリスさん』から教えてもらった事があるので、役に立てると思います」

太一と大輔は、いつの間にか職についていた光子郎に啞然とし、一夏と箒は自身たちと二つしか変わらないのにIS研究企業の社長の助手という上役についている光子郎に驚愕するのだった。

ただ、この中で千冬が光子郎の言った『一人アリス』という言葉にとある科学者を思いだし、若干頭を抱えているのだった。

「さて！固まってるところ悪いけど、織斑くんにはこのままフィッシングとファーストシフトしてもらいたい。その間に、太一さんと大輔くんは試合を行なってもらうから、別のピットに移動してくれ」

「ゲンナイさん、何故あなたが指揮しているのだ。そういうわけだ、八神と本宮は別の

ピットに移動してもらおう。八神は山田先生に、本宮は布仏に案内してもらえ。二人とも、既にピットの外で待っている」

「は、はい」

まだ驚きから抜けれてないのか、生返事で返答する二人。

そんな二人の意識を呼び戻すために、軽く出席簿で頭を叩く。すると、その衝撃で二人の意識は戻ってきて、そのままピットに移動するのだった。

「それでは織斑くん。さっそく白式に乗り込んでください。ISに背の預ける感じで乗り込むんです」

「わ、わかりました」

光子郎に促進され、さっそくISに乗り込む一夏。

装甲の開いていた白式は、一夏が乗り込む事で装甲が閉じるのだった。

ISに乗ったことで、ハイパーセンサーが起動し、一夏の視界が360度広がる。急に周囲が見えるようになった視界に、戸惑いはしたものの気持ちの悪さなどはなかった。

そんな時、急に一夏に頭痛が走った。

周囲にいる人物、特に箒からは心配する声をかけてくるが、頭痛のせいで何を言っているのか一夏にはわからなかった。

不意に、視界が一面真っ白な空間に変わる。

どこまでも広がる真っ白な空間。だが、自分の目の前に誰かがいた。

まばゆいほどの白い髪。それと同じワンピースを来た少女。

白い甲冑を身に纏い、フェイスガードで顔は見えないものの体つきで女性だとわかる女性。

そして、二人の間に立っている青いウロコに白い腹と爪、赤い翼に角、瞳を持つ小さな竜。

この二人と一匹を一夏は知らない。けれど、どこか懐かしさがある。

『——が——モンの？』

『そ——だよ』

『——して——た——のば——とな——すね』

二人と一匹の会話。

途切れとぎれで全て聞き取れていなかった。

『あ、——んだね』

『——え。ま——た——、——あい——しよう』

言葉を残し、消えてしまった二人。

残った竜は、一夏に近づいていった。

そして、はつきりと聞こえる声で一夏に言った。

『今はまだちゃんと会えないけど…いつか、きつと。ちゃんと会おうな、一夏』
一夏の意識がまた反転した。

* * * * *

その頃、本音の案内でピットについた大輔は、直ぐさまブイフォースを展開していた。

「つしゃ!行くぜ、ブイモン!」

『おう!いつちよ、カマしていこうぜ!』

「頑張つてね。だいちゃくん!ブイブイ!」

ピット内には、本音しかいなかったためブイモンも問題なく喋れている。

本音はパートナーデジモンはいないけれど、デジモンの存在を知っている。むしろ、更識家の者と更識家が信頼している者たちはデジモンについて知っているのだ。

何故か、USBメモリ片手に激励を送る本音から見送られ、カタパルトからアリーナに入るのだった。

アリーナ内には、既に太一が待機していた。

「太一さん!今日は負けませんよ!」

「それはこつちのセリフだ。楯無から直々に鍛えてもらったんだ。アイツの顔に泥を塗るわけにはいかないからな！」

『それに、僕だっているしね！』

「俺だつて、簪ちゃんから教わつたんだ。無様な真似だけは見せないぜ！」

『いつくぞう、太一！アグモン！』

二人と二匹が話しているうちに、試合開始のカウントは進んでいく。

カウントが0になった瞬間、太一と大輔は同時に動き出した。

「でやああー！ー！！」

「はあっ！」

開始と同時に殴りかかってきた大輔と太一が左手で受け流し、直ぐさま右手で正拳突きを放つ。

けれど、流される事がわかつていた大輔は、直ぐさまブースターを噴かせ上昇。そのまま、体を縦に回転させ、勢いを乗せたかかと落としをはなつ。

太一はそれを、両腕でガードすると同時に、その場から下降することで勢いに逆らわずに受け流した。

その一瞬のできごとに、先ほどまで歓声をあげていたアリーナが静かになる。けれど、直ぐさままた歓声上がるのだった。

「ブイモン!一気に行くぜ!」

『ああ!どれで行くだ?』

「ここは……:勇氣だ!デジメンタルアープ!」

大輔が叫ぶと、大輔の目の前に炎の模様と角が生えた卵のような物、勇氣のデジメンタルが現れる。

それは、前みたいに手で持てるサイズではなく、大輔と同じ大きさだった。

勇氣のデジメンタルが光を放つと分離し、ブイフォースの各部にくっついていく。

「アーマーシフト!フレイドラフォーム!」

「げ……それが大輔のISの能力かよ……」

見た目がフレイドラモンになったブイフォース。

これは、ブイフォースの特殊換装型装甲デジメンタルの能力である。これには、勇氣・友情・愛情・知識・純真・誠実・光・希望のデジメンタルがあり、8つのデジメンタルを変えながら臨機応変に対応することをコンセプトとされている。武装を変えるデジローダーと姿を変えるデジメンタルとはある意味、近い能力だ。

太一からしたら、勇氣と友情、そして奇跡の姿を知っている。一度使ってからなくなった奇跡があるかは知らないが、残りの6つの姿は知らないため、対策が上手く取れないのだった。

「行きますよ! 『ナツクルファイア』!」

『ロックオン! いっけー!』

『太一! 来るよ!』

「わかってる! このカードで行くぜ! 『ベビーフレイム』!」

ブイモンによって、ロックオンされたナツクルファイアは、それぞれが上、中央、下と三方向に別れて太一に迫ってくる。

速度はあるが、かわせないことがないため、回避するのだったが、3つの炎はまるで太一に引き寄せられるように旋回し、太一に向かっていく。

だが、距離が空いたことでカードを入れることが出来た。太一はアグモンのカードを挿入すると、アグモンの目が光と同時に口が開き砲身がのぞく。砲身から放たれた火球は、ナツクルファイアの3つ内二つを迎撃するが、残された一つが太一に向かう。

相殺された時に発生した煙でどうなったか見えないが、爆発音から最後の火球が当たったことがわかった。

『やったか!?!』

「馬鹿! それは言うな!」

フラグをたてるブイモンに、大輔が叫ぶ。

すると、煙から勢いよく太一が飛び出してきた。

一瞬、驚くものの、再びナツクルファイアを放つが、いつの間にか持っていた楯でナツクルファイアが防がれてしまう。

「おらー！」

「ぐっ…」

ナツクルファイアを突破し、大輔に接近した太一はそのまま一瞬でトップスピードを超える瞬間^{イグニッションブースト}加速を使い楯で突進する。直前までナツクルファイアを放っていた大輔は、急に加速した太一に反応できず、楯にぶつかる。よろけた大輔は、そのまま太一の回し蹴りを受けるのだった。

「くっ…太一さん、その楯ってまさか…」

「ああ。デジローダー、第2の姿。『テイルシールド』だ！」

太一が持っている楯は、デジローダーにテイルモンのカードを入れて変化した楯だ。テイルモンの顔を模した三角型の楯。ダイヤモンドよりも硬いデジタルワールドの金属クロンデジゾイドの模造品、擬似クロンデジゾイドで作られたいるため、そう簡単に壊れることがない鉄壁を誇る。

「知ってるか大輔。ハイパーセンサーはセンサーだけだよ、視界が360度見える様になれるって」

「?それが、どうしたんっすか」

「そして、テイルモンにはこんな技があるんだ！」

『いづくぞ〜！キヤッツアイ！』

『うわあ！眩しい！』

目を閉じていたテイルシールドは、アグモンの言った技名と共にその目を開いた。

そこから見えるテイルモンの目が輝くと、強力な光を放っていた。

あまりの眩しさに目を覆う大輔だったが、光が止み視線を元に戻すと

「た、太一さんが増えたあ!？」

『ど、どうなってんだこりや!？』

そこには、同じ姿勢の太一が何人も見えていた。

これが『キヤッツアイ』の能力である。本来のキヤッツアイは、その眼光で自分自身を攻撃させるものだ。けれど、このキヤッツアイは強力な光で中枢神経系を刺激し、網膜に何人もの自分を投射させる能力なのだ。

「次！行くぞ！」

『うん！バードアロー！』

いくら姿を何人も見せても、声までは増やせれないので、だいたいの方向を検討がついた。

けれど、正確な場所を見分ける前に太一は籠手に戻したデジローダーにバードラモン

のカードを挿入する。

すると、今度はバードドラモンを模した弓に変わるのだった。

バードアローから放たれる矢。けれど、その矢は、何人にも見える太一が一斉に放つてくる。そのため、どれが本物かわからず大輔に当たってしまう。

「くっそ……どうすりゃいいんだ!」

『大輔!ここは、知識のデジメンタルだ!』

「信じるぜ、ブイモン!デジメンタルアールップ!」

このままではラチがあかないと判断したブイモンは知識のデジメンタルに変えることを提案した。

大輔はブイモンを信じ、直ぐさまデジメンタルを変えるのだった。

勇気のデジメンタルは光とともに消失し、今度は黄土色の卵型のデジメンタル。知識のデジメンタルが出現する。知識のデジメンタルにより、放たれていた矢は防ぐことができ、そのまま矢が止んだ瞬間に光となって分離しブイフォースにくつついた。

「スライドアーマーシフト!ハニービーフォーム!」

まるで蜂の様な姿をしたブイフォースが変わっていた。

これは、ブイモンが知識の紋章で進化した姿ハニービーモンをモチーフにしている。

ハニービーモンは小柄で一撃の威力が小さい。だが、それを覆す程の大きな利点を

持っている。それは…

「行くつすよ!」

「なっ!?!消え…」

「へぶっ!?!」

『ええええ!!?』

目にも止まらぬ高速移動!

なのだが、あまりの速さに大輔は太一を通り越し、そのままアリーナのシールドにぶつかってしまう。

いきなり消えたかと思うと、気づけばアリーナにぶつかっていた大輔にブイモンとクラスメイトたちが驚きの声を上げた。

だが、太一は一人冷や汗をかいていた。

なぜなら、さっきの大輔の動きがハイパーセンサーがあるにもかかわらず見えなかったからだ。もしも、この速さを大輔が使いこなせるようになれば、反応できない太一は大輔に圧倒されるだろう。

『……………変えるか、大輔』

「……………デジメンタルアープ!スライドアーマーシフト!ライドラフオーム!」

「って、あぶねえ!」

初めて使ったハニービーフォームは、使いこなせない事を悟った大輔はすぐさま姿を変えた。

知識のデジメンタルは光になると、再びデジメンタルの形になると大輔に蹴り飛ばされた。蹴り飛ばされたデジメンタルは太一に向かっていくが、直ぐさま太一はかわすのだった。

今度は黒い瓢箪型のデジメンタル、友情のデジメンタルが出現し、光になりブイフォースにくつつく。

黒いアーマーに額にブレード、背には3本のブレードを持ったブイフォースライドラフォームに変化した。本来ライドラモンは、4足歩行の獣だが、ライドラフォームは2足歩行の人型になっている。

『大輔!残りSEが少ない!一気に決めるぞ!』

「ああ!行きますよ、太一さん!」

「正面対決か…受けて立つ!」

『負けないぞ〜!』

大輔はライドラモン専用装備である曲剣を手にすると、その剣に電撃が走る。それに対し、太一はバードアローを力いっぱい引くと、リムと矢が炎を灯し出す。

『ライトニングブレード!!』

『メテオウイング!!』

振り下ろした剣から放たれた雷撃。

放たれた矢とリムから複数の炎の矢。

だが、雷撃は矢の貫通力に負け消失し、大輔に炎の矢が当たり爆発を起こす。爆発からでSEが尽きたのか、ISが解除され大輔が落ちてきた。

「あぶなえ！」

落ちてきた大輔を直ぐさま、太一が掴んだ。

どうやら、さっきの一撃で大輔は目を回して気絶してまったようだ。

『め、目がく世界が回る……』

『太一く、ブイモンも目を回してるよ』

「まあ、仕方ないか」

ここに、クラス代表決定戦の第一試合は太一の勝利で終了するのだった。

第13話 セシリアとの戦い!グレイソウル、本領発揮

!

「うっ……ん……」

何やら、周囲から様々な声が聞こえ、大輔は目を覚ました。

目を開いた先に見えたのは、ルームメイトである簪の顔だった。

「簪……ちゃん……?」

「あ……大輔さん、起きた?」

「ん…………つて、ええええええ!!?」

始めはぼんやりとした大輔だったが、直ぐに自分が簪に膝枕されている事に気づき、飛び起きるのだった。

「か、簪ちゃん!?何してるの!?!というか、どうしてここに!?!」

「えっと……膝枕を……本音がやったほうがいいって」

「本音ちゃ〜ん!?!」

生まれてこのかた、ずっと膝枕なんてされたことのなかった大輔は盛大に慌てていた。

なお、簪が膝枕していたのも、本音が「だいちゃんかね、試合で気絶しちゃったの。頭打つちやっつたっぽいから、かんちゃん膝枕おねがう」と頼んできたからだ。簪はそれを、顔を真つ赤にしながら了承したのだった。

「おつ、やつと起きたか。大輔」

「お疲れ様。大輔くん。かんちゃんの膝枕、どうだった？」

「太一さん！楯無さん！……って、これってどういう状況ですか？」

先輩二人の登場に、ようやく落ち着きを取り戻した大輔。

周囲を見渡すと、何が何だかわからなくなっていた。まず、目の前にちよつと呆れた表情をした太一と楯無。すぐ近くに、顔を真つ赤にしてる簪。出入り口の扉から、半身だけ出してこちらを眺めている本音。そして、正座で説教されている一夏と説教している千冬と箒。おろおろしている真耶。周囲そっちのけで、話し合っているゲンナイと光子郎。

敢えているなら、カオスだ。

「あく……簡単にいやあ、俺たちの試合の後一夏がオルコットと試合したんだ」

「ちよつどその辺りに、私とかんちゃんが来たわね。結構試合が良かったから、他のクラス生徒も見学OKになったのよ」

「それから……織斑くんが自滅でオルコットさんに負けちゃったの……」

「あく…それで、今説教中って訳だな」

太一たちの説明で、現状把握できた大輔。

すると、説教が終わったのか千冬が近づいてきた。

「本宮。お前にも色々と言いたいことがあるが、まずは八神。試合だ」

「了解です。行くぞ、グレイソウル」

千冬に呼ばれ、専用機を機動する太一。

大輔は千冬に、後で色々と言教されることを考えると、既に身震いしていた。

太一は、そんな大輔を放置しカタパルトへと歩いていく。

「太一さん!俺の分もお願ひします!」

「太一さん!頑張ってくれ!」

「うむ。しつかりな」

「八神くん、無茶はいけませんからね!」

「八神。オルコットの天狗の鼻を折ってこい」

「太一さん…頑張ってるね…!」

「太一さん。グレイソウルの整備はバッチシです」

「データとりとか気にせずに、思う存分やってくるんだよ」

すれ違うたびに、激励を受ける太一は、密かに口元を緩めていた。

そんな中、太一の前に楯無が現れる。

「太一さん……」

「楯無。どうかしたか？」

「私のことは気にしなくていいから……怪我しないでね？」

今回の選抜戦、ある意味セシリアが楯無の事を馬鹿にしたことがきっかけで起きたと言っ見方もある。

もちろん、そのことはここに居る全員が思ってもないが、楯無本人はそう思っていた。そして、太一はいつも無茶をする、

だから、このまま行かせて、自分のせいで太一が傷ついてしまうのが嫌だったのだ。

その事をわかった太一は、右手の装甲を消し、素手で楯無の頭を撫でる。

「あつ……」

「それじゃあ、勝ってくる。なぐに、心配すんな。怪我する気はさらさらねーよ」

そう言い残し、太一はカタパルトに乗り、アリーナへと飛び立つのだった。

アリーナには、既にセシリアが自身の専用機。ブルーティ Airways に乗って、待機していた。

太一は先程の試合を見ていたため、ある程度対策などを考えてあるのだった。

「よう、またせたな。オルコット」

「八神さん…いえ、少し待ったくらいですわ」

セシリアの返答に、思わず眉をひそめる太一だった。

自分の知っているセシリアなら、イヤミの一つでも言ってくるかと考えていたからだ。

だが、目の前にいるセシリアは普通に返答している。本当に目の前にいるのは、あのセシリア・オルコットなのかと疑問に思うほどだった。

「八神さん…始まる前に、謝罪させてもらいますわ。あなたと本宮さんの試合、そして一夏さんと向かい合い、私がどれほど愚かだったのか…身に染みしましたわ。私はずっと、父を…女性にヘコヘコと頭を下げ、機嫌を伺い続けている男性を見ていて、男とはそういうものだと思っていました。けれど、少なくとも貴女方は違うと悟りましたわ」

「お、おう…そうか」

「確か、日本には上には上がいるという言葉がありましたわね。まったくその通りですわ。あの試合を見て、私は八神さんに勝つ方法が浮かばない。それほどまでに、八神さんは強い」

「俺はそんな強くねえよ。俺が強いってんなら、楯無の…生徒会長のおかげだ」

「謙遜も行き過ぎるとイヤミになりますわ。まあ、それは置いてくとして。八神さん、私のこの傲慢だったプライドを完膚無きまでに叩き潰してくださいませ。そこから、私は前に進もうと思うのです。今までの自分を変えるために!」

「了解した！言つとくが、手加減する気はないからな。プライド叩き潰されて、再起不能になるなよ！」

セシリアの注文に対し、太一はデジローダーのカブテリモンのカードを挿入する。すると、デジローダーは大きな銃器に姿を変えた。それと同時に、太一の頭部にカブテリモンの頭部を模した兜が装備される。

ライフルのような、長い銃身はカブテリモンと同じ色をし、側面には4枚の羽の様なものがたたまれている。これが、デジローダーでカブテリモンをロードした姿『カブトブラスタ―』だ。

「私と同じ武装……八神さんとの実力差を知るいい機会ですわー！」

試合開始と同時に、セシリアはさっそく特殊兵装である4機のビット「ブルーティーズ」を展開し、太一の周囲を囲む。

囲まれたというのに、平然としている太一に疑問を持ちながら、セシリアはビットによる方位射撃を放った。

「……………いっつだー！」

「なっ!?」

あらかじめ、威嚇に一発。逃げ道に二発と直撃する軌道の射撃は一発だけだった。

太一はあろうことか、その一発を見極め、カブトブラスタ―の射撃で撃ち落としたの

だ。

ビーム兵器の利点は、発射から着弾までの速さだ。今いる太一と放ったブルーティアーズの距離から、ん命中に1秒もかからないくらいの範囲で、太一は直撃のみを見極め、さらに撃ち落としたのだ。

それだけではない。その射撃の後ろには、もう一発放たれており、そのままブルーティアーズの銃口に命中し、破壊されてしまうのだった。

勝てない事は理解していた。けれど、これほどの実力差があるとは思ってもしなかった。

「くっ…まだですわ!」

今度は自身の主武装である「スターライトmkⅡ」による射撃も合わせて、ブルーティアーズを放つ。

だが、いくらBT兵器に適正が高いとはいえ、まだブルーティアーズを操りながら自身の射撃はうまくいかない。それを分かって上で、セシリアは果敢に攻め続ける。

「悪いが、甘いぜ!」

雨のように降り注ぐビームを、太一は自身に当たるものだけを狙い打つ。

ビットと自身の同時射撃ができないため、セシリアのビームの一部は検討外な方向に向かったりもするが、それでも太一に向かつていくものは多い。

それをすべて打ち落とす太一の実力は、まさしく国家代表クラスなのは疑いようもない。

「まさか…これほどの差があるなんて…」

「まっ、こいつの特性のおかげでもあるが、一番は相棒のおかげだ」

「相棒？」

「そ。こいつ」

そう言つて、グレイソウルを指差す太一。

太一が言った特性というのは、ガブトブラスターで現れた兜のことだ。この兜は、装甲の硬さ以外にもセンサーの強化、聴力の強化ができる。それにより、空気のゆらぎ、ビットが飛ぶ音から予測が可能なのだ。

「ISを相棒、ですか」

「おう。俺にとつちや、こいつもあいつも、大切な相棒だ。だから、信じられる」
「でしたら…私もブルーティアーズ信じますわ！」

覚悟を決めたセシリアは、腰についているミサイルも使う。

放たれたミサイルは、直ぐに太一の射撃に打ち抜かれ爆発を起こす。

爆煙が発生し、お互いの視界を塞ぎ見失ってしまう。その為か、セシリアのブルーティアーズも戻り、射撃も止むのだった。

爆煙により、センサーが効かなくなつたため、何が起きるかを今も音をたよりに調べている。

音に集中した太一。こちらに向かつてくる音を聞きつけた。

タイムリングを合わせて回し蹴りで迎撃するのだったが。

「なっ?!オルコットが持つてたライフルだあ!!?」

回し蹴りで撃ち落としたのは、セシリアが持つていたスターライトmkⅡだった。

セシリアが主要武器を手放したことに、思考が一瞬停止したが直ぐに持ち直した。

けれど、その僅か一瞬にセシリアは太一の懐に潜り込んでいた。

「インターセプトッ!」

「くっ!」

潜り込んだセシリアは、近接武器「インターセプト」を取り出し太一に斬りかかってくる。

気づいた太一は、咄嗟にカプトブラスターを盾にする事で防ぐのだった。

「まだですわ!」

「ぐわ!」

「ダメ押しですわ!」

インターセプトを防ぐために力を入れる中、セシリアは戻っていたブルーティアーズ

2機を展開し、動けない太一を狙い打つ。

直撃したせいで、体勢を崩した太一を力任せに切り飛ばすと、ダメ押しにミサイルを発射する。

そのミサイルが太一にぶつかり、爆煙が広がった。

「はあ……はあ……やりましたの?」

『Evolution』

「悪いが……そいつはフラグだけ、オルコット」

広がる爆煙の中、無機質な音声が響くとセシリアの表情が固くなった。

それと同時に、爆煙の中から太一が飛び出してきた。

だが、太一のグレイソウルの姿は先程までと変わっていた。

「そんな!? ファーストシフト……いえ、セカンドシフトしたというのですか!」

「いいや違う。こいつは……エヴォリユーション・シフト進化移行だ!」

山吹色をした装甲は濃いオレンジ色に変わり、所々青いラインが入っている。

一番の変わりようとすれば、その腰に尻尾のような装甲ができている事だろう。これを知る人が見れば、太一のアグモンの進化したデジモン、グレイモンに似ていると答えるだろう。

この起きた現象、エヴォリユーション・シフトは太一のグレイソウルだけでなく大輔

のブイフォースにも組み込まれているシステムだ。このシステムを組み込まれたISSはセカンドシフトすることができない。けれど、一度なると戻れないセカンドシフトと違い、エヴォリューション・シフトは前の姿に戻ることができる。つまりは、デジモンの進化と同じ現象が起きているのだ。

結論から言えば、グレイソウルは形態を成長期から成熟期へと進化したのだ!

「まだ…まだ決闘は終わってませんわ!」

インターセプトを構え、斬りかかってくるセシリアを太一は片手で受けた。

何度も切りつけてくるものの、装甲には傷一つ入っていない。

セシリアの連撃を、インターセプトを引いた瞬間に体を回転させ、尻尾でなぎ払うのだった。

「くうう…」

「悪いが、こいつで決まりだ!」

吹き飛ばしたセシリアに向けてカプトブラスターを構える太一。カプトブラスターの閉じていた羽が展開された。

展開された羽の先端から、電撃が走ると銃口に電撃が溜まっていく。

「メガ…ブラスター!」

「ああああああ!!!」

電撃が溜まり引き金を引く。

そこから放たれたエネルギー弾は、この試合で放たれた物の中で圧倒的な威力を誇っていた。

事実、今まで一度もシールドエネルギーが減っていなかったものの、たった一撃で空になったからだ。

気絶したセシリアを横抱きで受け止める太一。

この瞬間、勝者は決定するのだった。

これでクラス代表選の全ての試合が終了するのだった。

第14話 闇の蠢き

デジタルワールドに存在するとある地域。そこに、選ばれし子供の一人ヤマトのパートナーデジモンであるガブモンがいた。

ガブモンの視線は、先程からずっと同じ場所を見つめている。

「まずい……あの噂は本当だったんだ!？」

冷や汗をかきながら、呟くガブモン。

だが、そんなガブモンに気づかれないように黒い霧が忍び寄ってくる。

「ヤマトに……みんなに伝えないと!」

直ぐさま走りだそうとするガブモン。だが、それよりも早く黒い霧がガブモンを覆い尽くした。

「うわあああ……ぐう……ヤマト……みんな……ウオオオオオオオオオ!!!」

黒い霧に覆われたガブモンは苦しみ、追い払おうと体を動かす。

だが、黒い霧は払うことができず、ガブモンは黒いガルルモンとなりどこかへ駆け抜

けてしまった。

「え、それでは！一年一組のクラス代表は八神くんに決まりましたあ！あつ、一と二で語呂もいいですね!!」

クラス代表戦から翌日、副担任の真耶により決まった代表が告げられた。

当の代表はというと……

「やっちゃまった……」

机の上で項垂れていたのだった。

太一本人はクラス代表をやる気はなかった。例え勝ち残っても、他の誰かに譲る気であつたのだが、大輔とセシリアとの試合で思った以上にテンションが上がってしまった、ついその事を言うのを忘れてしまったのだった。

そんな太一を、大輔と一夏、アグモン、ブイモンは視線でだが頑張れと送っていた。

「…まあ、なっちゃまったからにはしっかり務めないとな」

「うんうん、たつくんが頑張ってくれたら私たちはハッピー、だよ」

「そうだよね！八神さんの実力だったら、対抗戦でも勝てるよね！」

クラス代表での意気込みを言う太一。

そんな太一に、本音と本音の友達たかつきしずねの鷹月静寐はそんな太一に激励（二人は微妙だが）送っていた。

「は〜い、それじゃ授業を『びびびびび！びびびびび！』：う〜、誰ですか〜？携帯の電源を入れてる人は〜」

授業を開始しようとした真耶だったが、突然鳴り響いた電子音に遮られてしまった。そんな中、その電子音が鳴った物を持つ太一。そして、大輔は血相を変えて席を立ち上がった。

「山田先生！調子が悪いので、保健室に行つてきます！」

「えっと…俺は、部屋に教科書忘れたんでとつてきます！」

「えっ、ちよ…太一さん？大輔!？」

お互い別々の理由で、直ぐさま教室を出ようとした。

背後には、一夏の驚きの声と真耶の「えええええ!!？」と叫び声を出していたが、一切気にしていなかった。

先陣を切り扉に手をかけた大輔だが、開けた瞬間最大の障害が立ちはだかった。

そう、大輔たち1年1組の担任の千冬が立っていたのだ。

「お、織斑先生…」

「どこに行くつもりだ、八神、本宮」

千冬は反論を許さないとやわんばかりの眼光で二人を睨め付けた。

だが、そんな千冬の眼光を受けても二人は一切怯むことはなかった。

「すみません、織斑先生。でも、俺は……俺たちは行かなくちゃいけないんです」

そう言い切った太一の、そして大輔の目を見て千冬は溜息をついた。

千冬はこの目を知っている。自身の弟のように、一切引くことをしない目。何を言っても、意思を変えないと告げている。

千冬は持つっていた出席簿で大輔の頭を叩いた。

「あだあ!？」

「むっ? いかんな、少し強く叩きすぎたか。頭から血が出ているな。八神、本宮を保健室に連れていけ。反論は認めん」

そして、半身ずらし目の前を開ける千冬。

大輔を見ればわかるが、大輔は一切怪我していない。千冬は千冬で、諦めない二人が教室を出る理由を作ったのだ。

二人は一瞬、顔を見合わせると直ぐに駆け出していった。千冬の横を通り過ぎる際に、千冬にだけ聞こえる声で一言告げて。

「ふん………礼を言うなら、始めからこんな事をするな、バカ者共が」

廊下を出た二人はそのまま昇降口に向かっていた。

けれど、そんな二人を呼び止める声があった。

「大輔さん！太一さん！」

「簪ちゃん!？」

「どうして、簪が？」

簪が二人を呼び止めるのだった。

「生徒会室に！お姉ちゃんも待ってます!!」

「わかった！」

簪の一言で、直ぐさま目的地を変更した。

階段を駆け上がり、廊下を走る三人はすぐに生徒会室にたどり着く。

蹴破る様な勢いで生徒会室に入る三人を出迎えたのは、置いてあるパソコンの前に立

つ楯無だった。

「……………急いでたのはわかるけど、扉を壊さないで欲しかったわ」

勢いのあまり、金具の部分が壊れた扉を驚愕と書かれた扇子を持ってそう言った。

「それは悪かったけど…準備は!？」

「もちろん、とっくに出来てるわ。太一さん♪」

パソコンの画面には、デジタルワールドへのゲートが開いていた。

楯無が持っている扇子を反転させると、そこには準備完了の文字とデジヴァイスが引つ掛けられていた。

太一もポケットからデジヴァイスを、大輔と簪もデイスリーを取り出した。

「デジタルワールドからのSOS信号…以前の元凶だったアポカリモンやベリアルヴァンデモンは倒したはずだし、また何かが現れたの？」

「それはわからねえ…だけど、何かがあったと思っただ方がいい」

「話すよりも先に、デジタルワールドに行きましようよ！」

二度もデジタルワールドの危機に貢献していた太一と楯無は、まだ落ち着いていた。けれど、猪突猛進な大輔は落ち着いていられず、こういった事が初めてな簪は不安で少し震えている。

こんな時にこそ冷静であるべきだが、それができない大輔に先輩コンビは少し呆れていたが、それが大輔だと苦笑もしていた。

「わかったわ。それじゃあ、デジタルゲート！オープン！選ばれし子供たち、出勤よ！」
楯無の掛け声と共に、一同はデジタルワールドへとむかった。

楯無や太一のデジヴァイスも大輔や簪のデイスリーの様に、デジタルゲートを開けるように改良されてあるのだ。

ゲートを潜りデジタルワールドにやってきた一同。太一と楯無の服装は変わらずI

S学園の物だが、大輔と簪の服装は変わっていた。

大輔は頭にゴーグル。無地のシャツに下側に赤、上側に紺色で二つを分けるように黄色のラインが入ったジャケット。黄色の手袋に、茶色の長ズボンになっている。子供の頃から、半ズボンから長ズボンに変わったくらいしか変化がなかった。

簪は頭に麦わら帽子。半袖のセーラー服、ショートパンツに黒のニーソックスに、青のシヨルダーバックとなっていた。

「ん〜…：やっぱり、なんかずるく感じるわ」

「ま、仕方ないだろ。それじゃ、来い！アグモン！」

「行くぜ！ブイモン！」

太一と大輔の掛け声から、お互いの専用機からパートナーたちが現れた。

その光に反応してか、近くの草むらが揺れる。

「だ、誰?！」

「簪ちゃん！下がって！」

「あれ?この匂いって…」

いきなりの事で過剰反応してしまう簪。

大輔は直ぐさま簪をかばうように前に出るが、アグモンが匂いで何かを感じ取った。すると、草むらから長い耳がぴよんと現れる。

「あの耳って！」

「かゝたなゝゝ!!」

「わっ!?!ちよ、ルナモン!いきなり飛び出さないでよ!」

*

ルナモン

楯無のパートナーデジモンで母乳類型の成長期デジモン。月の観測から生み出されたうさぎに似た姿をしており、その耳は高い聴力を持っている。必殺技は額の触覚から綺麗な水球を放つ『ティアーシユート』だ。

*

ルナモンが飛び出すと、同じ草むらから別のデジモンが飛び出してきた。

「いっししし、簪。びっくりしたか?」

「もう……心臓に悪いよ、コロナモン」

*

コロナモン

簪のパートナーデジモンで獣型の成長期デジモン。太陽のデータと融合し生まれた正義感の強いデジモン。必殺技は炎の力で熱くなった拳を連続で放つ『コロナックル』と炎の力を額に集中させて放つ『コロナフレイム』だ。

*

コロナモンは、現れると同時に辺りを見渡し大輔を凝視し始めた。

「な、なんだよ、俺を見て」

「へえ、お前が簪のだからいす「こ、コロナモン！ちよつと黙ってて！」もごもご……」
コロナモンが余計な事を言いそうになり、簪が顔を真っ赤にして口を塞いでいた。

その一連の動作を、大輔は頭にはてなを浮かべていたが、後ろにいた太一たちはそろって溜息をついていた。

「はあく……まったく、大輔くんの鈍感も罪よね。それで、ルナモン？何があつたの？」
大きく罪と書かれた扇子を広げる楯無。だが、直ぐに表情を元に戻し、ルナモンに今までの事情を聞くのだった。

「実はね……最近、デジタルワールドで突発的に闇の力が濃くなるの」

「闇の力が？」

「そうだ。それを知った俺たちは調べてたんだが、つい先ほどガブモンとの連絡が取れなくなった」

「そんな!?ガブモンが!!」

「つ!!!……ヤマトはその事を知ってるのか？」

「ええ。既に伝えてあるわ」

ガブモンとの連絡がつかなくなったことに、一番の驚きを上げたのはアグモンだった。

アグモンは、これまで幾度となくガブモンとぶつかり合った事があった。だからこそ、あのガブモンが敗れたことに驚きを隠せないのだ。

「なら、俺たちはこれからガブモンの搜索と同時に闇の力の搜索をする。ルナモン、コロナモン、案内してくれ」

「任せといて！」「オツケイー！」

「わかったわ」「了解です！」「……………」が、頑張る！」

「ガブモン、無事でいて」「いっくぞー！」

それぞれの返事を聞き、選ばれし子供たちISメンバーズはガブモンの連絡が途絶えたという場所に向かっていく。

コロナモンとルナモンを先頭に、太一と楯無、アグモン、ブイモン、大輔、簪の順で進んでいく。

黙々と進んでいく中、大輔はふと簪の方を見ると、震えているのがわかった。

「簪ちゃん、大丈夫？」

「う、うん…平気、だよ……………全然」

「そうには見えないんだけどなあ…」

体だけでなく声も震えていた。

これでは、誰がどう感じても大丈夫に見えないのだった。

「うん……ごめんね。やっぱり、怖いんだ……これから、もしかしたら暗黒デジモンと戦わなくちゃいけないのが……あはは、これじゃ選ばれし子供失格だね…私……」

「そんなことねえ!!」

「だ、大輔さん?」

簪の言葉を力強く否定する大輔。

その声に、何事かと前を歩いてきた全員が大輔たちの方を向くが、大輔は気にせず簪に語りかける。

「以前さ、太一さんのアグモンが操られて敵になったことがあんだよ」

「う、うん……聞いたこと、あるよ。デジモンカイザーだった賢さんに操られてたって」

「その時さ、本当は一番辛いはずの太一さんが辛いのを我慢してアグモンを攻撃してくれて言ったのに、俺は躊躇っちゃまった…その性で、余計アグモンにも辛い思いをさせて、めちやくちや情けなかったんだ」

「でも…最後は友情のデジメンタルでアグモンを助けたんだよね」

「ああ……でもさ、思っちゃまうんだよ。もしあの時操られたのがブイモンだったらって…その時俺は、太一さんみたいにブイモンを攻撃してくれて、言えるのかってさ…」

「大輔さん……」

「そう思うと……俺も怖くて仕方ねえ……俺だって、選ばれし子供失格かもな……」

そう呟いた大輔は、歩くのを止め、近くにあった木に頭を置いた。その拍子に、大輔のゴーグルは外れて地面に落ちるのだった。

簪はなんて言ったらいいかわからなかった。今まで、大輔の情けないところは見たことはあった。けれど、こんな弱気な大輔は見たことなかったからだ。でも

「でも、それでも大輔さんは戦うんだよね」

「ああ。俺じゃなくて、ブイモンが一番辛いのは知ってる。けど、俺は……俺は自分の心に、魂に正直でいたい！……ここで逃げたら、俺は絶対に納得できない。絶対に後悔する！だから、俺は……」

「それでいいだろ。大輔」

「太一さん……」

「そうそう。私たちだって怖いもの。簪ちゃんも大輔くんも、そう思うのはおかしくな
いのよ」

「俺だって怖い時はある。でも！大輔と一緒にならんだってへつちやらなんだ！」

「ああ、そうだな！わりい、簪ちゃん！ブイモン！ちつと弱いところ見せたな」

「う、ううん。大丈夫だよ」

「さーお話はもう終わりー！先に進みましょう」

楯無の合図により、再び歩き出す一同。

けれど、お互いの胸には一つの意思を抱いていた。

そう、例え怖くてもパートナーデジモンと…仲間といれば怖くはないと。

第15話 新たな光

「太一！」

「ヤマト！」

デジタルワールドにやってきてから、数十分が経った。

その間、ずっと森の中を歩いてきた太一たちは森の突き当たり、崖まで来るとそこには金髪の青年、石田ヤマトがいたのだった。

「ヤマト……ガブモンのことは……」

「……光子郎から聞いている。太一、もしもの時は……お前に頼みたい」

「……………ああ、わかった」

「ちよ、待つてください！太一さん！ヤマトさん！」

ヤマトの頭の中には、既に最悪のパターンがよぎっていた。

もしもそうなれば、今来てくれた内の誰かにガブモンを倒させる事になるだろう。そ

うなつた時の罪の意識を誰かに負わせる事はヤマトは許せなかった。だからこそ、一番の親友である太一にその役目を頼んだのだった。

けれど、大輔はそんな事を認められなかった。

「きつとガブモンも無事ですよ！もし何かあつても、なんとかあります！だから、そんな覚悟しないでください！」

「大輔……だけど、他に方法はあるっていうのか!?今までのパターンからイービルリングのような物で操られている訳じゃない！純粹な闇の力に飲み込まれてるんだ！それで一体、何体のデジモンを救えなかったと思ってるんだよ!!」

「ツ!!そんな……」

食つてかかる大輔だったが、逆にヤマトに胸ぐらを掴まれ今のデジタルワールドの現状を告げられる。

本当に方法がないことも、そして今まで同じような事が何度も起き、救えていなかった事を告げられてしまうのだった。

「そんな……そんなの、あんまりだよ……」

「俺たちに伝えられていなかったのは、色々と配慮されてたからかもな」

「ええ……太一さん、大輔くん、一夏くんの登場でIS学園も色々と混乱していたから。そんな中、何度も私たちが授業を抜け出したら、明らかに怪しまれる。それを避けるため

ね……」

予想よりも酷い状況に、簪は涙を流してしまふのだった。

太一や楯無は冷静に状況を分析しているように見えるが、両手は血が出るのではないのかと思うほど赤くなるくらい握りしめていた。

「ヤマトさん……おれ……俺……ッ！」

「……………悪い、大輔。ガブモンを失うかもしれないって思ってたせいで、気が立ってた」「そんな！俺も、何も知らない癖にあんなこと言つてすみません……」

叫んだ事で頭が冷えたのか、ヤマトはゆっくりと搦んでいた服を離れた。そして、お互いに今のできごとについて謝罪をするのだった。

ヤマトはポケットをあさり、ある物を取り出すのだった。

「みんな……これ、ゲンナイさんからだ」

「これって！」

「タグに紋章?！」

太一と楯無に手渡されたのは、かつての冒険で完全体に進化するために必要だったアイテムだ。

太一に手渡されたのは山吹色に太陽のようなマークが描かれた勇気の紋章。

楯無に手渡されたのは紺色に二重の円、円の間に幾つもの円が描かれている自由の紋

章。

「そして、これは大輔たちにだ」

「お、俺の紋章？」

「ああ。奇跡の紋章と絆の紋章だ」

「これが…私の紋章…」

大輔に渡されたのは金色にMのような文字、上と下の左右に菱形を描かれた奇跡の紋章。
章。

簪に渡されたのは藍色に五つの菱形が星を描くように並べられた絆の紋章。

それらが、それぞれ渡されるのだった。

「これらは擬似的な紋章でしかない。精々デジヴァイスの力を一時的に上げる程度の物らしいけどな」

「いや、助かる。あとは任せてくれ」

「うん。後は僕たちにまかせて」

「気絶させてでもガブモンは連れてきてあげるわ」

「いや、ルナモン？物騒だぞ」

「いっしし、まっあ、まかせといてよー！」

それぞれのデジモンたちもヤマトに励ましの声を送った。

太一たちはそれぞれ、ISを展開するとパートナーたちを抱き上げ崖の下に降りていった。

「まかせたぜ、みんな…」

ヤマト一人だけになった崖の上で、その声だけが木霊した。

* * * * *

崖の下もそこは森の中だった。

けれど、あたり一面が黒い霧に覆われていて視界がとても悪い。

「ここがガブモンの連絡が途絶えた場所か…」

「大輔くん、かんちゃん気をつけて。何が出てくるかわからないわ」

「いや、その必要はねえ。早速お出ました!」

「スピット・ファイアー!」

太一の掛け声とともに、アグモンが小さな炎を何発も吐いた。

吐き出された炎はまっすぐに飛び、近くの茂みに飛ぶと、茂みから何かが飛び出してきた。

「ギチギチイ!」

「昆虫型デジモンか」

「ちよ……ちよつと待つてて………出た！」

現れた昆虫型デジモンを視認すると、簪が目の前に現れたデイスプレイを操作し始める。

すると、

*

コカブテリモン

成長期 昆虫型デジモン ウイルス種

小柄だがとても力の強いデジモン。大きな角と前足により恐れられているものの、優しく温かなデジモンだ。必殺技は、自慢のツノで敵をすくい上げて弾き飛ばす『スクー
プスマッシュ』と大きな前足から繰り出す『ビートルラリアット』だ。

*

と、音声 flowed。

「なるほど、デジモンアナライザーか！」

「見事、光子郎くんの役目を担ってるわねかんちゃん！」

「簪ちゃんすっげ〜……よーし、成長期なら！いけえ、バイモン！」

「わかった！」

明らかに敵意の籠った目で睨んでくるコカブテリモン。大きな前足を振り回し、近くの木を砕き威嚇していくる。

大輔から指示を受けたブイモンは、コカブテリモンに接近していく。

ブイモンの接近に気づいたコカブテリモンは羽を開き、浮かび上がった。そのまま上空に行こうとするが、ブイモンは近くの枝に飛び乗り枝を移りながら接近していく。

『ブイモンヘッド』！

「ギギイ!!」

ある程度まで近づくと、ブイモンは木に生えていた蔓と掴み、ターザンの様にぶら下がりがりコカブテリモン目掛けて飛び込んだ。予想外の行動に驚き動きを止めたコカブテリモンにブイモンは『ブイモンヘッド』で叩き落とすのだった。

叩き落とされ地面に衝突したコカブテリモンは、目をぐるぐると回してしまっていた。

「よっしゃ、ナイスだ！ブイモン！」

「へへん、どんなもんだ！」

一撃でコカブテリモンを戦闘不能にしたことで、ハイタッチをする大輔とブイモンだった。

コカブテリモンは頭を強く打った事で気絶したようで、特に怪我はしていなかった。

「ひどいわね…本当は大人しいデジモンなのに…」

「まるでイービルリングや黒い歯車で操られたデジモンたちみたいだったよ」

「その割には、特に見た目に変化はねえよな」

「(ピクンツ) みんな、なにかくるよ！」

気絶しているコカブテリモンを見て、操られているデジモンたちの状態を確認する太

一たちだったが、デジモンの中でも高い聴覚を持つルナモンが何かを感じ取った。

すると、黒い霧の中からゆっくりとあるデジモンが近づいてきた。

「グルルルルツ」

「黒い…ガルルモン？」

現れたのはガルルモンだった。それも、本来なら白い毛並みに青い模様を持つのではなく、黒い毛並みに灰色の模様を持つガルルモンだ。

「太一！あのガルルモンから、ヤマトのガブモンと同じ匂いがする！」

「なんだって！それじゃあ、あのガルルモンはヤマトの！」

「…でも、色が違う？」

「おそらく、暗黒進化の影響ね…以前、アグモンもイービルスパイラルで進化したメタルグレイモンの色が違ってたわ」

「ブイモン！あのガルルモンを捕まえるぞ！」

「おう！大輔、進化させてくれ！」

「よっしゃ、任せとけ！」

現れたガルルモンから、ヤマトのガブモンと同じ匂いがあることを感じ取ったアグモンは、その事を直ぐさま太一に伝えた。そして、今までのことからガルルモンの変化を推測するのだった。

ガルルモンを見て、特攻隊長とも言える大輔はさっそく捕獲しようとブイモンを進化させるべくD-3を構えた。

「ブイモン進化！エクスブイモン！……あり？」

「なっ！進化できない!？」

「まさか…アグモン！お前はどうかだ!？」

「アグモン進化！グレイモン！…だめだ、進化できないよ！」

「そんな…ダークタワーもないのに…」

ブイモンやアグモンだけでなくコロナモンやルナモンも進化を試してみるも、進化することができなかつた。まさにこれは、進化を阻害するダークタワーと同じ効果がこの一面に広がっていたのだった。

だつたらと、大輔はダークタワーの効果を受けない例外を試す。

「だつたらブイモン！アーマー進化だ！デジメンタルアープ！」

「ああー！ブイモンアーマー進化！フレイドラモン！…まじかよ」

「何で…アーマー進化もダメなの…？」

アーマー進化はデジメンタルを用いることで進化できる疑似進化。故に、ダークタワーの進化阻害効果でも進化することができた。だが、この場ではアーマー進化すら阻害する程の力があるようだ。

「ガアアアアアアアア!!」

「くっ…皆…ここは一旦撤退だ!」

このままでは分が悪いと判断した太一は、体制を整える為に一度撤退することを提案した。

楯無と簪は声に出さないものの、無言でうなづく。けれど、大輔だけは拳を握りしめガールモンをにらみ続けていた。

「……………だっ!」

「大輔さん…!早く…!」

「俺はあっ!」

「おっ、おい…大輔!?!」

「ちよつと、大輔くん!?!」

睨み付けていた大輔は、急にガールモンに向かって走り出した。

いきなりの出来事で、太一もブイモンも固まって動けなかった。

「ブイフォース！デジメンタルアーリーアップ!!」

走りながらISを展開すると、そのままアーマージフトを行う。

大輔の目の前に、紺色のデジメンタル―誠実のデジメンタルが現れると同時に光に包まれる。そのまま光を突き抜けると青色と白色のアーマーをまとい、ダイバーと人魚を合わせたようなデジモン―デプスモンに近い姿へと変わった。

「アーマージフト！デプスフォーム！おらあ!!」

デプスフォームに変化した大輔は、勢いを乗せガルルモンに飛びついた。

背中に飛び乗られたガルルモンは大輔を振り払おうと暴れ始める。そのたびに、ブイフォースはガルルモンの体毛に触れる。

ガルルモンの体毛はミスリルの様に硬く、特にブレードとなっている部分はあらゆる物を切断する程だ。その体毛に何度も触れれば、大抵のISは直ぐにボロボロになってしまうだろう。だが、ブイフォームのデプスフォームは違った。いくら体毛に触れようとも、傷一つついていない。

それは、元となったデプスモンの影響である。

デプスモンは水中を得意とし、耐水・耐圧に優れている。その潜水能力は同じ人型のハンギョモンを上回り、ホエーモン並だと言われている。その高い耐圧能力は、圧

倒的な防御力を誇るのだ。だが、その反面陸上での活動ではかなり遅くなってしまうのだ。

「馬鹿野郎！何やってんだ！」

「大輔、無茶だ！すぐに手を放せって！」

「大輔くん！」

「大輔さん！」

太一たちが呼びかける中、大輔は一層離さないように力をこめる。

だが、いくらISを纏っているとはいえ成熟期の力に敵う筈がなくどんどん力が抜けていく。

そして…

「うわあ!?!」

ついに、ガルルモンから振り落とされてしまった。

振り落とされた影響で、ブイフオースはデプスフォームが解除されてしまう。

倒れた大輔に対し、ガルルモンはゆっくりと近づいてくる。

『「ティアーシート」！』

『「コロナフレイム」！』

『「清き熱情・クリア・パッション」！』

「大輔さん！捕まって！」

ゆつくりと近づくと、ガルルモンに、ルナモンとコロナモンの必殺技が飛ぶ。

二つの技は、お互いにぶつかり合い白い水蒸気を発生させる。

さらに、楯無のクリア・パッションを応用した霧でガルルモンを覆う。

いきなり周囲を霧で覆われたガルルモンは大輔を見失い、その隙に簪が打鉄式で大

輔を救出したのだった。

簪に連れられ、大輔は今いた所から1k程離れた場所にいる。

「馬鹿野郎！お前…何やってんだよ！」

「太一さん…俺…やっぱり無理なんです、ガブモンを見捨てるのが」

「だからって、あんな無茶する奴があるか！下手したら、怪我じゃすまなかつたんだぞ

!!」

怒りをあらわにする太一は、大輔の胸元を掴み怒鳴る。

この怒りは、無茶をした大輔を戒めるためのものでもあり心配しているからこそその怒りだ。

「だったら太一さんは…今まで危険だからって戦わなかったことがありますか!？」

「ッ!!」

「俺は戦います！ブイモンが進化できなくても、絶対に諦めない!」

そう言い放った大輔は、太一の腕を払い痛む体を見捨ててゆつくりと歩き始める。そんな大輔の体を支える者たちがいた。

「大輔、俺を忘れるなよ。進化できなくても、俺は大輔のパートナーだろ。大輔が行くなら、俺は地獄の底までだってついていくぜ！」

「ブイモン……」

「大輔さん……私はガブモンを助けられるのか分からない。でも、私も諦めたくない。諦めなければ何でもできるって知ってるから」

「簪ちゃん……」

「もちろん、俺も行くぜ！」

「コロナモン……ああ、行くこう！」

後輩組が離れていく中、太一は近くの木にもたれかかった。

そんな太一を心配し、アグモンと楯無は近寄っていた。

「太一さん……大丈夫？」

「ああ………つたく、情けねえよなあ………本当」

上を向き、独り言のように呟く太一。

その顔は前髪がかかかっていて表情が見えない。

「大輔の言うとおりで……昔の俺なら、きっと大輔みたいに諦めたりしなかった。

……でも、今の俺は……より現実を知って、何もかも思い通りにならない事を知っているから……理想・ベスト・よりも一現実・ベター・を取ろうとした。……俺たちには夢をかなえる力がある筈なのに」

「でも、太一さんはそれに気付けた」

「………刀奈？」

「だったら、今から変わればいいじゃない………ううん、今から戻れば」

そう、論してくれる刀奈の姿は……どことなく、自分の幼馴染であり初恋の相手である竹ノ内空を思わせた。

だが、太一は頭を振って考えを否定する。今ここにいるのは空ではなく、ずっとこんな自分といってくれた刀奈だから。

顔を上げる太一の眼は、今までのような落ち着いた眼ではなく子供の様な自分の描く夢を見る様な眼をしている。

「そう……だな。それに、後輩にばっか恰好つけさえておけるか!」

「うんうん、それでこそ太一だよ」

「つしゃ、行くぞ!刀奈!アグモン!ルナモン!」

「ええ!」

「うん!」

「当然ね！」

後輩たちを追い、走り出す太一たち。

彼らの胸には、先ほどまでの不安は一切ない。あるのは、未来を描く希望だけ。

彼らはまだ気づいていない、自身のISとデジヴァイス、そして紋章が輝いていたことを。

第16話

青き幻竜！ブイドラモン

デジタルワールドの奥深く、そこに一人の少女がいた。

「……………大丈夫、あなたたちなら理想を叶えることができるよ。そのために、私が動いてるんだもの」

少女の目の前には、大きなモニターが映し出されていた。

そのモニターには、大輔、簪、太一、楯無の4人が映し出されている。「少しだけ待ってて、今、行くから……………だいすけ」

そう呟いて、少女の体は0と1のデータへと変換され消えるのだった。

* * *

深い森の中、ガルルモンはただ力任せに暴れていた。

その牙で、ブレードの様な体毛で、鋭い爪で木々を次々と砕き、切り裂き、なぎ倒していく。先ほど、大輔たちとの戦闘がガルルモンの中にある膨れ上がった闘争本能を刺激した結果だろう。

ガルルモンが暴れるたび、木々に隠れていた昆虫型デジモンや植物に擬態していた植物型デジモンが逃げまどっている。

だが、木々に飛び移りガルルモンに接近するデジモンもいた。

「ガルルモンこつちだ!」

「やゝい、お前なんかぜんぜん怖くないもんね〜!」

ブイモンとコロナモンだ。

二人はガルルモンを挑発しながら、木々を飛び乗り逃げていく。

今みたいに馬鹿にしながら、時には地面に降り石ころを投げつけながらだ。

そうすることで、無差別に暴れていたガルルモンはブイモンとコロナモンにのみ狙いを定め、他への被害が一気に減るのだ。

そして、そのまましばらく逃げていくとその先には大輔が立っていた。

ブイフォースを純真のデジメンタルで進化した姿。白いアーマーに木の様な材質に見える籠手と木刀のような二刀のブレードを持ったヤシャフォームだ。

「さあ、来い!」

駆け抜けてくるガルルモンをすれ違う様に躲し、一瞬の隙を見てその木刀でガルルモンの足をはらう。

先ほどまで、全速力で駆け抜けていたガルルモンは、バランスを崩し転倒。獣型であるが故に、受け身をとる事ができず慣性の法則に従って転がっていく。

ガルルモンが転がって行く先には電気を帯びたネットが木々の間に設置されネットになっていた。

「グルッ！ガアアアアアアア！！！」

そのネットにガルルモンが絡まると、木々の上から幾つもの糸がガルルモンに向かって放たれる。

その糸にガルルモンがあたるたび、体にまとわりつきガルルモンの自由を奪って行く。

「…やった！みんな、ありがとう！」

『イーーーーー！！』

糸により自由を奪われ、帯びている電気で痺れているガルルモン。

そんなガルルモンの上空から、打鉄式を纏った簪が降りて来る。

簪の言葉を聞くと、先ほど糸が放たれた木々から黄色の幼虫型デジモンのクネモンが姿を現した。

「にしても、まさか他のデジモンに協力を頼むとは思わなかったな」

「その…クネモンのデータを見た時…きつとこの状況でいい方向に持つてけると思っ
て」

*

クネモン

成長期 幼虫型 ウイルス種

全身にイナズマの模様が入った幼虫型デジモン。顔と思われる部分にあるイナズマの模様は目にあたる器官なのかは解明されていないが、感情によつて形を変えるところから、恐らく目ではないかと言われているらしい。必殺技は硬い嘴から吐き出される電気を帯びた糸『エレクトリックスレッド』。この糸に絡まると強烈な電撃で気絶してしまふぞ。

*

「いくら成熟期とはいええ、何匹ものクネモンの糸を受けたんだ。これで動けないはずだな!」

「おうよ!さすが、俺のパートナーだぜ!」

見事、ガルルモンの捕獲に成功したことでブイモンとコロナモンがお互いに手を組み合わせ、らんらんと歌いながら踊っている。

「よっし、後はゲンナイさんにガルルモンを渡せばきつとなんとかなるー!」

「大事なところは人任せになっちゃうけど…私たちにできるのはここまでだよね」

大輔はブイフォースをヤシャフォームからライドラフフォームへ移行する。

ガルルモンは今も、クネモンのエレクトリックスレッドに絡まっているのだ。少しでも負荷を下げる為に、雷の力を持つライドラフフォームになったのだ。

「ガッ…グワアアアアアアアアアア!!!」

「どわあ!」

「な、なんだいきなり!」

大輔がガルルモンを持ち上げようとした瞬間、ガルルモンから黒いオーラが噴出した。

噴出したオーラの力はすさまじく、持ち上げるために近くにいた大輔を吹き飛ばすほどだ。大輔が情けない悲鳴を上げたことで、先ほどから踊っていたブイモンたちもこの異常に気付くのだった。

「そんな…糸が切れた」

「おいおいおいおい、これじゃ振り出しじゃねえか」

どうやら噴出したオーラの勢いでエレクトリックスレッドが吹き飛ばされたようだ。

ガルルモンは、今だ呆然として動かない簪に向かって駆け出し、その爪を振るうの

だった。

「簪ちゃん、逃げて!」

「あつ…!」

気付いた時にはもう遅かった。

振るわれた爪が打鉄式式の装甲を切り裂いたのだ。

続いてもう一度と言わんばかりに振るわれる爪は、簪から見れば命を刈り取る鎌にも見えた。

「今度はやらせねえ!」

速力の早いライドラフオームでの瞬時加速で、一瞬で間に入り込みサンダーブレイドで爪を受け止めるのだった。

「そのまま抑えてろよ、大輔! 『トゲハンマー』!」

「かんちゃんを傷つけた罪は重いわよ、ラストイー・ネイル!」

「いっくよ!」

「せーの〜!」

突如聞こえた頼れる先輩たちの声に従い、大輔はサンダーブレイドにより力を加える。

すると、蛇腹剣がガルルモンの体に巻き付き、その蛇腹剣のワイヤーをアグモンとル

ナモンが掴み、思いつきり回転した。その回転の勢いで、ガルルモンは大輔たちから引き離されていき、向かう先には赤い柄にサボテンの様な形をしたハンマーを持った太一が待ち構えていた。

「痛いのが我慢しろよ！『チクチクバンバン』！」

太一の言ったキーワードにより、より硬質化したハンマーを振り切り、ガルルモンを殴り飛ばした。

太一が使ったハンマーは、デジローダーをトゲモンのカードで変化したハンマー、トゲハンマーだ。細かいトゲを持つハンマーで、普通に使うだけでもトゲが刺さり痛い。けれど、キーワード『チクチクバンバン』と唱えることで、より硬質化させるほかそのまま飛ばすこともできるのだ。

そんな撲殺武装で殴られたガルルモンだったが、やはり人の力では大ダメージを与えることはできなかったのかまだ立ち上がるのだった。

「太一さん！アグモンも！」

「お姉ちゃん！ルナモンも来てくれたの？」

「あたりまえだろ！俺だって、ベストな未来を掴みたいんだ！」

「難しく考えるのはもう辞めね。今まで通り、今できることに全力を尽くすだけよ」

先ほど喧嘩した先輩たちの登場に、大輔たちのテンションはもうマックスに近いだろ

う。

だが、よりオーラを増しているガルルモンの体もつか不安を抱き始めていた。

先ほどから受けている過剰なダメージ、さらに全力に近い能力値を出されているかの様な姿。いくら、ヤマトのガブモンとはいえ、限界は近いだろう。

そんな時、大輔たちの前に一人の少女が現れた。

「なっ!?!女の子!?!」

「危ない!逃げて!!」

「ガアアアアアア!!」

突然現れた少女に大輔は困惑し、楯無はガルルモンが少女を襲おうとしていることに逸早く気づき逃げるようにと叫んだ。

だが、少女はそんな楯無に一度微笑むと一言呟いた。

『サンクチュアリバインド』

その一言で少女の目の前に、小さな光が生まれる。

光は二手に分かれ、それぞれがガルルモンの体を巻き付くように動き、両端が交差すると光の帯となってガルルモンを縛り上げていた。

「な、なんでペガスモンとネフェルティモンの合体技をあの子が使えるんだ?」

そう、少女が使った光は大輔の仲間タケルとヒカリのパートナーがアーマー進化した

デジモンたちが得意とする技だ。デジモンの使う技は例外を除けば他のデジモンも使えるという訳ではない。ましては、人間と思わしき少女がデジモンの技を使えること事態不思議でならない。

少女は本当に人間なのか？それとも、人型のデジモンなのか？

大輔たちには不思議でならなかった。

その時、少女は大輔たちにむかって無邪気な笑顔を見せた。

「大丈夫。わたしはあなたたちを傷つけないよ」

「あんたは…一体？」

「わたしの名前はノルン。イグドラシルに仕える者よ」

「イグドラシル？それって…何？」

「いろいろと疑問に思ってるけど、ごめんね。時間がないの。みんなのデジヴァイスを出して」

突然現れた謎だらけの少女が、突然デジヴァイスを出せと言っても、太一たちは直ぐに領くことはできなかった。あまりにも怪しすぎて、何を考えているかわからないからだ。

だが、この男は違った。

「ほれ、これでいいのか？」

「お、おい!大輔!?そう簡単にデジヴァイスを出す奴があるか!」

「そうよ!この子、あまりにも怪しすぎるでしょ!」

無警戒に言われた通りデジヴァイスを取り出す大輔に、太一と楯無は慌てていた。

一方で、あまりにも信用がないようでノルンは人知れず落ち込んでいた。

「確かにちよつと怪しいところがあるかもしれないけどさ、この子は俺たちを助けてくれたんだ。だったら、信じたっていいんじゃないかって思うんだけど」

「確かに、そうだけど……」

「それに、この子は俺たちを嵌めたりしない!そう感じたんだ」

大輔の言い分に、太一たちも一度お互いを見合うとデジヴァイスを取り出した。

これが本宮大輔という男だ。頭で考えるよりも直勘に身を任せて、ハマをする。だが、その勘が人に向かうときはどこまでも信用できる。大輔の仲間である賢は依然犯した罪で他の選ばれし子供たちからの信用は全くなかった。けれど、大輔だけは聞こえたという紋章の声を信じ、賢を信じていきジヨグレス進化できるまで心を開かせたのだ。

「その、悪いな。あんなに疑っちまって」

「ううん、いいよ。それじゃあ、始めるよ」

ノルンの前に出された4つのデジヴァイス。

ノルンはデジヴァイスに片手を向け、目をつぶるとデジヴァイスがそれぞれ光始め

た。

すると、デジヴァイスの形が変わり始めた。太一と楯無のデジヴァイス、大輔と簪のD-3はそれぞれ同じ形に変わっていく。

光が消えると、そこには新たなデジヴァイスが生まれたのだった。

「これは『デジヴァイスIC』。新しいデジヴァイスだよ」

「デジヴァイスIC……これがあれば、ガルルモンを助けられるのか!？」

「そう。このデジヴァイスは、あの暗黒の力にたいこうするために作られたデジヴァイス。ここの黒い霧はデジヴァイスの聖なる力をも上回るほどの闇を持っていたから進化ができなかった。聖なる力を持たないD-3ならなおさらだね。でも、デジヴァイスICなら進化ができる」

「つしやー!なら、さっそく行くぞ!ブイモン!」

デジヴァイスICを構えた大輔は、さっきからガルルモンを見張っていたブイモンに声をかける。

だが、そこから先はまったくといって動かなかった。

「で……どうすりゃ、進化できるだ?」

「大輔くん、わからずに進化させようとしたの!？」

「あ、あはは……デジヴァイスICに必要なのは、デジソウルと呼ばれるエネルギー。デ

ジソウルを生み出すのは大輔たち、選ばれし子供の思い。あなたたちが成長するにつれ忘れてしまった心が必要なの」

「私たちが…忘れてしまった心?」

ノルンの言葉に、簪は自身のデジヴァイスを見つめる。

簪は大輔たちとは違い、ベリアルヴァンデモンとの戦いで選ばれし子供になったため、今までデジタルワールドを救うための冒険をしたことがなかった。けれど、ノルンの言い分から簪にもデジソウルを生み出す心があつたことがわかる。

つまり、今までの冒険の有無を問わずに持っていた心が必要なのだ。ならばそれは、子供なら誰もがもっていたものなのだ。

「へっ、それがどうした」

「大輔?何かわかったのか?」

「俺は他のみんなと違って、馬鹿だ。姉ちゃんからよく言われるんだ。あんたは何も変わってないって。でも、馬鹿だからこそ!俺は、俺がこうなって欲しい未来のために進むんだ!!」

大輔の叫びと共に、大輔の右腕に青いオーラが灯りだす。

いきなりの出来事に、太一たちは驚くもノルンだけは笑っていた。

大輔は直観的に分かった。この光がデジソウルだと。

「うわあ!? 太一、まずいよ! ガルルモンの体が崩れ始めてる!」

「そんな…予想よりも、暗黒のエネルギーが大きい? 大輔! デジソウルをデジヴァイス I C にチャージして!!」

突如声を上げるアグモン。

アグモンの言う通り、ガルルモンの体は一部が少しづつぶれ始めていた。これは、デジモンのデータが体を保つことができないときにおこる現象である。さらに、サンクチュアリバインドも壊れる寸前だ。今ガルルモンが暴れだしたら、データが崩壊し死んでしまう。

「ああ! 行くぜバイモン!」

「OK! 大輔!」

「デジソウルチャージ!」

デジソウルをデジヴァイス I C にチャージさせる。すると、画面からデジソウルが飛び出しバイモンの体を包み込む。

「バイモン進化!」

バイモンの手足が一度分解されると、新たな手足に、体に、再構築されていく。

光の中から現れたのは、フレイドラモンでも、ライドラモンでも、エクスバイモンでもない新たな姿。

「ブイドラモン!」

エクスブイモンと比べ、よりガツチリと重量感を持つ肉体。白く鋭い3本の角。そして、胸にはXではなくVの文字。

ブイモンは新たな進化を遂げるのだった。

「エクスブイモンじゃない?」

「ちよ、ちよつと待つて……出た!」

ブイドラモン 成熟期 幻竜型 ワクチン種

ブイモンが原種であるエクスブイモンではなく派生して進化したデジモン。広大なデジタルワールドでもフォルダ大陸にしか存在しない幻の古代種。胸にある「V」型の模様からブイドラモンと呼ばれる以外その生態は謎に包まれている。必殺技は口から吐き出す高熱『ブイブレスアロー』

「派生進化だつて?」

今までとは違う進化を遂げたブイモン。

その進化は太一と楯無には覚えがあつた。太一が紋章を手にして直ぐの出来事、完全体に進化できるのは自分たちだけだという思いから無理に進化させてしまった完全体デジモン『スカルグレイモン』だ。だが、大輔のブイドラモンは暗黒進化のスカルグレイモンではなく、正規の進化で別の進化をさせたのだった。

「もう時間がない！デジソウルをもう一度チャージしてブイドラモンに力を！」

「ああ！まかせたぜ、ブイドラモン！チャージ!!」

「ガルルモン、こいつで元に戻れ！『ブイブレスアロー!!』」

放たれた青い炎の矢はガルルモンに当たると燃え広がった。だが、その炎は直ぐに消え残ったのは本来の青い毛並みのガブモンだった。

「い、いーい!!」

「「「「「「いやったー！ー！！」「「「「「」」

ガブモンを元に戻すことに成功した大輔たちは喜び合った。

ブイドラモンにはアグモンとコロナモンが飛びつき、ルナモンがその光景を微笑ましそうに見ている。

感極まった太一は大輔にヘッドロックをかけているが、かけられている大輔も笑顔だ。そんな大輔を簪は物語のヒーローのように思い、楯無は傷ついたガブモンを丈から学んだ医療で治療していく。

そして、ノルンはすでにこの場から消えているのだった。

第17話 燃えよ!ファイラモン

新たなデジヴァイスを手に入れた大輔たち、その力は新たな闇にも負けはしなかった。

その力で洗脳されたガブモンを救出し、他にも操られいたデジモンたちを開放した一同。だが、彼らの戦いはまだ終わってはいない。そう、戦いは始まったばかりである。今も、彼は戦い続けている。

「へい!フルーツミックス!これぞフルーツバスケット・クレープ!に特製バナナタル

ト！夕張メロンケーキお待ち!!」

「こっちはオムライスにシーフードピザ、からあげにフライドポテトできたぞ！」

彼らは戦っている。

厨房で。

授業のボイコットの罰として。

* * *

大輔と太一が教室に戻ってこれたのは、すでに放課後だった。

もちろん、その間の授業は一切受けてなく、千冬もせいぜい午前中には戻ってくるだろうと思っていたけれど、放課後まで戻ってこなかった二人を無罪放免とはしなかった。

最初はISを背負ってグラウンド100周を命じようとした。ただでさえ、ISを背負うことなどではしえないのに1周10キロもあるグラウンドを100周だ。日が暮れるどころか、何日かかるかもわからない。そこで止めに入ったのが麻耶だった。

麻耶からの提案は本日行われる太一のクラス委員就任パーティーで、料理をつくることだった。

あんな地獄のメニューの後で麻耶からだした提案はまさしく天国。二人には麻耶が女神に見えただろう。

そんなこともあつて、今大輔と太一は次々と料理を作っているのだった。だが、一部の者は納得いかなかった。

そう、同じく授業をボイコットしてしまった簪と楯無だ。

二人は大輔たちと違つてお咎めなし。

元々更識家が暗部であることも相まつて、二人がいなくなつても家の事情だと黙認されていたのだった。

そのため、二人は大輔たちを手伝おうとしたものの、これは罰であるが故千冬が許すはずもなく、大輔自身元からやろうとしていたことなので手伝うことができなかったのだ。

そんなこともあつて、太一のクラス代表就任パーティーが始まった。

『八神くん、クラス代表おめでとう~~~~!!』

「はは……自分で準備したせいか、嬉しくねえ……」

「まあまあ、そう言わないでくださいよ太一さん」

パーティーが始まってさつそく、太一は今までの疲れでうなだれているのだった。

「にしても、本当に太一さんは強かったよな。俺は戦えなかったけど、勝てる自信がねえ

や」

「ああ。無手に盾、さらにはライフルまで操っていたからな。対策をしても、別の武器で潰されるだろう」

「まったくですわ。しかもIS自身を自由に進化までさせて…底が見えませんか」

「さすがたつくんだよ〜！」

現在、太一たちのいるテーブルには太一、大輔、一夏、箒、セシリア、本音がいる。

開始前に楯無と簪を誘ったのだが、準備を手伝えなかったことを思っで遠慮したのだった。

その変わり、今度別にパーティーをしようと話し合ったのだった。

「はいはいは〜い、新聞部ですす！今、IS学園で最も有名な1年生「八神太一」くんにインタビューです」

パーティーが進む中、一人の女生徒がやってきた。

胸元のリボンを見れば、その女生徒が2年生であることが分かった。

「ではずばり！八神くん、クラス代表になった感想をどうぞー！」

「あーっと、とにかくやれるところまで頑張ります」

「ん〜、もう一声欲しいわね〜」

「たつくんたつくん、そこはお嬢様のために頑張る〜って言ってほしかったな〜」

「ばっ、本音何言って!!」

無難に答えた太一だったが、本音の爆弾発言により顔を真っ赤にするのだった。

そして、その瞬間を新聞部は見逃さなかった。その眼は、獲物を目前とした鷹のように鋭く太一を見ている。

「ほうほうほう!!これは、素晴らしい記事が書けそうです!タイトルとしては

『発覚!?男性操縦者八神太一とIS学園生徒会長更識楯無の熱愛疑惑!』ですね!!」

「おい、馬鹿!やめろー!!」

全力で暴走する新聞部に、太一も止めようとメモを書き留めていく手帳に手を伸ばす。

だが、新聞部は蝶のごとくひらりひらりと太一の手を躲していく。

そして、その場にいた大輔と一夏は自身の身の危険を感じその場を離れようとする。

「ふ、フフフ……こうなりや自棄だ!大輔!一夏!お前らも犠牲になりやがれー!!」

「ぎゃー!太一さん!頼みます、離してください!!」

「な、なんで俺までー!!!」

逃げようとする大輔と一夏を暗黒進化した太一に捕縛されるのだった。

捕まった二人は恋愛以上について強制的に語らされるのだった。

二人に逃げ場はない。なぜなら、女子高生とはこの手の話が好物だからだ。興味な

い振りをしている筈とセシリアも、何気に二人の背後に立ち逃げ道を塞いでいる。

大輔は初恋の少女である光のこと、失恋中のこと、今一番大輔の傍にいる簪のことなど聞かれ、所々太一と本音が余計な事を言っては場を盛り上げた。

一夏は一夏で、幼馴染である筈のこと、先日戦ったセシリアのこと、千冬の私生活についてなどを聞かれまくった。

その結果、I S 学園において、太一の嫁は楯無、大輔の嫁は簪、一夏はシスコンのと語り継がれるのであった。

* * *

そんな風に1年寮の食堂が盛り上がる中、I S 学園に一人の少女がやってきていた。その少女の名は、一鳳鈴音・ファン・リンイン・高難関であるI S 学園の編入試験を受け見事合格した中国の代表候補性だ。

だが、そんな彼女は今悩んでいた。それは

「(ハハ)お(びん)なのよー……!!!」

迷子になっているからだ。

I S 学園は広い。それこそ、某千葉にあるのに東京と名前にあるテーマパークよりも

広い。

毎年、IS学園に迷子が続出しているレベルなのだ。

「あー、もう！なんでこんな時に限って誰も通らないのよ！そうすれば、直ぐに本校舎の事務室までいけるのに……あれ？」

愚痴を言いながら歩く鈴音に、遠くからこちらに歩いてくる人影が見えた。

見えた瞬間ラッキー！と内心小躍りしそうな鈴音だったが、その人影を見てみると不審な点に気付く。

その人影は小さいのだ。

同年代よりも小さい鈴音。だが、その鈴音の胸元くらいまでしかない身長にやけにふら付いた足取り、帽子にサングラスにマスクに全身を隠すコートと不審者感まるだしな上、見えている肌はオレンジ色でやけに毛深いのだ。

だが、鈴音からしたらそんなことどうだってよかった。

何かあっても自身の専用機で返り討ちにできるから。

「あ、すみません！本校舎の事務室ってどこにありますか？」

「うえ!?お、俺に聞いているのか？」

「え、そうだけど……」

不審者に声をかけたらやけに挙動不審な対応を取られた。

そのあとも、突然後ろを向いたかと思うと、

「お、おい、どうするよルナモン！」

「どうするもこうするも、何とかするしかないじゃないコロナモン！」

なんて、二人分の話声が聞こえた。

「こ、コホン！ど、どうかしたかね、お嬢さん？」

「いや、だから道案内を頼みたいんだけど」

「お、お嬢さん？本校舎なら、そこが一番高い建物よ。受け付けは正面玄関から入れば、

直ぐあるわ」

「そ、そう、ありがとう」

鈴音がお礼を言うといそいそと不審者は去っていった。

そんな不審者を見て、鈴音はつい思ったことを口にした。

「IS学園って変なところね」

ちなみにだが、人影の正体はコロナモンとルナモンだった。

いつもそばに入れるアグモンとブイモンが羨ましくなり、ついデジタルワールドから帰るときにこっそり付いてきて、夜になると肩車にコートを着て変装して出てきたのだった。

その姿は、この近くを歩いていた楯無に見つかり、簪と共にこっそり叱られた後、アグモンたち同様ISの中に入るのだった。

* * *

翌日、IS学園は幾つもの噂が流れていた。

曰く、八神太一と更識楯無は婚姻関係である。

曰く、織斑一夏はブラコン過ぎて千冬様以外興味がない。

曰く、中国から代表候補性が転校してくる。

そして、本宮大輔と更識簪は恋人同士である、と。

(き、きや~~~~!!ど……どうして、私と大輔さんが……その、付き合ってる……なんて噂が流れてるの……!／＼)

先ほどから、噂について周りから囁かれている簪は赤面しながら机に顔を伏せていた。

既に耳まで真つ赤な簪。このままでは、顔から火が出てしまうのではと思わせる程だった。

『いっしっしっしーいいじゃん、簪。そうやって、大輔の事確保しとけばよ』

「!!……、コロナモン……周りに人がいるから黙って……」

簪の指に付けられた打鉄式式の待機状態である指輪から声が漏れる。そう、コロナモンの声だ。

ISの中に入っているコロナモンは、今の様に時々声をかけてくる。

しかも、声を出すことで自分が見つかるんじゃないかというスリルと簪のうろたえる姿を楽しみたいからとたちの悪いことだ。

このままでは噂とコロナモンのせいで、自分の心が持たないと思った簪は熱くなっている自分を冷まそうと席を立つのだった。

近くの水道で顔を洗う。ちょうどいい冷たい水が自身の熱を覚めるのを感じていた。

『おいー簪ー!』

「こ、コロナモン…だから、しゃべっちゃ…」

『んなこと言ってる暇じゃねえ! デジモンだ!! 近くにいるぞ!』

「えっ!?!」

何故リアルワールドにデジモンが?

そんな疑問がわくが、すぐさまISの通信を使って楯無たちに連絡を取ろうとするが手を止めた。

自分だって、選ばれし子供なのだ。ならば、これくらい自分たちで頑張ろう。そう思ったのだ。

「コロナモン! 場所を教えて!」

『了解!』

コロナモンの指示に従い、走り出す簪。

昇降口で靴を履き替え、走り続ける。

そして、IS学園の敷地のある森の様な所にそれはいた。

白いつなぎのような服に魔法使いを思わせる杖、マント、帽子。杖には氷の結晶のような装飾がされていた。これを太一と楯無が見たらこうつぶやくだろう、ウィザーモンと。

簪は眼鏡型のディスプレイからデジアナライザーを使い、データを見た。

「ソーサリモン 成熟期 魔人型 ワクチン種

別次元のデジタルワールドからやってきたワイザーモンの仲間のデジモン。光と氷の魔術を操り、祈りをささげると聖なる力で傷を癒す。必殺技は雪の結晶のついたツエから雪雲を呼び出し、凄いい吹雪を起こす『クリスタルクラウド』

成熟期…」

「見ろ、簪。あいつもガブモンと一緒にだ。所々黒く変色してやがる！」

「このままじゃ…ソーサリモンが危ない…！おねがい、コロナモン！」

「おっしやー！まかせとけ！」

簪の一言でコロナモンが飛び出した。

先制攻撃だ！と言わんばかりに、突撃し頭突きをかますコロナモンだったが、ソーサリモンの体をすり抜け木にぶつかってします。

「あだあ!? な、なんでだ」

「…そつか！ソーサリモンは光の魔術を使う…だとしたら、あのソーサリモンは光が生み出した幻影！本物は別のところにいる！」

「へっ、ならあぶりだしてやるよ！『コロナフレイム』！」

コロナモンが額に炎を集中させて放つと、その炎は何もない空間から放たれた氷により打ち砕かれた。

「…コロナモン! 4時の方向! 距離は3メートル!」

「了解! 『コロナツクル』!!」

「『クリスタルクラウド』!」

「う、うわー!!」

簪の指示により言われた場所に殴りかかるコロナモンだったが、姿を現したソーサリモンの必殺技『クリスタルクラウド』により吹き飛ばされてしまう。

「コロナモン!」

「へっ、俺は大丈夫だ! 今度はこいつだ! 『コロナフレイム』!!」

再び『コロナフレイム』を放つが直前に氷の盾を作られ、蒸発により発生した水蒸気があたりを隠した。

水蒸気が晴れるころには、そこにはもうソーサリモンがいなくなっていた。

「…逃げたの?」

「いや、また隠れただけだ!」

ソーサリモンがいなくなったため、周囲を見渡し探すがやはり見つからない。

今、敵はどこにいいのか。そんな緊張感が高まる中、簪は自身の上に作られた氷に気が付いていない。

「簪、あぶねえ!」

「きゃ……コロナモン！」

簪を庇い、落ちてきた氷を受けてしまうコロナモン。

その体は既にボロボロだ。

「コロナモン……ごめんなさい……私のせいで！」

「へっ、これくらいへっちやらさ！それよりも、サポート頼むぜ！」

「……無理だよ」

「あん？」

コロナモンは既にダメージを多く受けているが、ソーサリモンは無傷なうえどこにいるかわからない。

さらに、コロナモンの足手まといになってしまっている簪は、自身に自信が持てなくなってきた。

「やっぱり、お姉ちゃんを呼ぼう……私がいたんじゃ、コロナモンが勝てなくなっちゃうよ……」

「簪……馬鹿言ってるじゃねえ！やっつと、やっつと楽しくなってきたところじゃねえか！」

「……………えっ？」

うつむき、今にも泣きそうな簪の胸倉を掴みコロナモンは叫んだ。

そんなコロナモンの表情はいつになく輝いた笑顔をしていた。

「簪、俺たちがパートナーになったとき、大輔たちがベリアルヴァンデモンを倒したのを覚えてるか?」

「うん…あの日のことは、絶対に忘れない…大輔さんの言葉も、コロナモンに会えた感動も…」

「なら覚えてるだろ!あの日した約束をよ!何時か必ず!楯無がした以上の大冒険を一緒にしようって!!今俺たちは、大輔が!太一が!!楯無が!!やつてきた冒険の入り口に立ってるんだ!もう楽しくて楽しくて止まらない!あの日のワクワクを思い出せよ!!」

「あの日の…ワクワク…」

あの日、コロナモンに会えて自分は何を思った。

デジモンにあえて、自分も特別になれた?違う。

やっと、更識楯無の妹という舞台から抜け出した?違う。

自分はどんな冒険ができるのか、だ!

何故忘れていたのだろうか。あの日のワクワクを。

だけど、なんとなくだが理解した。ノルンと名乗った少女の言いたいことが!

簪の眼には先ほどまでの諦めた感情はなかった。その眼にはかつてない程の情熱が宿っていた。

「コロナモン…こんな状況で…不謹慎かもしれないけど、精一杯楽しもう!!」

「おう!!」

瞬間、簪の右手に藍色の炎が灯る。

大輔とは色違いだが、間違いなくこの炎はデジソウルだ!

「いくよコロナモン…最初の…」

「ああ…俺の…俺たちの初めての…」

「進化だ!」

今に至るまで、コロナモンは自力で進化してきた。

だが、今この場で!二人の絆が新たなステージへの扉を開いた!

「デジソウル…チャージ!」

「コロナモン進化!」

デジヴァイスICから放たれたデジソウルを浴び、コロナモンは体を分解されていく。

今まで子供の様なコロナモンは、翼の生えた獅子へと進化した!

「ファイラモン!」

「ファイラモン 成熟期 獣型 ワクチン種

“空を駆る獅子”と異名を持つ獣型デジモン。デジタルワールドのとある遺跡を守護すると言われ、面倒見のいいリーダー的存在でもある。必殺技は全身に炎を纏い、上

空から突撃する『フレイムダイブ』と炎を纏った前足で敵を切り裂く『ファイラクロー』、額に全身の炎を集中させた火炎爆弾『ファイラボム』

これが、コロナモンの進化……!!」

「すげえ、力がみなぎる!もう負けないぞ!」

ファイラモンが翼を使い空を舞う。

翼を飛ばたかせるたび、火の粉が舞い落ちると、一部の空間が歪んで見えた。

「見つけた!ファイラモン!そのまま急降下!」

「ああ!止められるものなら止めてみる!『フレイムダイブ』!!」

炎を纏ったファイラモンが歪んだ空間めがけて急降下する。

そこから現れたソーサリモンが『クリスタルクラウド』で反撃するが先ほどと違い、ファイラモンの炎が吹雪を溶かしながら進んでいく。

『フレイムダイブ』を直撃し、倒れるソーサリモン。決めるには今しかなかった。

「簪!」

「わかつてる!チャージ!」

「こいつで決まりだ!『ファイラボム』!!」

ファイラモンの全身の炎を集中した炎が獅子の顔をしてソーサリモンに放たれた。

『ファイラボム』はソーサリモンに触れた瞬間、爆発を起こし炎の柱を生み出した。

炎の柱が消えた瞬間、そこには変色した箇所が元に戻ったソーサリモンが残っていた。

すぐさま、医療用キットを取り出した簪はソーサリモンを治療するのだった。

「うっ…私は…?」

「動かないでください、今治療します」

「いや、構わない。自分で治すことができる」

正氣に戻ったソーサリモンが片膝をつき祈りをささげると、光があふれソーサリモンの体とファイラモンの体を癒した。

「綺麗…」

「選ばれし子供よ、すまない。迷惑をかけたようだ」

「ううん、大丈夫。平気そうだよかった」

「へっ、いいってことよ」

「まさか、私が闇の力に飲まれるとは…修業が足りないな」

「デジタルワールドへのゲート、開きますか?」

「すまない、頼む」

ソーサリモンは簪が開いたゲートに入り、デジタルワールドへと帰って行った。

その様子を、晴れ晴れとした表情で簪は見送っていた。

「へっ、ちった良い表情をするようになったじゃないか」

「そうかな?」

「おう!」

簪の表情は、今までで一番良い笑顔をしていた。

番外編 更識刀奈ちゃんの冒険

プロローグ

1999年。

その年の夏は、地球全体がおかしなことが起こっていた。

東南アジアでは全く雨が降らず水田が枯れ、中東では大雨による洪水が発生、アメリカでも記録的な冷夏になっている。

そんな中、サマーキャンプに来ていた七人の子供達は何も知らずに、それが誰も知らない冒険の始まりになるとは思ってもみなかった。

そして、ここにもう一人。神様ですら始まるとは知らなかった少女の冒険が始まるのだった。

* * * * *

1999年の8月1日、光が丘サマーキャンプ場。

今日、ここには多くの子供達がサマーキャンプに来ていた。キャンプ場で遊ぶ子供達

だが、中には、キャンプ場を離れたさらに上の方にある祠付近にまで来ている子供達がいるのだった。

そんな中、このサマーキャンプに参加していない子供が一人、その付近にいたのだ。た。

「ううう……（うう）、ど（こ）お？」

少女の名前は更識刀奈。

このサマーキャンプとは別に、家族でキャンプに来ていたのだった。少女の家は少し特殊で、あまり家族で外出することは少ない上、自由に遊べる時間が少ない。その為、このキャンプでハメを外していたのだが、結果として迷子になり上の方まで来てしまったのだ。

迷子になり、一人ぼっちになってしまったせいで不安が心を支配していく。次第に、刀奈の目には大粒の涙がたまり始めてきた。

そんな中、刀奈の目の前に白い物が降ってきた。

「あれ……雪？」

降ってきたものの正体は雪だった。

けれど、真夏に雪などおかしいとしか言い様がない。まだ小学3年生の刀奈でも、そのおかしさに気づき目を丸くしている。

徐々に降る量は増えていき、風も強くなっていった。このままでは、吹雪になる可能性が出てくるのだった。

幼いながらも、このままでは危険ではないか？と感づいている刀奈はパニックに陥っていく。

そんな、刀奈に救いの声とも思える声が聞こえた。

「おい、こっちだ！」

まだ声変わりもしていない男の子の声。その声が、刀奈を呼んでいるように聞こえた。

パニックに陥っていた刀奈だったが、その声を聞くなり一目散にその声がする方向に走っていくと、そこには祠があった。

そして、その祠の前ではゴーグルをつけた少年が手招きしている。

「ほら、早く中に来い！」

「う、うん」

手を差し伸べていた少年の手を掴み、刀奈は祠へと入っていく。

刀奈と少年以外他にもいることはわかるが、薄暗いためうまく顔を見ることができなかった。

ここにいる刀奈以外の子供たちは、サマーキャンプに来ていたメンバーなため、知ら

なくとも多少は身元がわかっていた。けれど、刀奈はここに迷い込み、見知らぬ子供たちの中にいるため、心の中では不安な気持ちでいっぱいだった。

不安な気持ちでいっぱいだったせいかわずかながら体を震わせて不安な気持ちを耐えていた。奈はしがみつき、わずかながら体を震わせて不安な気持ちを耐えていた。

けれど、不意に刀奈は頭を撫でられる感触があった。

まるで、大人の真似事をするようなぎこちない感触だったが、触れられている所は暖かさを感じ、不安な気持ちが安らいでいくのだった。

それから暫くして、風の音が止んだのだった。

もう大丈夫だろう、と感じた子供たちは外へ出ることにした。

「わあ、雪だ〜!」

外に出ると、そこは一面銀世界。真夏だというのに、雪が積もっていたのだ。

そんな中、緑色の服を着た刀奈よりも年下に見える少年がはしゃいでいた。

子供たちは、この少年のように雪を見てはしゃぐ子たちもいれば、おかしさに頭を悩ませる子供もいた。

すると、動きやすそうな格好をした少女が空を指差した。

「ねえ、あれ見て!」

「わあ!!」

少女が指差した先に見えたのは、虹色の円形。オーロラだった。

日本ではまず見られないオーロラに、刀奈だけでなくカウボーイハットをしている少女も声を上げても見入っていた。

「そんな…日本でオーロラなんて、おかしすぎますよ！」

「そうだよ。それに、このままじゃ危ない。早く大人たちの所に戻ろう！」

パソコンを持った少年が、叫ぶように言った。

子供たちの中で一人、非常用のバックと思われる物を持った少年も賛同し、一刻も早く大人たちの元へ戻ろうと提案した。

「おい！何かくるぞー！」

今度は、金髪の少年がオーロラの中を指差した。

オーロラの中心からは、7つの光が見えた。その光は、刀奈以外の足元に落ちてきた。落ちてきた光は、雪に小さな穴を作っていた。だが、その穴が光小さな物体が浮かび上がってくる。

子供たちはどンドン上空に上がっていくそれを、掴み見てみるとポケベルの様な形をしたものがそこにあった。

すると、オーロラがより一層輝き光の波が子供たちを襲った。

『うわあ~~~~~!!』

波に飲み込まれ、オーロラの中に消えていく子供たち。
祠の前には、誰一人として残っていないのだった。

刀奈とゴージャルのお兄さんとお餅さん？

「……い……か！」

「う、みゆ……」

波に飲み込まれ、オーロラの中に吸い込まれた子供たち。

その中で、唯一オーロラから出てきたポケベルのような物を拾わなかった刀奈は、いつの間にか気を失っていた。そんな刀奈を揺すり起こす者がいた。

「おい！大丈夫か!？」

「だいじょくぶく？」

「……………だえ……？」

気持ちよく眠っていたのか、寝ぼけて舌つ足らずな口調で自身を起こした人物が誰か問いかけた。

まぶたを擦りながら目の前の人物を確認すると、そこには先ほど自分を祠に連れて

行ってくれたGoogleの少年と肌色のお餅に長い耳が生えたような生き物がいた。

「Googleのお兄さんに……お餅さん？」

「違うよ。僕はお餅じゃなくて、コロモンだよー！」

「ぷぷつ……お餅つて」

「うう……太一も笑わないでよー！」

お餅呼ばわりされ、拗ねるコロモンを太一が慰め始めた。

その様子を、刀奈はどこか呆然と見ていた。それもそうだろう。自分は今まで、山の祠のようなところにいた。なのに、山ではなく森の中にいるのだろうか。

もしかしたら、このまま帰れないのだろうか。

そう考えると、刀奈の目には涙が溜まってきた。

「うっ……ひっく……」

「えっ!? お、おいどうした!？」

「うわくん! おとーさくん! おかーさくん! かんぎしちやーん〜!」

突然泣き出した刀奈に、太一と拗ねていたコロモンもどうしたものかと考え始めた。

だが、コロモンは人と会うのはこれが初めて出会った。なので、こんな時どうすればいいのかなんて思いもつかなかった。

けれど、太一は違った。何かを思いついたのか、太一はコロモンを手取る。

「よつと！」

「ちよ、太一く！何するの〜！」

「……………ふえ……………」

手にとつたコロモンを頭に乗せ、太一はそのままリフティングをし始めた。

始めは頭で、徐々に足を胸を使い大きく動いていく。それと同時に、リフティングさ
れているコロモンは目を回し、目が渦巻き状になっていた。

いきなり行われたリフティング。だが、刀奈にとつては新鮮なものだった。

今まで、家を継ぐために勉強、特訓と遊ぶことが殆どなかった刀奈はサッカー等のス
ポーツはテレビの中でしか見たことがない。それを目の前で行われて、刀奈はさつきま
で泣いていたのに今では目を輝かせていた。

刀奈が泣き止んだのを見た太一は、コロモンを少し高めに上げ、頭で受け止めた。

「すごい……………すごい!!」

「あはは……………こんなに喜ばれるとは思ってもなかった」

「太一……………こんなことするんだったら、あらかじめ言つてよ……………」

盛大に拍手をする刀奈に、太一は苦笑する。

辺りに拍手の音が響く中、その音とは別に草木が揺れる音が聞こえる。

「誰かいるんですか？」

「光子郎！」

「あつ！太一さん！それに、君は先程の祠にいた」

「こ、こんなにちは……」

光子郎と呼ばれる少年の登場に、刀奈は驚き太一の後ろに隠れてしまった。

その様子を見た光子郎は人知れず落ち込むのだが、直ぐに持ち直した。

「よかつた……やつと、誰かに会えました」

「光子郎はん、ひどいやないか。さつきからワテが一緒におったやないか」

「こ、光子郎!? そいつは？」

「ワテ、モチモンいいます」

「……目が覚めてから、ずっとついて来てるんですよ。どうやら、太一さんも同じようですね」

太一の傍にいる未知の生命体（コロモン）を見つめ、自身の知識の無い事に頭を抱えなくなる光子郎だった。